昭和37年12月13日第三種郵便物認可　昭和44年11月18日国鉄東局特別承認雑誌第245号　昭和46年2月1日発行　毎月1回1日発行　第10巻第2号通巻第98号

構造

特集　新左翼諸党派七〇年代の戦略

negative

2月号

構造

一九七一・二

目次

グラビア Foreigners in TOKYO……増永隆介……11

■街路樹

あやしうこそものぐるほしけれ……実相寺昭雄

断髪記……飯村隆彦

「異那人」……黒木和雄

……20

特集 新左翼諸党派七〇年代の戦略

プロレタリア革命の前衛か第二ブルジョア革命の附属物（反帝ナショナリズム）か……革命的労働者協会（社会党・社青同解放派）……26

―日本「新左翼」運動における「レーニン主義」のもう一段の克服のために―

内戦＝世界革命戦争の勝利にむけて、七〇年代権力闘争の地平を切り拓け……共産主義者同盟……38

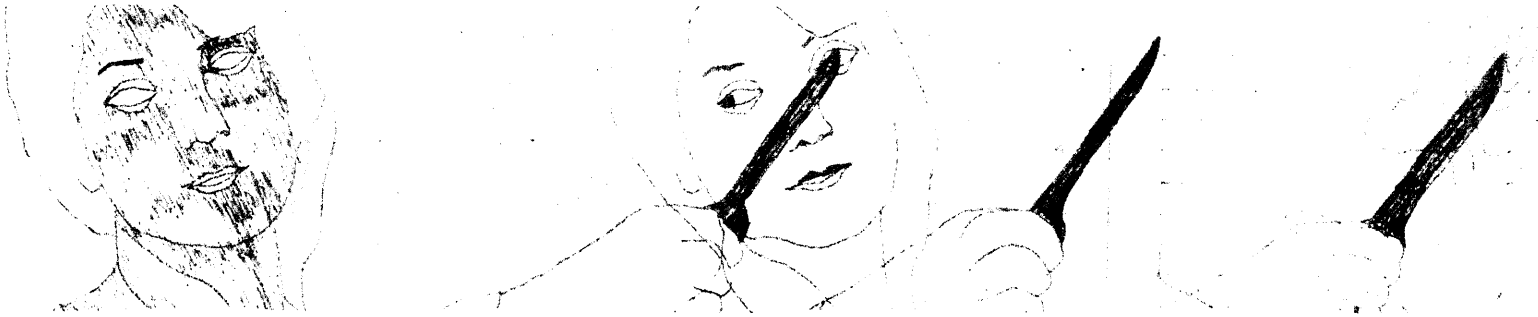
東アジア＝日本革命戦略と七〇年代革命党建設……共産主義労働者党……54

反スターリン主義革命的プロレタリア党の創成めざして……日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派……74

第三次アジア革命へ合流する極東解放革命を推し進めよ……日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）……94

日本プロレタリア独裁とわが綱領……日本共産主義革命党（旧統社同）……110

「革命の七〇年代」を切り拓く毛沢東主義日本革命党建設のために……日本マルクス・レーニン主義者同盟……124



書評

ロシア革命史の真相……小西善次
スタインベルグ著　荒畑寒村解説　左翼エス・エル戦闘史

現存からの肉体行為と反時間……山下基
富岡多恵子著　行為と芸術　十三人の作家たち

新刊紹介……150

映画　狂冷派彷徨す……平岡正明……152

演劇　■私と歌舞伎……鈴木忠志……154

復讐法の論理と私怨への加担……穂坂久仁雄……156
―チッソ株主総会と水俣病告発の闘い―

工学批判……高橋雄造……170

論潮

都市御拝行進・行進……小山正純……188
これは、ばかげたことなのだろうか……水戸理……192

〈戦線から〉叛軍・反軍産闘争の巨大な戦列を構築せよ―三菱重工攻撃反軍産闘争報告……新劇人反戦青年委員会反軍闘争者団……196

〈ミニコミ通信〉イオム通信・いま、このごろの意味……向井孝……198

〈中間報告〉光文社闘争……光文社労働組合……200

渦……212

編集後記……218

表紙・カット　伊藤青子

■特　集

新左翼諸党派
七〇年代の戦略

70年が終り、いま70年代闘争の方針・展望が闘う人々から求められている。そこで「構造」編集部では、革命運動を領導すべく闘いをすすめる新左翼各党派・同盟に〝70年代の戦略〟を次の要旨で明示してほしいと考え、原稿を依頼した（11月24日発送）。

「新左翼諸党派70年代の戦略」
　——党形成・軍事・統一戦線と大衆運動の問題を中心に——
(1)　新左翼運動総体の総括
(2)　新左翼運動の中で同盟の果たした役わり
(3)　70年代階級闘争の方針と展望
　——もたねばならぬ新しい闘争の質はなにか——
さらに以上を展開する中で次の具体的諸問題の位置づけ
(1)全共闘運動　(2)ノンセクト運動　(3)反戦派労働運動　(4)入管（とくに華青闘の提起への解答）(5)叛軍　(6)公害　(7)女性解放運動

なお原稿を依頼した同盟・党派は以下の八派です。
1.　革命的労働者協会（社会党・社青同解放派）
2.　革命的共産主義者同盟全国委員会
3.　共産主義者同盟
4.　共産主義労働者党
5.　統一社会主義同盟（当時）
6.　日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派
7.　日本革命的共産主義者同盟（第4インターナショナル日本支部）
8.　日本マルクス・レーニン主義者同盟

革命的労働者協会（社会党・社青同解放派）

プロレタリア革命の前衛か第二ブルジョア革命の附属物（反帝ナショナリズム）か

―日本「新左翼」運動における「レーニン主義」のもう一段の克服のために―

(一)「戦後第二の革命期」の開始

1、われわれは、発動された七〇年代〈アジア太平洋圏〉安保の階級的本質を、巨大に発達した資本制生産様式（帝国主義的工場制度）と、それに対応できなくなった「戦後」ブルジョア諸関係（特に対外関係）、という矛盾のブルジョア的解決（前者の飛躍的発展を可能にするための、後者の動揺し始めた諸関係の、上からの解体的再編成）として把える。

七〇年代は「戦後第二の革命期」の開始である――この時代把握は、戦後資本主義の発展を可能にしてきた従来の政治的、社会的諸関係の上からの解体的再編が、資本主義社会の「周辺部」から次第にその「心臓部」において、生産する諸個人のブルジョア的生活関係の根底からの動揺を引き起し始めている、ということである。このブルジョア的生活関係の動揺の中から起ちあがっていく労働者が、自分たちを制約する政治的社会的諸関係の再編＝危機のブルジョア的解決＝を許すのか阻むのかをめぐって、中間的社民政権の登場（その裏にファシズムをはらんで）を含めた「第二ブルジョア革命」か、正真正銘の「プロレタリア革命」か、が現実の日程に登ってきた時代、ということである。

しかも、すでに世界恐慌の衝動を危機感をもって感じとりつつある各国の帝国主義ブルジョアジーの選ぶ道は、「いつかきた道」――一九三〇年代の、米資本主義から始まる保護主義→閉鎖的ブロック化→信用関係の崩壊→世界貿易の一挙的縮少→帝国主義間戦争へ、ではもはやありえない。あたかも世界的につながる一つのプロセス・オートメーション装置であるかの如く、先進国を中心に巨大に集積され、そしてアフリカの奥地から「社会主義圏」内に至るまで拡延された資本＝ただ世界市場の連関の中で再生産活動することによってのみ富でありうる富＝を、一挙にガラクタ化させる覚悟でブルジョアジーどうしが相

争うことは、この「富」のもとにブルジョア的生活関係を通して隷属させられ、日々窮乏化させられていく運命にある。したがってこの「富」の総体を対象化することのできる、「世界史的個人」として大量に産出されているプロレタリアート＝全世界の労働者階級の、命がけの蜂起を呼び起さずにはおかない。そういう時代としての世界史的「現代」なのであるから、ブルジョアジーは、国際的「反革命階級同盟」の強化を至上とし、無政府的競争の部分的制限（「秩序ある自由貿易」）も含めて、全世界のブルジョア財産秩序の「安全」への政治的貢献度に応じた利害調整をすることで、資本主義世界体制の崩壊の危機の顕在を防いでいるのである。

2、SDR（「金」の裏づけのない国際通貨）の発動などは、危機の顕在の一時的陰蔽にすぎず、本命は、国際的分業関係の帝国主義的改編・合理化である。たとえば「PAFTA」（米、加、豪、ニュージーランド、日本の五カ国による「太平洋自由貿易地域」）構想に示されるように、いくつかの先進工業国の地域的共同化（通貨の統一、資本と労働力移動の自由化）による自由貿易圏の形成（水平分業――「都市」の再開発）と、そのもとでの低開発諸国の従属的経済圏の形成（垂直分業――「農村」の再開発）、という、地域的共同市場開発方式の採用であり、これによって構造的停滞期の世界貿易に活力を与えようとしている。

3、こうした「国際分業の帝国主義的改編」の急ピッチの進行は、次のような事態を呼び起している。すなわち、後進国はもとより、先進国内も含めて、社会のすみずみに至るまで、温存されてきた古い共同体（生産関係）を、極度に発達した帝国主義的工場制度の破壊的作用の前に解体し尽し、国際的独占資本の発展の新たな餌食に供することである。もとより、資本制生産様式のこの破壊的作用に抗して起ち上る人民は、多かれ少なかれ古い共同性（民族的・農村的……）を保って起ち上るが、攻撃の性格そのものが「侵略」（植民地的略奪）ではなく、発達したブルジョア的生産関係のもとへの「解体―再編成」なのだから、これを自己の積極的発展の契機として協調していこうとする階層（総体的には必ず没落なのだがだからこそ他の階層を排して生き延びようとする〝奴隷の成り上り〟部分）が抬頭し、帝国主義ブルジョアジーと同盟して、一方でこの「解体―再編成」によって文字通りルンペン・プロレタリアートに没落するしかないが故に最後まで反抗する人民階層を抑圧し、武器を手にして政治的に蜂起すれば、ブルジョア財産秩序の単に一地方的でない「国際的」秩序に歯向うものとして、局地的反革命戦争によって血の海にしずめられることになる。

こうして、後進国人民の「民族的解放―独立」闘争の革命性は、すでに歴史的にその意義と力を失い、革命的に闘い続ける部分は、その限りでは永遠の〈地方ゲリラ〉化を余儀なくされ、その運命を先進国プロレタリアートに委ねざるをえなくなっているのだ、といえよう。

4、戦後のNATO、SEATO、そして日米安保、などの、米帝を中心とした軍事的同盟関係も、この国際分業体制に見あう反革命階級同盟として再編強化されている。第二ブルジョア革命ならいざ知らず、革命が私有財産秩序の廃絶に手をかけるプロレタリア革命であろうとすればするほど、一地方的内乱といえども国際ブルジョアジーの反革命十字軍と面と向うことになり、「帝国主義の弱い環」から「とりあえず一国的に」社会主義革命が噴出し勝利する、ということは、ますますありえなくなる。だがそういう重圧によってますます「一つ

の世界革命」でしかありえないプロレタリア革命が招き寄せられているのだ、といえよう。

(二) プロレタリア永続革命の発射点

——今日における「労働者の状態」

1、われわれのこうした時代把握は、単に客観主義的な歴史の洞察としてのみあるのではない。プロレタリア永続革命＝世界革命は、生きた労働者大衆の感情的世界の永続的な無限の発展としてのみそうである。(同じ意味において「共産主義とは、現状を廃棄するところの現実的な運動である」—『ドイツ・イデオロギー』)とするならば、現代革命がプロレタリア革命であること(すなわち第二ブルジョア革命＝ブルジョア民主主義革命の「徹底」を通した二段階革命ではありえないこと)を前提とし、革命の世界性、永続性、暴力性、そして現在性を承認する党派は、血と肉をもった労働者の「現在の状態」の中に、この社会を転覆せんとする革命的・破壊的な情熱と力が存在することを見てとらねばならぬ。「ラディカルな束縛を持った一つの階級——市民社会に属しながら市民社会に属さない階級であり、一切の身分の解消であるような一つの身分であり、普遍的な苦悩を感じているために普遍的な性格を持ち、何か特定の不正ではなしに不正そのものをこおむっているためにどんな特殊的権利をも要求せず、また、もはや伝統的な大義名分ではなしに人間としての大義名文だけをよりどころとすることができ、ドイツの国家制度の結果に一面的に対立するのではなくその前提に全面的に対立するような一つの階層、そして最後に、社会の他のあらゆる階層から自分を解放すると共に社会の他のあらゆる階層を解放することなしには、自分を解放することができないような、一言でいえば人間性を完全に失っているが故に人間性を完全に取り戻すことによってだけ自分を自由にすることができるような、そういう階層を形成すること。社会のこういう解体をある特定の身分で現わせば、それはプロレタリアートである。」(『同』)——ブルジョア社会のこういう解体、すなわちプロレタリアートの階級への形成の進行を、労働者大衆の「現在の活動」の中に証明することができなければならない。

今日の日本における「レーニン主義」の諸党派が、労働者階級のあるがままの姿の中にきたならしさだけを見て、「革命的・破壊的側面」を見ることができず、あいも変らず「労働者階級は即自的にはブルジョア的存在であり、自然発生的成長の中から革命(革命党)が生れるはずがない」と決め込み、現在の世界情勢の「崩壊的動揺」に刺激されつつも、そこに帝国主義的工場制度の直下からの解放を求めるプロレタリアートの心臓の高なりを感じとろうとしないのは、先にも触れたように、彼らの実践の仕方、言いかえれば党組織路線上の問題なのであるが、そのサボタージュの結果、レーニンのいわゆる「蜂起」のマルクス主義的三条件(——(1)先進的階級に依拠せねばならぬこと、しかも彼らが死を恐れぬ決意をしていること、(2)味方の隊列のみならず敵の隊列内にも動揺と混乱が生じていること、(3)国際的に動揺が進行していること——)を、レーニン主義的、軍事技術主義的にのみ、受けとめ、生きた人間社会の情勢認識としては永遠の彼岸にやってしまい、それを引き寄せるのが「革命党による革命的実践だ」または「革命的意識の外部注入だ」という悪しきボルシェビズムにますます傾斜していっている。

新左翼各派が「革命戦略」を持とうとすればする程それが観念化し、主観主義的軍事路線へのはね上りや、人民主義的アジア後進国革命路線への舞い戻りになる、あるいは革マル派のようにイデオロギー批判のゆうれい的組織運動こそが革命的で現実的だとする——こういう今日の「反スタ」派全体の情況の根拠は、彼らの情勢分析がいずれも、「労働者階級の状態」についての生きた分析を欠落させている、というところに求めるべきではなかろうか。(労働組合の機関乗っ取りに熱心な革マル派の場合には、労働者階級の「イデオロギー」的世界の情勢分析しかない——念のため)

2、〈二〇世紀共産主義運動の長い歴史において、労働者は、自分の状態を自分では知りえない、「科学」とは無縁なものとされてきた。だが、労働者の現状を労働者自身が知る、というところから、この現状への労働者自身の自覚的闘争、現状を廃絶せんとする闘い——これこそ現実の共産主義——が始まる。〉このように位置づけて、われわれは、六九年から七〇年にかけて、三回にわたって「反安保労研(全国労働者研究交流集会)」を組織してきた。ここではその生の成果を報告する余裕もないし、目的でもないが、〈日本列島総体の帝国主義的工場制度化〉という姿をとった資本主義の七〇年代における巨大な発達が、労働者生活の総領域におよぼしていく破壊的作用の結果としての、七〇年代の労働者階級の状態——新たな窮乏化の特徴的実体を、次の原理的視点で明らかにしてきた。

人間を労働力商品として扱う資本制社会での、労働者の物化された生活過程は、労働力(商品)として彼が生産され、消費され、再生産され、あるいは修繕され、そして始末されていく全過程である。(工場制度と、そして社会制度的には保育、教育、医療、社会福祉、などの対象領域)帝国主義的工場制度のもとでの資本の破壊的作用がもたらしている労働者の今日的窮乏化状態は、機械体系の発達に逆比例してますます細分化されていく部分労働(分業)のもとに、部分奴隷、専門奴隷として「抑圧」を通して隷属させられ、その結果、本来精神的、肉体的に統一された力能として自由な社会活動＝協同的労働において全面的に発達させられるべき生産者の人間的存在(生ける社会的共同性)が破壊され、摩滅させられ、肉体的不具化、精神的退廃が進み、ついには殺されもしていく、という恐ろしい状況を呈しつつある。「公害」——特定地域に集積された資本主義的工場制度による地域社会の環境(自然と人間の生物的循環系)破壊、疾病(労災や職業病の慢性化日常化)、そして家庭争議や自殺、「犯罪」などの増大は、みなここから拡大された社会現象である。そうして、労働者の世代交替が加速度的に早まり、すなわち若々しい活力ある労働者が短期間のうちにボロボロにされ、一人前労働者としての寿命が短かくなってきている、というほどの労働者の窮乏化は、根源的には、工場の中での、直接的労働＝生産過程＝労働力消費過程において、時間で買いとられた労働力の、資本家による思うがままの最大限の消費、消耗という、賃金奴隷制度＝資本家による自分たちの労働に対する専制支配＝所有、ということろに基礎を置いており、しかもここから自由になりたいということが、労働者の感性的苦痛を通した感性的要求になっており、この支配(資本の社会的権力)にたち向う活動において即自的に、自分達の労働を自分たちの人間としての共同のもとに奪還していく共産主義的活動が無数かつ不断に普遍的に生み出されている。

3、このことを、最近の全逓の「郵便奴隷工場」とでもいうべき状態と、そこでの郵便労働者の闘いの中に、一例をとって見てみよう。

【全逓における労務支配の現状】

イ、全逓における「抑圧的」労務政策は、労働慣行のハク奪、業務指揮権の奪還を至上命令として、郵政監察班＝トラック部隊の派遣を武器に、戦闘的職場拠点を一つ一つ鎮圧しつつ、郵便事業の七〇年代秩序（送達速度の向上と安定）に見あう「郵便奴隷工場」体制の完成を目指すものであり、春から始まり、宝樹派民同に指導された二度にわたる全国的「労務政策変更」闘争の結果としての中央での「郵政大臣確認」にもかかわらず貫徹されてきた労務支配の性格と実体は、次のようなものである。

「郵政職員になった以上は」「国民の皆様の幸せのために重要な仕事をしているのだという責任と誇りをもって」「上司の命令は絶対に忠実に守って」「一生懸命に働く」――こういう奴隷的な労働者づくりに適応せず、「慣行と称するだらだらした一斉休息」に見られるような「不自然で非能率な」作業態度を改めようとしない「反抗的」労働者に対しては、その一人一人を、局長や課長が徹底していじめぬき、その人間的感情を挑発する。局内作業から時には局外集配勤務に至るまで、ストップウォッチとメモを持った監視班がマンツーマンでつけ廻し、「タバコを吸うな」「トイレが長すぎる」「足を組むな」「仲間どうしでおしゃべりするな」「上司に口答えするな、黙れ」「答えろといわれた時はまともにしゃべれ」等々、労働者の一挙手一投足が「上司の言葉はすべて業命である」とする業命乱発と、分単位、秒単位の賃金カット、そして時には暴力すら使って抑圧される（たとえば春の労変闘争で「杉並」に続く攻撃拠点となった調布では、支部長が職場に入っていくや「勤務中である」との理由で職制や郵政監察が襲いかかり、手足をとって外へ放り出すとか、職場集会を開けば、集団でなだれ込んで組合員をこづき廻すとか）。こうして労働者を人間としてガマンできないところまで追い込んで、反抗させ、ちょっとでも手を出せば圧倒的な監視体制で「現認！　現認！」と狂喜して暴力事件をデッチ上げ、懲戒処分し（今日ではネクタイかエリ首にでも手を触れれば「首をしめようとした」として確実に解雇である）、さらに刑事事件として警察に告発し、こうして「上司の命令には絶対にしたがう」「勤務時間中は管理者の思うがままに扱う」という服務規律をイヤというほどたたき込み、物量は加速度的に増え続けるのに人手はいっこうに集まらず慢性的絶対的に要員不足時代であるにもかかわらず、思いのままにならない労働者には「貴様のような職員は郵政省は必要としない、明日からどこかよそへ行ってしまえ！」（東京中郵局長）……。

ロ、「人間性を摩滅させる」――これが「抑圧的」労務管理の最も鋭い本性であり、郵政におけるそれは、何も「前近代的」な、あるいは「官僚的」な特殊なものではない。七〇年代の「労働力危機」を背景に抱えつつ、〈アジア太平洋圏〉という国際分業時代に対応して、商業独占＝百貨店がぼう大に発するダイレクト・メール、株式会社がはき出す信用状、そして肥大化する国家の官僚的行政諸機関が発する税金催促状などの公文書、等等が、「公共的」業務内容の可半を占めるようになった郵便事業の帝国主義的発展に不可欠なものとして、自然成長的に発達を逐げてきた郵便局という労働過程において、温存されている労働者の生活共同関係と資本主義的生産関係との共存を、徹底的に排除していく、「帝国主義的工場制度」の完成に向う〝過渡期〟における攻撃として、国鉄と並んで全逓労働者の上に集中しているのである。それが「業務指揮権の奪還・確立」というところに露骨に表現されているといえよう。

ハ、全逓労組は、春以来すでに五千人を越える組織切り崩しをかけられ、さらに全国で三人の自殺者まで出している事態を把えて、「全逓敵視」「殺人的労務政策」と非難してきた。しかし、先に見たように「人間性を摩滅」させられていく一人一人の労働者を「団結」すなわち生きた感性的人間の結合をもって「守りぬく」こと、つまり労働者の感情的世界の無限の発展を保障していくことこそ、今日の労務管理に対する必要な闘いなのであり、これなくしてどんなに立派な「協約」を上で結んでも現場はズタズタにされ、気の弱い労働者は精神的肉体的苦痛の個人的解決として「自殺」に走ったり、あるいは東京中郵で発生したように、いびられた労働者がカッとなって脇にあった千枚通しで課長を突き刺しに突進したりするのである。

ここで「団結」とは、争議権（争議行為）によって実質的に裏打ちされた戦闘的（すなわち暴力性をはらんだ）団結であるしかない。実際、今回の年末労変闘争の現場段階では、たとえば東京中郵支部の集会分会では「年休、病休、更衣時間を自由にとらせろ」という始源的権利要求の前に現場管理者を屈服させるまで闘おう、との意志統一に基づいて職場行動を組み、数日間にわたって官側の百名を越える管理職制集団の暴力的突撃も含めた戒厳令に一歩も引かない大衆的肉弾戦が組織され、さらに都内局では、郵便荷箱を積み上げての小型バリケード戦や、百名近くの隊列での局外路上制圧デモが組織されたりしている。

こういう戦闘的団結をこれまで組合自らが抑圧してきた上に「検証・自律・政策の三位一体の闘い」などと称して「耐えることが闘いなのだ」「不満があれば要求にして上へあげろ」とする民同の官僚的中央集権路線は、郵便労働者にとっては省側労務管理と同罪の、桎梏そのものである。

労働組合にしろ、あるいはすべての労働者党は、かかる労働者の状態の現実的解決のために格闘し、彼らの現在の活動の永続的発展として「プロレタリア革命」への生きた道程を生み出していくことを、自己の第一の資格としなければならぬ。

㈢　七〇年代の政治的展望

――社会運動＝政治運動としての、プロレタリア永続革命の発展

1　国際分業の帝国主義的改編をテコとして、日本の社会内部の分業が進み、それがまた工場内部の分業＝工場内支配秩序を飛躍的にうち固めることになる。すなわち、今見てきたような、労働者が一分一秒の休みもなく、労働監獄の中でその精神と肉体をボロボロにされ、消費生活過程でも資本の〈見えざる糸〉によって搾取され支配されていくような、〈日本列島総体の帝国主義的工場制度化〉は、反革命階級同盟を軸とする〈アジア太平洋圏〉の形成を背景にしている。

七〇年代の産業社会は、「一層高度な重化学工業化」をスローガンとして、巨大設備の連関を可能にする資本のますますの集中は、世界市場を分割支配する巨大企業の成立、国内的には寡占体制の確立となって現われる。

企業の合併集中または新鋭大工場への移転運動に対する、プロレタリア的・実践的批判の立場は、それが、労働に対する専制支配の体系（産業士官、下士官の系統図）の改編強化（集中）をもたらし、労働指揮権の飛躍的強化を結果する、ということにある。そして、こういう新たな搾取と支配様式に順応し、そこでの酷使に耐えうる「若年労働力」の深刻な不足を「七〇年代労働力危機」の基底にして、中高年層の没落と過剰化、農村や都市家庭の婦人労働力の産業への動員（その障害の突破のために「労働基準法」の改悪＝条件緩和が現実的日程に登ってきた）、そしてさらに、日雇や失業者をそれとして救済せずに再訓練機構に強制していくことも含めて、労働力移動の全社会的自由化と、外国人労働力の移入（〈アジア太平洋圏〉規模での自由化！）――こうした進行が、労働市場の長期的構造を変化させ、戦後の「企業別」を本格的に解体させ、横断的労働力市場の形成が七〇年代後半に本格化する。（七五年まではその過渡期をなす。労働組合の帝国主義的再編と「ヨーロッパ型」労働運動への移行の問題を、日本における「労働者評議会」形成の客観的条件の成熟として見ていくことが必要となる）

2　こういう社会内分業の発展に対応して、国家制度内部の分業の改編が進んでいる。第一に「七〇年代の労働力危機」別な言い方をすれば、資本制生産様式の発展の前提としての、労働に対する搾取と支配の不断の強化をもたらす資本主義的合理化運動が、「企業別」には深刻な限界にきていること」を打開するための国家の活動としては、①戦略産業への労働力誘導政策、②高福祉（帝国主義的上層プロレタリアート＝新中間層の形成）―高負担（全般的大衆収奪の強化）を原則とする社会福祉（年金制度や勤労者財産形成）政策、としてあるが、こうした国家の社会的諸制度の改編を通してもたらされる結果は、「人間尊重」「能力開発」を掲げた企業の労務管理システムと一体となって、労働者に対する選別―差別支配の体系の驚くべき強化であり、こういう労働者内部の身分的差別＝分断の社会運動を通して、最も発達した工場制度（――労働者を最も「科学的」にしぼりとる体系であるが故に、今では労働者が寄りつかなくなっている、重化学系製造業）のもとへ労働者を押しつけ、抑圧していく。ナチスの経済政策＝労働政策の、今日的復活の準備過程。

第二に、国家内部の分業は、反革命的階級抑圧の強化に専念する官僚的軍事的統治機構の肥大化、というところに集約される。七〇年代の焦点としてその中で特に重視しなければならないものとしては、

① 七五年実施を目ざす「国民総背番号制」――住民表、税金、職歴、各種免許証から、指紋、出入国管理、犯罪歴に至るまで、政府のもとに統一し、コンピューターで管理掌握。自治体行政はその端末装置化。

② 市民警察化に名を借りた公安警察の肥大化。市民の日常生活への日常的監視パトロールによる「犯罪者」の早期発見。

③ 「常習犯」の精神病患者扱いによる、政治犯（「政治犯」は最も頑強な常習犯だ！）の精神病棟への隔絶――「刑法」改悪。

④ 革命の国際的連鎖波及を断ち切る「出入国管理」――「外国人登録」体制のファッショ的整備強化。「スパイ罪」新設。

⑤ 米軍の肩替りを通した自衛隊基地の全国化と沖縄進駐――朝鮮半島を最も近い発火点とする反革命戦争への出動を蜂起の合図とする全国「治安出動」体系の完成。

3　かくして、七〇年代階級闘争は、ファシズムの帝国か、プロレ

タリアのコンミュンか――まさにこういう問題として展望され、われわれの任務が立てられねばならない。

工場制度のもとから、労働の自由な支配を要求する「感性的人間の生きた結合」として始まる、プロレタリア永続革命の出発点は、出発点として無数に生み出されていかなければならない。と同時にそれは、今見たようなブルジョア国家のファッショ的、反革命的な階級抑圧の、政治的・社会的全系統図に対して、その末端から頂点に向けて、「感性的人間の生きた結合」の拡大を通して、発展していかなければならない。「プロレタリア永続革命の発射点およびその発展の生きた全体」――これこそが、一〇、一一月から六月に至る、七〇年安保決戦闘争の全過程を通して、小市民的急進政治闘争と新左翼諸派の反帝ナショナリズム」への陥没に対する区別のための闘いを通して、明らかにしてきたわれわれの獲得物であった。

「帝国主義の政治的頂点と同時に、その社会的基礎を攻撃する」ということ、あるいは、「同時に社会（革命）運動である政治（革命）運動」ということが、ますます大切になってきている。すなわち、工場内―社会内―国家内を貫いての「分業の帝国主義的改編」が急激に進んでいくからこそ、いわゆる「市民社会全体を集約するものとしての」国家――あるいは特定の階級の特殊的利害を「一般利害」として表現するブルジョア的政治過程、そしてこれに向かって労働者階級を物理力として高揚してきた小市民的政治闘争――これらの外見的独自性を解体し、国家の階級性を、単に観念的にでなく、現実的に暴露し廃棄の対象としていく基礎（主体）が作り出されつつあるのである。

「支配に向かって努力しつつある全ての階級は、プロレタリアートの場合においての如く、当該階級の支配が、旧い社会形態全体と支配一般との廃棄の条件となる場合と言えども、自己の利害を同時に一般的なものとして表現するためには――いずれの階級も最初の瞬間においてはそうすることを余儀なくされるのだが――まずもって政治権力を奪取しなければならない。」（マルクス『ドイツ・イデオロギー』）――この部分に関する、「マルクス・レーニン主義」者たちの「レーニン主義」的一面理解（「政治権力の奪取」だけを取りだすことで叙述全体を一般化させてしまう）を、われわれは許してはならない。すなわち、労働者階級の現実的・特殊的利害（要求）を政治的・普遍的利害（要求）へと突き出していくこと、要するに労働者階級が階級としての独自の政治的支配能力を獲得していく生きた活動の発展上にしか、現実過程としての「プロレタリアートによる政治権力の奪取」の展望は切り開きえない。

4　〈革命とは結局、国家権力の打倒＝政治権力の奪取の問題である〉〈従って革命的暴力＝軍事の問題を避けて通ることはできない〉――然り、この命題が、プロレタリアートの階級への形成、すなわち「労働に対する専制支配」の体系そのものへの感性的苦痛と感性的要求から出発する労働者諸個人の「感情的世界の無限の発展」としての「プロレタリア永続革命」の発展において、いかに獲得されていくのか、について、われわれは答えていかなければならない。

問題を次のようにしぼろう――〈革命とは政治権力の奪取の問題であり、革命大衆の武装蜂起の問題である〉ということそれ自体の実践――革命的実践――は、誰によって（いかなる階級の、いかなる情熱＝衝動的欲求にもとづいて）遂行されるのか、と。

この（いかなる階級によって）という問題を、文字通り（カッコ）の中に入れてしまう今日の「レーニン主義」諸派の場合でさえ、その

実践が現実に関わろうとする実践である以上、いかなる階級に依拠せんとしているのかを具体的に問題にせざるをえないが、それが、〈革命的前衛党（革命の理論＝綱領）→革命の軍隊＝赤軍（軍事方針）→大衆の蜂起（大衆運動方針）〉という形で、逆立ちした系譜をもって「現実化」させられたところでは、その最後のところは結局、没落していく都市小市民であったり、貧農であったり、せいぜい産業の周辺部の未組織状態のルンペン・プロレタリア層であったり、それらのもてる無政府的急進性を「革命的人民」「革命的民衆」として対象化することで満足してしまっている。だから彼らの「革命的実践」は、右に〈……〉内に図式化したような、党と大衆との「分業」を前提として固定化して、そのスターリニズムについて省みようとしない。

「労働者階級の独自の社会運動（反合理化闘争）の発展としての、階級的政治運動（安保粉砕―帝国主義ブルジョア政府打倒闘争）」、「ゲリラ戦の結合を通しての発展としての正規戦（中央政治権力に集中する工場からの総反乱）」として、七〇年安保決戦闘争を闘いぬいてきたわれわれの場合に、「プロレタリア永続革命の生きた発展」における革命的実践とは、結局こうであるしかない。すなわち、①労働の苦痛から解放されたいとする労働者の切実な要求にもとづく「生きた人間の共同活動」の無数の形成（一つの社会運動化）と、②そのあらゆる領域からの政治化（直接に抑圧として立ちはだかる国家の官僚的軍事的統治機構の末端系統図への反抗）、③そして加えて、これらの一般的集約として、労働者人民への搾取と抑圧の強化を含む政府行政権力の諸行動に対する政治闘争、という大衆的活動を通してのプロレタリアートの即自的な階級への形成を前提としてそれによって生み出され拡がっていく「プロレタリアートの生きた結合の全体」の中にあって、「最も断乎とした推進力をなす部分」（プロレタリア前衛）が、現実に成熟しつつあるプロレタリア運動全体の「条件、歩み、および一般的結果を見通」しつつ、労働者の単に切実なばかりでなく資本と労働の関係の本質に触れる切実な階級の社会的・政治的要求を、現在直下に実現していく力と形態を、部分から突撃的に突き出していくという実践である。前衛的「部分」から始まっていくこの武装戦闘の経験は、革命運動内部の分業としての特殊に訓練された常備軍のそれではない。すなわち階級としての切実な要求を引っ下げた生きた人間の結合＝団結そのものが、その要求において死にものぐるいになっていく、労働者大衆の革命化の現実的過程の、部分からの開始である。そのことの現実性は、この前衛的「部分」が現に工場制度の直下からのゲリラ戦を諸個人の摩滅か全面的発展かをかけて資本家との間で極限的に実践し尽してきた「断乎たる部分」であり、かつこの「部分」にとって、支配階級が占有する公的暴力に対する、最初は防御的性格をもってのやむにやまれぬ「発展」の方策なのだという、プロレタリア的道義と衝撃力をもって、支配階級の暴力を暴露し、労働者大衆の武装の必要性へと帰っていく、〈プロレタリアートの即自的階級形成の全体↔その断乎たる推進力をなす前衛的部分〉の生きた相互関係にある。

室内娯楽品の総合メーカー
任天堂株式会社
京都市東山区福稲上高松町20 電話 京都(07575)五四一―六三二(代表)
東京都千代田区神田須田町一丁目三 電話東京(03)二五四―一七八(代表)

㈣ 「労働者政府樹立」に向けた、労働者階級の過渡的要求

1　七〇年代のブルジョア的政治過程は、ブルジョア議会を中心舞台にして、〈アジア太平洋圏〉安保＝反革命階級同盟の実質的完成を帝国主義ナショナリズムでおおい尽しつつ、日本の労働者階級を帝国主義ブルジョアジーとの運命共同体へと飲み込んでいく過程として進む。七二年沖縄「返還」事業の達成を花道として、対米、対アジアの戦後的諸関係の最後的清算と帝国主義的「自主的」関係の確立を任務としてきた佐藤内閣は、その政治生命を終え、それは同時に、「戦後第一の革命期」の余波に対抗しての保守合同以来の自民党による議会制独裁は、そのらん熟から一挙に崩壊に転じるだろう。そして、佐藤自民党政権の崩壊のあとには、社民（日本労働党）政権か、あるいは日中国交回復で結集する国民連合政権が登場する。公明党は、いったん露呈させてしまったそのファシズム的体質を巧妙に糊塗し、当面は反自民を鮮明にして社民と共同歩調をとりつつ、だが現実の階級闘争の利害をめぐっては手をよごさず、「ポスト社民」のファシズム勢力として、自民右派や、「勝共連合」等の反プロレタリア革命勢力（従って独占大ブルジョアジー）と影の連携をとりつつ待機する。日共の「民主連合政府」路線は、もっと右寄りして社民連合の中に席を占めるか、いずれにしても破産を余儀なくされるだろう。そしてこうした中間的政府諸形態をも、社会の劇的な崩壊の一時的収拾策として、帝国主義ブルジョアジーの七〇年代戦略が、基本的に貫徹されていくのである。

赤裸々な暴力をムキ出しにしたブルジョアジーの最後の醜悪な支配形態としてのファシズムが公然と「次の出番」に控えているからこそ、小市民（親帝社民、反帝社民、反帝民民）勢力は、「ブルジョア民主主義を守る」政府の実現へと労働者階級をかき立て、しかし民主主義の枠を越えて労働者階級の本源的階級要求がこの社会の前提の改革に進むことに対しては徹底して戒厳令をはってくる。だが、労働者大衆の大多数を依然として「平和と民主主義」ボケの政治的無関心にとどめることで成立するこの社民政権は、結局のところ、帝国主義的工場制度の発達がもたらす破壊的作用に抗して起ち上っていく働く階級の革命的力を自ら封じ、一方で他ならぬこの労働者階級の革命的衝動を見すえて、ブルジョア議会の背後で自立的に肥大化していく行政権力の反革命的暴力の前に無力化し、いつでもファシズムの突撃によって歴史のくずかごに投げ棄てられる「中間」政府である。だからこそ、「ファシズム前期」とでも言うべき七〇年代において、労働者大衆を小市民の影響下から徹底して区別し、あらゆる領域で労働者階級の階級としての独自の戦線へ組織化し、かつ大量に政治化をかちとっていく活動が極めて急がれねばならず、この活動を労働者階級の当面する要求の生きた総体において推進していくための、労働者階級の階級としての政治的要求＝過渡的諸要求（諸方策）のための闘いが、プロレタリア永続革命の現段階における焦眉の課題となっている。

2　労働者階級の過渡的諸要求の問題は、まず第一に、七〇年安保決戦を決戦として闘いぬくことによって、生み出した組織上の成果をもって始めて現実的な問題になった。如何なる要求（スローガン）や方針もそのために現実に闘うことを可能にし、その必要を生み出すような予備的な組織化なしには、絵に描いたモチのように空虚であり、実践への意欲をかき立てられるものにはならない。また、一つの闘い

の組織化は、その目指したものの上に新たな要求そのものをも生み出していく。

プロレタリア六月決戦は、七〇年安保の公然たる出発を阻止し、粉砕せんとする政治的課題にしぼって、職場（工場からの反乱）に出発点を持ち、かつ、地区的に共同して政治闘争を闘う〈六月共同行動委員会〉を生み出した。われわれは今日まで数多くの政治闘争を闘ってきたが、他ならぬ職場のゲリラ戦組織が政治組織に媒介されて、これほどはっきりと一切の地区的政治闘争に組織されたことはない。この〈六共委〉を組織的根拠にして、始めて多くの過渡的諸要求＝階級的政治要求のための闘いがわれわれにとって現実的問題になり始めたのだ。

この組織的根拠なしに、この諸要求を立てれば、政策審議会的政策に堕してしまうほかはない。トロツキーの「過渡的諸要求の綱領」は、この階級として行動する組織という基礎をもたないため、結局現実的な力を持つことがなかったし、またその要求も、革命への過渡的要求となりえないものをも含んでいる。

3　労働者階級の過渡的諸要求＝階級としての政治的要求の闘いは、第二に、今日の主要な帝国主義の攻撃に真向うから対決しつつ、しかもそれが帝国主義的近代的に発達しつつある資本制生産様式そのものの廃棄に向かい、かつそれを準備するものでなければならない。公明党の政策は無論のこと、民社のみならず日共の「諸要求」「諸政策」も、資本制生産様式の廃棄に向かうものではなく、むしろ非常に慎重に排除されている。

二段階革命路線の反動性の核心はまさにこの点にあるのだ。そして、中核派を筆頭とする今日の「反帝ナショナリズム」の急進諸派も含めて、自民党政府と対決するといい、帝国主義に対決するとしながら、資本制生産様式の廃棄に向かわない諸要求は、だからこそ、その要求の実現する程度に応じて政府を強め、労働者大衆を保守化し、少なくともその革命的退潮を押し止めんとするものだ。

4　そこでわれわれの過渡的諸要求の闘いは、労働者階級の階級としての独自の勢力への形成を促すものとして、プロレタリア統一戦線とそれを秩序づける「労働者党」を、階級的に生み直していく現実的前提となる。

二〇世紀「共産主義」運動、特にスターリン以降の運動、第三インターの破産の中から社民化の道を辿った殆んど全ての「労働者党」は、大衆の現実的生活に関わる政治的要求を問題にすると共に、大衆化したが、同時に保守化もした。これに対して「革命党」は、この現実生活を無視するかのように「理想」を掲げて登場した時に、「革命的外観」をもったが、しかし少数者の運動に止まり、圧倒的多数の労働者大衆を帝国主義社民に包摂されたままで残し、ファシズムの前に撃破されて敗れた。この二極分解を止揚するためにわれわれは、労働者大衆の現実の要求を階級の要求として突き出していくことに成功しなければならない。

革マルのように、「国家＝政治権力を打倒するための政治闘争（＝革命闘争）などとは区別された、大衆運動としての政治闘争（つまりその時々の政治的諸要求を汲み上げつつ闘われる政治闘争）」（『日本の反スターリン主義運動』）――などといって大衆の「その時々の政治的諸要求」から階級的要求を蒸発させてしまった「過渡的要求」も、革命への過渡をなす要求ではありえない――ただしその革命が第二ブルジョア革命ではなくてプロレタリア革命である限り。

これに対してわれわれが問題にしていく過渡的諸要求は、すぐには労働と資本との関係に本質的な変化をもたらさない、労働者大衆の切実な当面する要求でありながら、同時に労働者大衆の将来の解放に向かっての革命的成長を促すような要求である。つまり、労働者階級にとってその部分的戦闘の直接の勝利が、労働者の当面する苦痛の部分的緩和をもたらす直接の成果になると共に、しかしそれを獲得することによって保守化してしまうことなく、「真の成果」＝将来の一般的解放に向かっての新たな出発点になるような二重の意義をもった要求でなければならない。そのような革命的永続的成長のための過渡的方策でもあるのだ。

5　そこで最後に、労働者階級の階級としてのこの要求は、支配階級に向かって突きつけ、その利害と意志に反して政府に実現をせまる要求であるから、たとえ政府にそれを執行させても政府の権力を強めることにはならないし、また支配階級の政府が拒否すれば、その闘いは政府打倒に発展して、労働者階級の政府が自分で実現もしてゆくべき要求であってこそ、それは労働者階級による政府樹立に向かう要求である。そしてこれは「労働者の福祉と地位の向上」を掲げつつも、資本制生産様式の発展が生み出す社会の階級的亀裂をぬい合わせるため、労働者階級に要求の自主規制を求めてくる中間的社民政権に対する場合も同じである。すなわち、階級としての切実な要求を、他の何ものにも委ねずに、自分たちの手中に握りしめて離さない活動が、正真正銘の労働者政府の樹立に向かっていくと同時に、一方でソビェト的権力基礎にふさわしい地区的労働者評議会へと労働者を結合させ、かくしてその一つ一つの勝利と敗北を通して労働者階級による権力奪取へと不断に促進していくような、労働者革命に向けての「過渡的諸方策」である。

【こうした観点をふまえての、現在特にさしあたって重要な過渡的要求として、①帝国主義の対外政策に対する闘い＝労働者階級の国際連帯のための闘い、②入管、反軍、沖縄闘争方針、③社会的諸制度の帝国主義的改編に対する闘い（租税制度、住宅、教育、保育、医療、社会福祉、交通等「公共」事業、自治体、都市問題、等）、④工場制度に対する闘い（労働条件、公害＝労災・職業病、労働基準法、等）、⑤部落、臨時、婦人問題、これら各課題にわたって具体的に展開することが、時間的余裕から不可能であったので、最近の機関紙『解放』、および全国行動委員会連合（準）発行のパンフ『七〇年代労働運動の革命化のために』（反安保労研・基調報告）、等を参照していただきたい。加えて、特に今回立ち到りえなかった労働運動および組織論的領域――①労働者評議会建設に向かう行動委員会運動と労働組合をめぐる闘い、②プロレタリア統一戦線と労働者党建設のための闘い――については、別な機会があれば展開したい。】

共産主義者同盟

内戦＝世界戦争の勝利にむけて
七〇年代権力闘争の地平を切り拓け

はじめに

六九年「安保決戦」の痛苦な敗北から既に一年有余の月日が流れ去った。しかし今尚あの安保決戦の深さと拡がりの根源的な意味を把え返すことの意義は決して失われてはいない。国家権力の徹底した「一日軍政」とでも称すべき反革命体制の中で、止むを得ず「ゲリラ戦」でお茶を濁した部分に対して、我が同盟の最精鋭三百の赤ヘル部隊は、限界性はあったとは言え正規軍の指導に支えられて、中核派の諸君とともに蒲田駅頭に進撃し、機動隊への突撃を貫徹したことはまぎれもない事実である。しかしながら、安保決戦が鋭く突きつけた問題は、我が同盟が赤軍派との熾烈な分派闘争を闘い抜き、軍事の組織化に着手し始めたことに数段上回る国家権力の反革命体制の強化が進行する中で、従来の十・八以降の大衆的実力闘争そのものが解体され、またこれを担っていたところの全共闘・反戦の大衆的闘争機関もまた危機を迎えるという事態に他ならなかった。

それは一言で言うならば、日本階級闘争そのものの質的な転換の端緒であった。まさにこの問題をいかに把え、止揚していくのかが全ての革命的左翼にとって根本的に問われていたであろうし、今尚そうである。我が同盟は、かかる闘いの中で、赤軍派の対極に発生した軍事反対派＝叛旗・情況一派との党派闘争を断固として勝利的に推進し、真に七十年代階級闘争を領導すべく「党の革命」を闘い抜いている。このような主体的な立場に踏まえて、全国の戦闘的な同志諸君、活動家諸君へ革命的決起を訴えていきたい。

第一章　六〇年代階級闘争の意義と限界

一、六七年十・八羽田闘争による大衆的実力闘争の開始

六七年十・八羽田闘争における実力闘争の大衆的なかつ公然たる登場は、日本階級闘争の歴史に巨大な衝撃を与えるに十分であった。アメリカ帝国主義によるベトナム侵略反革命戦争の泥沼化の中で、アメリカ帝国主義と共同した国際反革命の強化に延命を試みんとする日本帝国主義の醜悪な策動に対するプロレタリアート人民の初めての公然たる反撃が開始されたのである。誤ったスターリニスト的な綱領・戦略に指導されていながらも、英雄的な自己犠牲をもって民族解放闘争を闘い抜いているベトナム人民に対する国際主義的な連帯は、単なる支援や合流ではありえないし、またあれやこれやのお説教でもありえない。十・八闘争はそのことを実証した。

即ち、「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の闘いである。アメリカ帝国主義の北爆の強行を契機として、国際的にベトナム反戦闘争が昂揚し、政治闘争の焦点を形成してきたのであるが、しかしながら未だに国際的な階級闘争の結合を具体化せしめ、世界革命の現実的獲得に向けた内実を持つものとして確定しきれなかった段階にあって、十・八闘争は、国際反革命同盟粉砕・自国帝国主義打倒という帝国主義国足下のプロレタリアートの場所的立場に踏まえた国際主義の内実を把みとり、しかもそのことが単なるイデオロギー的な問題としてではなく、暴力革命主義の原則を赤裸々に復権せしめ、帝国主義の打倒に向けたプロレタリアートの武装の第一歩として闘われたのである。

十・八闘争を出発点として、連続的に闘われた佐世保、成田、王子、そして十・二一における防衛庁―新宿―御堂筋の闘いは、日本階級闘争を画する大衆的な盛り上がりと歴史的な意義を持っていた。「国際主義によって武装された組織された暴力」がプロレタリアート人民の戦闘的なエネルギーを引き出し、これと結合することによって、戦闘的な大衆闘争、つまり大衆的な実力闘争、武装闘争が恒常的に闘われ出したのである。日本共産党や社会党の議会呆けした合法主義的なカンパニア主義に眠らされていた日本の階級闘争は、プロレタリアート本来の生き生きとしたダイナミックな闘いにとってかわられたのである。しかしながらプロレタリアートの「組織された暴力」は決して自然成長的に形成されてきたのではない。まさに我が同盟を先頭として、断固たる軍団を実現し、権力との先端攻防を担い切った革命的左翼の突出力によってのみ、それは形成しえたのである。従って十・八闘争以降の日本階級闘争は次の様な構造をもって進んできたと言えるであろう。

それは大衆的実力闘争が恒常的に闘われていく中で、国際主義の内実をめぐった流動が鋭い党派闘争・統一戦線の再編を通して展開していくという構造である。国際主義をいかに具体化していくのかという問題は、必然的にプロレタリアート世界革命の戦略・戦術の確立を要求したし、その下における戦略的実践を要求した。しかもそれは意識の上昇過程一般にとどまることを許さない。帝国主義国家権力との非妥協的な対決を前提としていたのである。激化するベトナム人民の闘いと真に連帯し、アメリカ帝国主義とこれに共同する日本帝国主義の侵略

反革命戦争を粉砕する為にはどのような闘いが必要であるのか、このことが眼目であった。生きた現実の階級闘争を見ることなしに、「スターリニスト・レジームなるスターリン」主義への誤った把握から、「相互依存と相互反発」なるブルジョア的な現象学でもって、「代理戦争」としてベトナム人民の闘いをブッた切り、小ブル平和主義に立脚した「反戦闘争」しか闘うことができない。革マル派（中核派も基本的には同じであった。）の諸君、あるいは国際ブルジョアジーと「国際プロレタリアートの対立」という観念性からしか現実を見ることができず、現代世界の歴史的＝過程的止揚の戦略に一切無自覚な社青同解放派の諸君、あるいは新左翼の歴史的苦闘を完全に清算し、後進国階級闘争支援屋に転落しつつあったＭＬ派の諸君等々、その戦闘性にもかかわらずかかる混乱した左翼階級戦線の中にあって、唯一我が同盟は最も革命的に闘い抜いてきたことを確信する。即ち我々は自国帝国主義打倒・国際反革命同盟粉砕の原則性を提起しつつ、プロレタリア世界革命の現実的推進に向けた世界党建設の闘いの中に、国際的な党派闘争の基準を、過渡期世界論としての現代世界のトータルな把握とその止揚の解明を媒介にして明らかにし、かつてマルクスが「支持をしなければならないが、同調する必要はないとして」提起した先進国プロレタリアートの後進国民族闘争に対する主体的立場の本質的意義を現在的に発展せしめ、世界革命の現実性を追求してきたのである。それ故に我々はベトナム反戦闘争のただ中において、日帝打倒・安保粉砕への飛躍を勝ちとるべく全力をあげてきたのである。

このような十・八羽田闘争以来の闘いは、国際主義の問題を突きつけることにより、闘う人民の国際的連帯が生きた現実的な物質力とならなければならないことを要求し、従って単一の世界革命の有機的結合を実現すべき新たな視点の確立を迫っていた。我々は単なるベトナム人民支援の闘いを止揚し、自国帝国主義との全面的な対決をもって、その第一歩を踏み出してきたのである。日本帝国主義が、欺瞞的な「和平ポーズ」をとりつつ、アメリカ帝国主義の侵略反革命戦争を支持し、更には経済的・軍事的に協力していることを、それがまさに日本帝国主義の戦略路線としてあることを、非妥協的な実力闘争を通して暴露することにより、日本階級闘争の方向性が極めて鮮明になってきたのである。連続する闘争の中で、とりわけ六八年の十・二一国際反戦デーにおける防衛庁・新宿・御堂筋闘争の大爆発と「勝利」の中で、我々は確かに日本帝国主義の反人民的策動を全面的に政治暴露することができた。具体的な機動隊との直接的な闘争そのものにおいては、我々は結果的には敗走を余儀なくされていたのであるが、しかしそれは決して政治的な敗北ではなかった。それはむしろプロレタリアート人民が端緒的に武装する段階において避けられないことである。革命的意義は、そのような武装の問題を帝国主義との闘争において、現実的に組織しつつ、日本帝国主義の攻撃との全面的な対決を、自国帝国主義打倒・国際反革命同盟粉砕、即ち日帝打倒・安保粉砕に向けた進撃として組織化したことにあるのであり、そこにおいて真のプロレタリア国際主義の発展があったのであり、全人民的政治暴露の内容が包括的なものへと発展したのであり、六〇年代前半からの質的な発展があったのである。一言で言うならば、我々は大衆的実力闘争という戦闘的な闘争戦術を駆使しつつ、リアルに日本帝国主義の攻撃を全面的に暴露し、軍事的な敗北を喫しつつも政治的には勝利し、階級形成を飛躍的に促進しえたのである。

この様な十・八以降の蓄積の中で、我々は明確に権力闘争の問題へ

と前進してきたのである。にもかかわらず十・八以降の我々の闘いが権力闘争への飛躍を貫徹すべき革命主体の内的な高次化において決定的に立ち遅れていたが故に、我々は先行的に肥大化した反革命弾圧の前に一敗地にまみれることを強制された。従って次にこの問題の意味を明らかにしていく必要がある。

二、六九年の敗北は何を意味しているのか

我々が政治闘争を闘うとき、確かに国家権力の打倒を直接的な課題とする革命闘争（＝権力闘争）と、これとは質的に区別されるべき大衆闘争との問題を明らかにしておく必要がある。しかしながら革マル派の如く、もっぱらその区別性を論じることのみを党派性とし、大衆運動の課題を「党の周心円的拡大」にのみ切り詰めることは、徹頭徹尾反動的な日和見主義であり、スタ党打倒までは絶対に権力闘争を回避し続ける（実は永遠に回避し続けることなのだが）という、疎外された宗派主義は根底的な誤謬であることを確認しておかなければならない。革マル派のように両者の間に「万里の長城」を築くことをもって、知たり顔する連中には、一片の革命性もないのである。明らかに大衆闘争の直接的な延長上に革命闘争を措定することは誤りであるが、我々はかかる単純なシェーマから権力闘争を問題にしているのでは決してない。

十・八以降の闘いの中で、我々は日本帝国主義の戦略的攻撃との全面的な対決を闘ってきた。そして全共闘運動の大衆的昂揚、反戦青年委員会運動における社民の影響力の排除と革命的左翼によるヘゲモニーの確立が示している如く、日本帝国主義の戦略的攻撃の一環をなすところの帝国主義的社会再編に対する闘い自身が、個別改良闘争の枠組の中に終始することなく（例えば第一次早大闘争と六八～六九年の教育学園闘争を比較してみよ）、全人民的政治闘争と結合してのみ展開しえるといった構造が進んでいた。それは一方では日本帝国主義の攻撃そのものが、個別的な政策ではなく、まさに全社会再編として極めて強権的にかけられてきており、一歩の妥協の余地さえ許さないものであったと同時に、他方では我々の闘いの質そのものが、日帝との戦略的対決の方向を明確にする中で、諸個別闘争を全人民的政治闘争から逆規定し、これに結合させて組織していく段階にまで、まさに革命的左翼総体＝反帝統一戦線の存在とその目的意識性により、萌芽的にではあれ到達していたことに根拠をおいていたのである。だからこそ我々は東大安田攻防戦を断固として闘い抜けたのであり、安田決戦が個別改良闘争の眼玉からは決して位置付け得ないが故に、当然ながら革マル派は逃亡したのである。

六九年の秋期の「安保決戦」を我々は単なる個別闘争の「決戦」として闘ったのではない。明確に権力闘争の時代の地平を切り拓くべく闘ったのである。階級闘争が諸々の個別闘争の展開を自立的になしていくという時代ではなく、全ての闘争が日帝との全面的な対決をなす全人民的政治闘争に収斂される構造が確立してくる段階においては、そうした全人民的政治闘争は個別闘争の収斂の意味を持つだけでは不断に組合主義的経済主義的なものへと転落していくのであり、明確に権力闘争との連関性を明らかにし、権力闘争への過程推進の構造を論理的にだけではなく、実体的に創出していかなければならないのである。かかる観点が革命的共産主義者の政治闘争に対する指導とならなければならないことは自明である。六九年秋期に現実的に問われたこ

とはかかる問題であった。

騒乱罪の適用、破防法攻撃を突破口にして、日帝国家権力の反革命体制は着実にしかも飛躍的に強化されてきた。日帝の狙いは、従来の如く、軍事的な攻防において結局は我々が敗北しても、その闘いを通じて我々の政治暴露はよりリアルに人民を把え、戦略的路線は一層鮮明になり、プロレタリアート人民の階級的団結が着実に前進していくという構造を徹底的に粉砕することであった。壊滅的な組織的な弾圧により革命的左翼の系統的な政治の展開を断ちきること、強権的な弾圧と小ブルを動員した市民社会内部における反革命的団結の形成を通して、大衆の自然発生的な戦闘性を眠りこませてしまうこと、これがその内容であり、七〇年安保改定期を乗り切り、全面的に侵略反革命と軍事外交路線を押し進めようとする日帝の露骨な攻撃であった。

しかも六〇年代後半に、ベトナム人民の英雄的な決起に牽引されつつ圧倒的な昂揚をもたらしていた国際的な階級闘争はおしなべて手詰り状態に逢着していた。フランス五月革命の敗北、西独非常事態法阻止闘争の敗北、アメリカにおけるSDS・BPPの分解、ラテンアメリカにおけるゲバラ＝カストロ路線の手詰り、チェコの「民主化」の右翼スターリン主義的な決着等々、あらゆる闘争が権力闘争の壁にぶち当り、後退を余儀なくされていた。そのことは何よりも我々に世界党建設とその下における世界綱領・世界戦略の確立の課題を突きつけたと同時に、我々自身がこの日本の地において、断固として権力闘争の地平を切り拓いていくことを要求していたのである。

我々はこのような国内的なかつ国際的な階級情勢をはっきりと確認していたし、そこにおける我々の革命的任務についても確認していたと言っても誤りではないであろう。にもかかわらず、何故に決定的な敗北を受けざるを得なかったのであろうか。革マル派が言う如く権力闘争への飛躍を目指して「安保決戦」を闘ったことが誤りだったのでは全くない。それは反動的な日和見主義者の口舌である。そうではなく、権力闘争への飛躍を勝ちとるべき主体的な推進構造において我々が余りにも立ち遅れてしまったことにこそ敗北の原因があったのであり、これを基軸にして総括が深化されていかなければならない。

第一点は、我々にとって常に問題となっていたところの軍事である。直接的には機動隊の弾圧をどのように粉砕していくのかという問題であり、本質的にはプロレタリア革命の暴力性のガイストがブルジョア国家権力の暴力装置をどのようにして又どのようなプロレタリアートの武装によって解体し得るのかという問題に対して、我々の解決能力が現実的に問われていたということであった。確かにそれは十・八以降の大衆的実力闘争における軍事が全人民的政治暴露における闘争戦術的な環としてあったこととは質的に異るものであり、暴力革命の現代的核心に迫るものであったのだ。このような段階にあって、「肉弾の思想」であるとか「〇×魂」であるとかの提起は、それ自体戦闘的なものであったとしても、何ら革命論的に解明されていないアジテーションでしかなかった。自らが「安保粉砕・日帝打倒」の戦略スローガンを公然と掲げつつ、このような安易な軍事の問題への係り方は許されないであろう。

我々は六九年四・二八闘争における「党の直轄軍」の端緒的な建設と、その総括の過程で、軍事の問題を一早く対象化してきた。十・八以降の軍事の質が、反戦青年委員会、全共闘へと外延的な拡大をなしてきつつも、それは自衛武装の質を抜けでておらず、直接的に革命の暴力に連続するものではありえないことを、我々は提起してきた。そ

の事は、「軍事を組織する党」の建設として対自化されてきたことである。軍事の問題の直観から出発し、そのトータルな把握をなし得ぬままに、自己の左翼性の証しとしての決意に解消してしまった赤軍派と血で血を洗う闘いを組織してきた我々は、党が軍事を組織しなければならないこと、そのことが大衆的実力闘争から権力闘争への飛躍を貫徹する決定的な条件であることを明らかにしつつも、その具体的な構造を解明すること、これに基礎づけられた圧倒的な軍隊建設を実現すること、更にはこれらを根底的に規定するところの過渡期世界の革命党建設の闘いにおいて、日本帝国主義の反革命体制の急速な強化に対して敗北してしまったのである。

第二点は、階級形成の問題の中に全共闘、反戦青年委員会運動を位置づけ、その意義の過渡的性格をはっきりと止揚していくことである。十・八以降の闘いの中で、六五年日韓闘争の渦中に、社会党の指導する青年労働者の大衆的組織として形成されてきた反戦青年委員会はその性格を一変させた。革命的左翼の労働者階級内部におけるケルン建設を実体的基礎として、突出す学生の戦闘的な街頭闘争と連帯する青年労働者の闘いは、組合指導部たる社会党＝総評民同と日共の日和見主義的指導と官僚的な締めつけを突破して、労働者本来の革命的な闘争へと発展してきた。それは、労働組合運動における同盟、総評指導部が資本の攻撃に対決することができず、逆に職場支配秩序・労務管理秩序の中に包摂され、プロレタリアートの団結を純粋に経済主義的なものへと固定化し、五十年代までの如く、労働組合が一定の限界内ではあれプロレタリアートの政治闘争機関としてもあるという構造が全く空洞化している中にあって、戦闘的な労働者の政治闘争機関として確立し、階級的団結を促進させていく意義をもつものであった。とりわけ社会党と日共の骨の髄まで滲みこんだ合法主義に「飼いなされ」ていた労働者階級の内部に、このような桎梏と化した既成左翼指導部に対決し、戦闘的な闘いを実現する組織が革命的左翼のヘゲモニーで形成されたことは、日本階級闘争史上画期的な意義があった。

全共闘運動は六八年後半から、一連の街頭政治闘争と大学における教育学園闘争との結合した相乗的発展のうちに生み出されてきた。とりわけ日本帝国主義の教育政策が、個別大学の相対的自立性をも許容

全ての獄中同志の自由な読書＝理論武装を保障するために！

獄中無料図書館

書籍のカンパをお願いします

図書救援センター

〔連絡先〕東京都中野区野方2の27の20
第三秋元荘一号室　中堂幸政気付

図書救援センターは獄中同志に無料で希望図書の差入れ→回収を行なっています。書籍および資金のカンパをぜひお願いします。本の種類は小説、社会科学、その他の専門書、マンガ、なんでもけっこうです。

メニュー

図書救援センター在庫図書目録『メニュー』を発行しています。御一報くだされば差入れます。

カンゴク・マガジン　好評発売中

獄中機関紙　獄中無料　獄外50円

しないところの全面的な総資本の意志の貫徹として、全社会的な帝国主義的社会再編の基軸の一つとして、排外主義的思想に吹きこまれた労働力商品の再生産工場としての帝国主義大学の確立を強権的に狙ったものであることに規定されて、従来の如く個別学園内での個別的問題をめぐっての学園闘争とは根本的に異るものとしてそれはあったのである。六五年に締結された日韓条約を突破口として、日本帝国主義は全面的なアジア侵略反革命を開始していた。それと同時に、社会構造総体の戦後的形態をもブルジョア的桎梏とし、新たな体制の確立に向けた全社会的な再編成の嵐が荒れ狂ったのである。大学に対する政府ブルジョアジーの政策は、とりたてた立法的措置そのものがなかったにもかかわらず（六九年夏の大学立法はむしろ秋期決戦への先行的弾圧としての治安立法の性格が濃いものとしてあった）、極めて体系的な大学の目的別化が労働力市場の要請に応じて、労働力の質の多様性の確保として押し進められ、学生存在そのものが完全に物化されたものとして改編されるものとしてあった。それ故に全共闘運動はかかる現実の進行を対象的に認識しえぬままに、そのような自己存在そのものを個体的に止揚せんとするノンセクト・ラジカルズを内包しつつも、問題の包括性故に、個別改良闘争の枠組の中に閉じこもることを突き破る内的動力を有していたのである。それは街頭における革命的政治闘争との結合が、革命的左翼の領導により恒常的に実現されていく中で、一層強まっていったのである。

従って、もはや全員加盟制の自治会に立脚しつつ、戦後体制内部での改良をめざすことでは決して闘うことはできなかったのであり、即自存在の場としての自治会が現実的な矛盾の展開の場としてあること、を踏まえつつも、新たな質の闘いを物質化せしめる主体としての全共闘が確立し、全国的な拡大が急速に進んでいったのである。それは反戦青年委員会とは本質的には同じ意義をもっていたが、しかしよりラディカルに発展し、従来の民主主義的団結が支配秩序へと転化しつつある段階における、プロレタリアートの階級的団結の発展した形態として確立したのである。

それ故に、反戦青年委員会、全共闘はプロレタリアート人民の即自的団結からの訣別と対自的団結の第一歩であったが故に、その強化の中に、次の飛躍に向けたドラスティックな苦闘を強いられる運命にあったのだ。まさに六九年一・一八・一九東大安田攻防戦、四・二八闘争をへる中で、かかる性格は特徴的に言えば、「教育学園闘争の全共闘」から「安保粉砕・日帝打倒への飛躍」として追求されていったのであり、それは一応全国全共闘結成の基調となっていったのである。

しかしながら、十・十一月闘争において現出した事態は、かかる全共闘、反戦の闘いそのものが脆くも敗れ去り、解体的危機に直面したことである、否正確に言うならば、全共闘、反戦そのものが、権力の強化の前に攻防そのものを担えなくなっていたのである。まさに権力闘争への飛躍を実践的課題とした段階において、全共闘の自衛武装は解体され、結集軸を喪失してしまった。階級的団結を促進するものとしてのその意義は大きな壁にぶつかってしまったのである。明らかに権力闘争を担うべきプロレタリアートの団結形態の飛躍が求められていたのであり、それはプロレタリアートの支配者への階級形成の主体的構造が、軍事の問題に媒介されつつ、ソヴィエトの問題として解明され、物質化されていかねばならないということを痛苦な実践を通して明らかにしたのである。

総括の視点は決してこの二点に尽きるものではないし、問題の指摘

にとどめた点については後に積極的にその止揚された内実を展開していきたい。とりわけ我々が権力闘争への飛躍を賭けて闘い抜いたことは、現代革命のガイストを解明すべき主体的立場を我々に与えてくれたし、そしてそうした闘いを領導すべき過渡期世界の革命党の質を問い直していったのである。第二次ＢＵＮＤの限界性故に、我々はかかる闘いをまずもって「党の革命」として開始しなければならなかったことを真摯に総括するとともに、にもかかわらず十・八以降の闘いを終始その最先頭に立って闘った革命的実践に支えられて、それを真実止揚し尽し、鉄の前衛党としての地歩を断固として構築し抜いたことを踏まえて、以下の積極的な提起を行っていきたい。

第二章　七〇年代恒常的武装闘争を闘い抜け！

一、現代過渡期世界と世界革命戦争

我々は権力闘争への飛躍を実現すべき闘いの中において、極めて実践的問題として、日本における権力闘争そのものの、現代過渡期世界の歴史性と空間性に媒介された再把握を迫られてきた。スターリニスト的疎外から解放されるべき我々の革命運動の世界史的解明は現実的な権力闘争の過程的推進と同時になされていかなければならない。

資本主義世界体制と「社会主義世界体制」の共存というスターリン主義的な世界認識は長い間プロレタリアートの革命的決起を押しとどめることにのみ役立ってきた。だが現代世界は決してそのような「平和」な世界ではない。全く逆にそれは「革命と反革命」の最後的な決着を問うという本質的規定を受けた時代なのである。一九一七年ロシア革命以降の世界は、資本主義という歴史的段階の革命的止揚が現実的に開始された時代であるにもかかわらず、世界革命の挫折とスターリン指導下のソヴィエト・ロシアの一国社会主義的固定化（とその単なる寄せ集めとしての複数化）故に、今尚資本主義の帝国主義段階という歴史的被規定性が帝国主義と疎外された「労働者国家」群の併存という現実形態をとりつつ現われる世界であり、それら総体が世界プロ独樹立による止揚への過渡を統一的になしている世界に他ならない。それ故に単一の世界戦略の論理的内容を対象化したものとしての世界同時革命戦略を、過渡期世界論として定式化されるべき世界認識を媒介として、世界党建設を主体的根拠にした三ブロック階級闘争の現実形態的推進をもって実現していくことが現代革命の当面する任務に他ならず、我が日本革命運動はその直接の有機的一環を構成するものとしてあることが確認されなければならないのである。そしてまたかかる世界同時革命戦略そのものが、綱領的視点に支えられつつ、価値・階級・国家そのものの死滅、即ち階級闘争そのものの死滅を射程に入れた、従って世界社会主義の樹立までをも組込んで、階級闘争そのものを対象化したところの世界一国同時革命戦略論の行為的現在における適用としての意義をもっているのである。かかる全世界のプロレタリアートの自己解放をかちとるべき深遠にして崇高な闘いを貫く、一本の赤い糸が世界革命戦争なのだ。

過渡期世界の構造とその変革をこのように明らかにする時、我々が自国帝国主義打倒国際反革命同盟粉砕として明らかにしてきたプロレタリア国際主義の場所的立場に踏まえた実践もまたより具体的なものとなることができる。即ちベトナム――インドシナにおいて闘われ

ている民族解放闘争と、日本における革命運動の真の連帯は何なのか、我々は今はっきりと答えることができるし、日々実践していることをはっきりと言うことができる。一見したところ、「大合流」を叫び、「アジア革命」を唱える諸君が最も「国際主義的」であるかに見える。だがこの様な諸君は逆に本質的な現代世界総体の変革の問題に眼をつぶっており、後進国人民の闘いに完全に拝脆しており、その「栄光と悲惨」の革命的切開から身を遠ざけているのである。

ベトナム人民の闘いは、五四年ジュネーブ協定におけるホー・チ・ミン―毛沢東の反動的屈服の総括を立脚点とし、反革命軍事政権と米帝を中心とする国際反革命同盟軍との非妥協的武装闘争を貫徹している限りにおいて確かに国際階級闘争の「前衛」たるにふさわしい英雄主義を実践しているであろう。だがそのような激烈な闘いそのものが、どのような綱領的内実により、まさに全世界のプロレタリアートの解放の為の規範たり得ているのかという問題をみる時、それは依然として二段階戦略・一国社会主義路線のスターリン主義的誤謬に犯されているのであり、その比類なき革命性がマルクス・レーニン主義の革命論によって裏付けられてはいず、現実的止揚の方向性を自ら閉ざしているのであり、そこにパリ和平会談への出席というジグザグの根拠があるのだ。

だからこそ真の国際主義的な連帯は、ベトナム人民の闘いを現象的に賛美し「大合流」を夢見ることでもなく、単純に日帝打倒を接ぎ木することでもなく、かかる後進国階級闘争が民族解放・プロレタリア独裁として、世界プロ独樹立の闘いの過渡にあることをはっきりと批判的に提起しつつ、世界党建設に向けた国際的な党派闘争を通して、相互止揚を追求していくことを、帝国主義足下における帝国主義打倒・プロレタリア独裁の闘いと一体的に押し進めることを、まさに武装蜂起を断固として貫徹し、世界革命戦争を組織していく闘いの中に統一的にとりこんでいくことでなければならない。まさにプロレタリア国際主義とは世界戦略の現実的実践に他ならず、軽々しく「現実的」な「連帯」を口にする諸君は、自らが権力闘争への死の飛躍から無縁な浅薄な「口舌の徒」であることをピエロ的に実証しているのである。

二、日本帝国主義の現段階と軍事外交路線

日本帝国主義は六四～五年の不況期からの脱出過程の構造的変化を経済的なメルクマールとして、また六五年日韓条約を政治的なメルクマールとして、従来の敗戦帝国主義に特有なる諸特徴を一掃し、全面的な現代帝国主義としての確立を進めてきた。第二次帝国主義戦争の敗北によりもたらされた、戦後過程の体制的危機をアメリカ帝国主義の軍事的・経済的援助に依拠して乗り切り、朝鮮戦争時の特需景気により息を吹き返し、資本主義的再建をなしてきた日本帝国主義は、そ

●高張力異形丸鋼
T-BAR
●滑り止め鋼板
パップシート
床用鋼板
●色彩豊かなカラートタン
トーカイカラー
●内・外装用カラー鋼板パネル
トーカイスパン
東海鋼業株式会社
本社
東京都中央区京橋3丁目7番地
電話　東京(561)0191番（代表）
電話　東京(562)5211番（代表）

の後もほぼ一貫してアメリカ帝国主義の直接・間接の経済援助に助けられつつ、重化学工業部門における設備投資の集中と更新を行い、相対的に安価な労働力の確保と相乗して、強蓄積を推進しつつ、国際競争力をも強化してきたのであったが、六五年以降このような傾向は大きく変化してきた。即ち日本帝国主義はアジア・太平洋地域（就中極東・東南アジア）に対して商品輸出市場としての依存を強め、また重化学工業の原材料資源の供給源としても依存を強め、部分的には自らが開発していく方向をも示している。更には顕在化してきた若年労働力不足を補うべく、資本の現地投下・合弁企業の設立等による現地労働力の雇用から直接的な労働力の国際的移動まで行うに至っている。日本帝国主義はその産業構造と地理的要因に規定されて、既に抜き差しならない利害関係をアジア一帯に定着せしめ、トータルな再生産構造の一環にしてきているのである。

それはまた国際競争力の強化による金ドル外貨の蓄積によって一層促進されている。貿易収支の赤字・資本収支の黒字という競争力金融力の脆弱性から、貿易収支の黒字・資本収支の赤字という不断に対外膨張を要求する帝国主義「本来」の形態へと転換し、金ドル外貨の内容上の改善を含みつつ、七〇年度内には四十億ドルに達せんとする力量に裏付けられて、多国間、二国間の資本援助を強化しているのであり、商品・資本輸出が主導する経済構造へと転換してきたのである。従って日本帝国主義は侵略反革命の一体的運動という現代帝国主義の運動形態をはっきりと示してきている。何故ならば、東南アジアの「安定」の創出こそが日本帝国主義の生命線としての比重を深めているのであって、アメリカ帝国主義と共同した国際反革命の強化に血道をあげていかざるを得ないのである。そのことが日本帝国主義が軍事外交路線の展開を侵略反革命の政策的環として強行せんとする根拠である。「日米共同声明」により、それは一層明確な形をとって表われている。

即ちそこにおいては、戦後再建過程に基本的に規定される現代過渡期世界における現代帝国主義の運動が、①疎外されているとは言え「群」として存在する「労働者国家」への軍事的対抗、②米帝の一元的支配力に規定されて、統一世界市場の形成がIMF体制として国際

共産主義
覆刻版・定価九八〇円
好評発売中
七〇年代世界階級闘争へ覆刻する共産主義者同盟の歴史的理論機関誌
■内容
(上)巻　一号～三号（五九年二月～六〇年六月）
安保闘争当時の共産主義者同盟の重要論文集
(中)巻　四号～七号　追って覆刻予定
「共産主義」覆刻委員会　TEL 264・2961

管理通貨制度による恣意的な協調によって維持されていること、③帝国主義諸国間の産業構造の同質化による水平分業の比重の増大、④しかもこれらがいわゆる国家独占資本主義諸政策により、一定の政策的「自由」をもって遂行されていること、これらの点に立脚して、単純なレーニン的『帝国主義論』の適用では解明しえない、侵略反革命の一体的推進を統一世界市場の防衛とその内部における政治的軍事的要因と経済的要因が一体化して進行するヘゲモニーの再編という形をとって発現するという構造の現段階における基本的動向が明らかになっているのである。日本帝国主義とアメリカ帝国主義は、両者の経済的不均等発展がアジア・太平洋市場・北米市場において日帝の米帝に対する市場再分割戦と米帝の巻き返しという鋭い対立を形成しつつも、それがストレートに政治的軍事的対立へと転化するのではなく、東南アジアにおける共同した国際反革命の強化・再編を第一義的になしていく中で、統一世界市場を防衛し、その内部で市場再分割そのものも共同反革命のヘゲモニーの再編に媒介されてなされていくということであり、それが七二年の沖縄「返還」＝日米共同反革命前線基地化を中心にしてなされていくことが明確となってきたのである。

日本帝国主義は従来の「三矢作戦」「シー・ドラゴン作戦」等々、あるいは自衛官の大使館付海外駐留を序章として、七二年沖縄への自衛三千二百名の派兵をもって、沖縄を日米共同の反革命前線基地化として再編強化していくことをもって、全面的な侵略反革命の具体化としての軍事外交路線の第一歩を歩もうとしているのである。沖縄国政参加選挙もまた、かかる攻撃を、民族主義的誤謬の海の中にどっぷりつかっている社民、スターリニストを利用しつつ貫徹していく政治的狙いをもつものとしてあったのである。「沖縄奪還」などと民族主義に肉体主義を接ぎ木したに過ぎない中核派の諸君が闘い得なかったことは当然であった。

そしてまたこのような軍事外交路線と結合して、自衛隊の帝国主義軍隊としての確立が三次防から四次防への過程で進められようとしている。軍事戦略そのものが、公表されている内容だけをみても、ソ連からの本土防衛主義・北方重視から、洋上迎撃戦略・バッヂシステムの導入を媒介にして、現在的には日米韓共同行動と「敵地爆撃」、ゲリラ戦争粉砕というように露骨な変化を見せているし、予算規模、兵器、装備のミサイル化を中心とする高度化、軍需生産における民族資本の優遇と産軍複合体の形成等々、あらゆる点において帝国主義軍隊の確立が進められている。全国基地の強化と米軍基地の自衛隊移管もその一環である。更にこのような帝国主義軍隊の確立が、六五年以降の帝国主義的社会再編がプロレタリアートの六九年の敗北故に生産点、学園でほぼ一巡した中にあって（勿論官公労における合理化の嵐は今尚存在している）、社会再編攻撃の基軸となってきており、これを実体としての民族排外主義の形成が入管体制の強化としてなされようとしているのである。

三、恒常的武装闘争の推進により、権力闘争の地平を切り拓け

現代過渡期世界のトータルな把握と、日本帝国主義の現局面の攻撃の分析を基本的に押えつつ、我々はあの六九年の敗北を根底的に止揚したところの内実をもった闘いとして、この一年間の闘いを七〇年代階級闘争の質を刻印するものとして全力をあげて闘ってきた。あの十・八以降の闘いの中での「自治会共闘」なるふやけた組織路線と実力

闘争に対する右翼的敵対の消えやらぬコンプレックス故に、世界認識、戦略論、闘争戦術の全てを過去の我が同盟の路線から剽窃し、「六月決戦」をぶちあげたフロントの諸君の数周遅れのトップランナー振りが、何んの積極的な意味も持ち得なかったという現実を冷厳に踏まえつつ。

その闘いは、日本帝国主義足下における帝国主義国家権力打倒の為の武装蜂起の貫徹に向けた行為的現在からの主体的な推進構造の実践的定立に他ならない。その場合確かに日本帝国主義の政策的展開の政治暴露を、現在的な階級情勢に立脚しつつ組織していくことが前提的な与件である。しかしながら我々がこのような大衆運動一般に乗っかり、その暴露における情勢分析的内容や組織路線を正しく提起し得たとしても、それだけでは全く駄目であり、六〇年代への反動的回帰であり、「安保決戦」の激闘から何も学んでいないのである。「安保決戦」を「大勝利」と進撃ラッパ風に総括した中核派の諸君が、完全にカンパニア主義に埋没し、諸課題を「総力戦」として大カンパニアで組織化していくのみであるという現実は、現在的に彼らが提起している「日帝のアジア侵略を内乱へ」なる戦略スローガンそのものを空洞化させているし、「安保決戦」を戦闘的に闘った彼ら自身の過去をも清算しているのである。中核派の諸君にあっては、自らが権力闘争を提起していながらも、軍事の問題を局面局面における権力との攻防の必要性からしか対象化しえないプラグマチズムに陥いっており、従って武装蜂起のその日に向けての、革命党による正規軍建設の意義が全く必要性一般としてしか対象化できず、現在直下における政治警察との二四時間の全面的な攻防に耐え抜いてのみ、正規軍建設のリアルな展望を切り拓いていくことが可能だと言うことを主体化しうる根拠そのものを喪失していると言わざるを得ない。

我々は革命党による正規軍建設の革命的意義をはっきりと把握している。我々はロシア革命のアナロジーをもって、帝国主義軍隊の武装蜂起前夜の内的崩壊を期待することの非現実性について、はっきりと確認しておく必要がある。資本主義の矛盾が恐慌として客体的に発現すること自体は、決して国家権力の危機として結合するものとして措定できないのであり、ロシア革命におけるツアーリ軍隊の内的崩壊と革命への結集は、帝国主義戦争の敗退局面における大混乱という特殊な与件の下に生じたことであり、軍隊内細胞建設一般によっても把えることのできないものである。その意味では現代過渡期世界における革命は帝国主義の侵略反革命がもたらす全人民的抑圧の系統的な暴露の組織化を踏まえつつ、あくまでも主体的に革命情勢を切り拓いていくものとして、革命党によって措定されなければならないのであり、その意味ではそれを物質化すべき過渡における闘いそのものもまた革命党の強固な正規軍建設によってのみ領導できるのであり、文字通りの権力闘争そのものへと主体的推進をなしていくことができるのである。六九年における敗北が直接的には機動隊の軍事的な粉砕すらなし得ないという事実に規定され、かつその軍事的敗北が政治的敗北へと直結させられる反革命弾圧の強化によって決定的なものになったということを真に総括するならば、口先だけの権力闘争の安売りがいかに空疎なものであるのかをはっきりとさせておかなければならない。従って六九年の段階において、我々が押しなべて「党派軍団」というような一般的な形態によってしか、全共闘自衛武装を乗りこえることができず、権力闘争への飛躍を目指しながらも、軍隊建設に関して全く立ち遅れていたことの総括を実践的になしていくものとして、

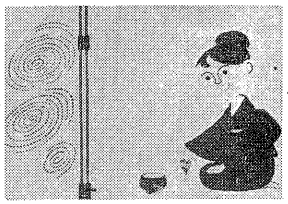
行為的現在からの正規軍建設をどんなに困難であろうとも断固として押し進めていくことを、「軍事を孕む党」としてレーニン組織論の発展のうちに対象化していかなければならないであろう。あのフランス五月革命が革命情勢への入口に到達した途端に脆くも崩れさったことの主要な問題の一つとして、指導部そのものが軍隊建設に全く無知であり、全国的な政治闘争の革命昂揚が何かしら国家権力そのものの解体・分解を生むものであるかの如きおめでたい幻想に浸っていたことが総括されなければならない。我々は全てのプロレタリアート人民に正規軍建設の革命的意義を常に宣伝していかなくてはならないし、党における非公然・非合法の正規軍の建設を様々な軍事的戦闘の組織化を通じてやり抜いていくであろう。

更には、反戦青年委員会、全共闘の限界を止揚したプロレタリアートの階級形成をより一層強化していかなくてはならない。権力闘争への主体推進の局面の中で危機に陥った反戦・全共闘の総括は、プロレタリアートの階級形成の論理的歴史的に対象化されたものとしてのソヴィエトの建設との連関性において明らかにしていかなければならないし、その具体化が進められていくことが必要である。

全共闘運動は自らが「安保粉砕・日帝打倒」という全人民的政治闘争を課題とし、しかも「安保決戦」を通じて権力闘争への飛躍を果さんとした時に、自らの限界性を露呈してしまった。何故ならば、そのような全人民的政治闘争を真に革命的に闘おうとする時、それはそのような課題の設定の高次化のみによって実現されていくのではなく、また闘争主体の意識の上昇過程一般によって実現されるのでもなく、そのような全人民政治闘争を文字通り担うところの全人民的団結が具体的な組織形態をもって確立することが絶対的に必要だからである。

しかもそれはプロレタリアートの支配階級としての組織化＝ソヴィエトの形成に向けた過程としての連関性を内包したものとして実現されていかなければならない。全共闘が敗北したのは、まさに産別性の枠を実体的に止揚した団結構造を持ち得なかったが故であり、総体としてプロレタリアートに指導された全人民的団結を実現する為には反戦のヘゲモニーが決定的に未成熟であったが故である。七〇年代階級闘争において、我々は党形成・階級形成の未成熟に先行する戦略路線といった構造を止揚していかなければならないのであり、むしろ逆に正規軍建設と一体化したところのソヴィエト型組織（まさに蜂起に勝利することにより文字通りソヴィエトへと転化する）の建設を、具体的な大衆運動の内部において不断に実現し、権力闘争を切り拓く条件を直接的にかつ主体的に獲得していく、その意味で権力闘争の質を内包していく闘いとして組織していかなくてはならないのである。

従って、反戦・全共闘に依拠したプロレタリア統一戦線の現実形態としての八派共闘＝反帝統一戦線は、ソヴィエト型組織への革命的再編を要求されているのである。かかる観点に無自覚な諸君は一体権力



日軽住宅サッシ
ニギリ矢

明るい陽ざしがお部屋いっぱい。この住み心地の良さをいつまでも保つことは、日軽住宅サッシの大きな使命です。きびしい気象条件に耐え、豊かな生活環境をつくり上げる日軽住宅サッシを、あなたの住宅設計にぜひおすすめします。この他、住宅用網戸・住宅用ドア・住宅用雨戸・住宅用面格子をそろえてあります。

本社・住宅サッシ販売事業部　東京都千代田区神田錦町3-7-1（興和一橋ビル）☎(259)2525 〒101
日軽アルミ株式会社

闘争への飛躍をどのように考えているのであろうか。このような権力闘争の内実を不断に対象化していくことを我々が様々な闘争に対する目的意識性の環として物質化していくことが欠如すれば、権力闘争は永遠に彼岸化されてしまうか、叛乱型革命の幻想の中に堕眠をむさぼることになるであろう。我々は反戦・全共闘の解体的危機の中から自然発生的に登場してきた叛軍・入管等の地区運動をソヴィエト型組織としての地区共闘へと発展させ、全人民的団結の拠点として確立していかなくてはならない。そしてこの様な本質的な闘いを、日帝の全面的な軍事外交路線とのラディカルな対決を貫徹しつつ、帝国主義軍隊というブルジョア国家権力の暴力的支柱の解体の闘いと一体化させ、その内的な根拠として位置づけ、まさしく武装蜂起に向けた七十年代階級闘争の本質的課題を、①帝国主義軍隊解体、②正規軍建設、③ソヴィエト型組織の建設という三つの契機を過程的に押し進めていくものとして、それ故に六九年の敗北を乗りこえた権力闘争の内実を獲得していく闘いとして、恒常的武装闘争を革命的に展開していかなければならないのである。

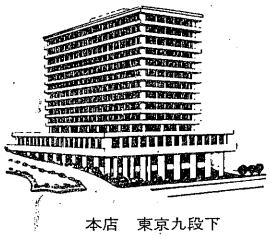
四、革命的叛軍闘争に総決起せよ！

さて我々はこのような七十年代階級闘争を恒常的武装闘争として闘い抜いていくことを明確に押えた上で、現段階の階級情勢の具体的な分析に踏まえた大衆運動の革命的展開をかちとっていかなくてはならない。

日本帝国主義の軍事外交路線が帝国主義軍隊としての自衛隊の強化を伴いつつ、沖縄の日米共同反革命前線基地化を軸にして強権的な形で展開されていること、また全国各基地闘争が恒常的に闘われており、小西元三曹の自衛隊内部からの革命的叛乱を契機として自衛隊内における反戦兵士の活動が強化されている中にあって、叛軍闘争の意義は極めて重要である。従来の叛軍闘争の概念が「兵士の獲得」＝軍隊内細胞建設というように固定的に把えられていたことに対して、現在的な叛軍闘争はそのようなスタティックな一般性の内に解消されるべきものではない。

ユニークな存在

日本不動産銀行は長期信用銀行法に基づいて設立された銀行です。その特長は、各種企業の設備資金や長期運転資金など長期の安定した貸金を供給することにあり、さらに、不動産金融の面で**住宅フドー・積立フドー・提携長期住宅ローン・一般長期住宅ローン**などの住宅融資に当行のユニークな方針がよくあらわれております。そして　**リッキフドー・ワリフドー**の債券発行とともに　特長のある銀行として親しまれております。



本店　東京九段下

5年貯蓄最高・年7分3厘・無記名
リッキフドー

1年貯蓄最高・年6分2毛余・無記名
ワリフドー

日本不動産銀行

東京都千代田区九段北1丁目13番10号
TEL (03)263－1111(代)　〒102

それは第一に日本帝国主義の軍事外交路線と自衛隊の帝国主義軍隊として強化に対する断固たる反撃の闘いとして、現在的な全人民的政治闘争の環としての意義をもっており、第二に帝国主義軍隊解体を目指して、その内と外からの解体を押し進めていくものとして正規軍建設の闘いの一環を構成しているのであり、第三に諸階級諸階層を統合した全人民的な団結を、ソヴィエト型組織としての地区共闘の創出を実現していくものとして、従って地区共闘としての全国叛軍行動委員会（現在的には連絡会議として、将来的には全国地区共闘連合評議会への発展を目指すものとして）の創出により、反帝統一戦線の再編を進めていくものとしての意義をもっているのである。従って我々は叛軍闘争を狭義の「叛軍」に閉じこめる必要は全くないのであり、日本帝国主義の現段階との全面的な対決を貫徹していくものとして、従ってまた様々な諸課題を統合し、かつ七十年代権力闘争の内実を対象化したものとして闘っていかなくてはならないのである。そうすることによって、全国各基地に対する粘り強い解体闘争を展開している農民の闘い、あるいは叛軍裁判を闘う中から隊友反戦の組織化を開始している小西元三曹の闘いとの真の革命的連帯をかちとっていくことができるのである。

このような叛軍闘争の七十年代階級闘争としての革命的意義と、それに対する革命的プロレタリアートの任務を明らかにすることなく、個別闘争としてしか闘おうとしない諸君は、一年余にしてあの六九年の敗北の総括から完全に「自由」になったカンパニア主義であり、我々の正規軍建設の闘いに対して、「全人民武装」なる空想的かつ右翼的対置をなしている。そもそもマルクスがパリ・コンミューンを総括し、プロレタリア独裁の四原則の一つとして、「全人民武装」を提起していることが論理的かつ歴史的に何一つ教訓化されていずに、ウクラードを掌握したプロ独国家の任務と、権力闘争を準備すべき我々の行為的現在における立場の差異性が全然わからず、例えて言うなら賃上げ闘争に対して「擬制的労賃制」を要求するのと同じ誤りを犯しているのだということを反省して欲しいものである。そして又それは困難で重苦しい、しかし断固として貫徹すべき正規軍建設に対する右翼日和見主義であり、六九年に問われた軍事の問題から逃亡し、大衆的実力闘争の延長上に直接全人民武装が可能であり、権力闘争も又可能であるかの如き、どうしようもない混乱の体系に行きつくのである。その最も良い典型はML派の諸君であり、「安保破棄・佐藤内閣打倒・人民総武装」として定式化された戦略路線は、毛沢東式俗流大衆路線の日本版として、「安保破棄・佐藤内閣打倒」というスターリニスト二段階戦略への転落が、「人民総武装」なる出鱈目なエセ戦闘性によって補完されているものであり、その破産は余りにも当然であった。

革命的叛軍闘争は、兵士の獲得、基地闘争一般では断じてない。そのような闘いそのものを部分として含みつつ、日本帝国主義の軍事外交路線との全面的な対決をなす全人民的政治闘争として闘われなくてはならないのであり、帝国主義軍隊解体・正規軍建設・ソヴィエト型組織建設の三つの契機を統一的に進める恒常的武装闘争の質をもって闘っていかなくてはならないのである。

更に我々はこのような日本帝国主義の総路線たる軍事外交路線と対決する闘いの中に、沖縄闘争、入管闘争の推進を位置付けていかなければならない。

沖縄闘争は「沖縄奪還」なる路線が既に日帝の現実的政策展開によって、その民族主義的反動性を赤裸々にさせており、我々はかかる沖縄人民の自然発生性への全面的拝跪を止揚し、現在的環を明確に「沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止」として組織し、日米両帝国主義の東南アジアにおける共同反革命と軍事外交路線に反撃し、かかる中に「国政参加選挙」を頂点にした「本土一体化」政策粉砕と自衛隊沖縄派兵阻止の闘いを位置付けつつ、本土・沖縄を統一した恒常的武装闘争として闘っていかなくてはならない。沖縄の階級情勢が拡大する東南アジアの武装民族解放闘争との関係における、日米両帝国主義の共同した国際反革命の強化の実体をなす沖縄軍事基地の強化を焦点とし、七二年の「返還」による共同前線基地化としてそれが強行されんとしている現実に対し、革命的叛軍闘争との結合をもって反撃していかなければならないのである。

日帝の入管体制強化の策動は、国会への「出入国管理法」再上程を政治的メルクマールとし、七一年一月の「日韓法的地位協定」の「永住権申請」の期限切れを目前に控えて、在日朝鮮人へのがんじがらめの入管体制＝政治的・経済的・民族的抑圧として進められようとしている。かかる日帝の攻撃は、アジア侵略反革命に規定された国内体制の確立の軸としての帝国主義軍隊の確立と自衛隊の沖縄派兵を実体的根拠とする国民的な民族排外主義のイデオロギー的実体的強化の策動であり、朴政権の侵略反革命への包摂と朝鮮人民民主主義共和国への反革命的敵対をも媒介としたところの、末端支配機構における「差別して支配する」構造の民族的固定化である。

在日朝鮮人の存在そのものが、第二次帝国主義戦争へと向かった、戦前の日本帝国主義の狂暴な侵略反革命の歴史的な犯罪の結果であり、しかもそれに日本のプロレタリアートが巻きこまれ、戦後過程においても革命的止揚を実現できず、日本人民自身が民族的差別に今尚動員されているという否定的な痛苦な現実であることをはっきりと踏まえつつ、我々はかかる日帝の攻撃との対決の中で、被抑圧人民としての我々内部の民族的壁（それはブルジョア支配によって強制されているのみならず、人民自身の意識構造にまで入りこんでいる）を止揚していく闘いを、まさに在日朝鮮人との革命的連帯として実現していかなければならない。それはその内部におけるスターリニストとの断固たるイデオロギー闘争・党派闘争の展開を媒介にして闘いとられていかなければならない。

●七十年代権力闘争への飛躍に向けて、恒常的武装闘争を闘い抜け！
●帝国主義軍隊解体・正規軍建設・ソヴィエト型組織建設！
●革命的叛軍闘争に総決起せよ！　防衛庁・全国基地解体！　小西裁判勝利！　全国叛軍行動委員会を地区共闘として組織せよ！　隊友反戦を強化せよ！
●沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止！　本土一体化策動粉砕！
●入管体制粉砕！　入管法再上程阻止！　日韓法的地位協定粉砕！
●帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ転化せよ！
●共産主義者同盟の真紅の旗の下に、全ての先進的プロレタリアート人民は結集せよ！

（編集部注：この原稿は一二月一〇日に受け取ったものですが、その後一二月一八日共産同が二つに分裂したことを付記します。）

共産主義労働者党
東アジア＝日本革命戦略と七〇年代革命党建設

はじめに

わが共産主義労働者党は、六七年初頭結党以降、社会主義と労働運動の結合を媒介し、第三世界解放革命に呼応する党として、革命的実践の鉄火のただ中に自己を打ち鍛えてきた。昨秋安保政治決戦の敗北によってもたらされた混迷する情勢と階級闘争の危機を、真実に止揚し、革命的に突破するための中枢的任務を、われわれは結党以来の「二つの魂」の一層の強化と純化において果さんとしている。政治闘争の一〇・八羽田闘争以前的水準への退行、労働運動の帝国主義的再編に抗すべくもない「新左翼労働運動」の低迷、これらの中にあって、第三世界解放革命への革命的合流をめざし、日帝の帝国主義的政治社会再編に抗し、**ソヴェト型統一戦線**と**反帝拠点闘争・反帝労働運動**の確固たる路線の下、**東アジア革命戦略**の実現と**東北アジア国際革命**（日本―沖縄―朝鮮革命）の勝利的完遂に向かう不屈の前進をわが党は開始している。

またわれわれは、叛軍・入管戦線において、反帝労働運動の戦線において、わが党の提起する**七〇年代革命党**と**ソヴェト型組織**たる地区叛軍・入管行動委員会、工代・職代会議の構築へ向けての不退転の前進を開始している。ゼネ石精闘争の京浜、堺コンビナートにおける巨大な火柱に引き続き、日帝の東アジア侵略の尖兵、産軍複合体の拠点、帝国主義的右派労働運動の筆頭たる大日産のただ中における労働者叛乱を七〇年代反帝労働運動の不抜の大拠点闘争たらしめるべく現在闘い抜いているわが党は、同時に北富士、日本原の東西における巨大な叛軍、反基地拠点構築を先駆的におし進めている。

かかる七〇年代闘争構築の現実的推進を根底において支えるわれわれの戦略的立場と運動―組織路線及び七〇年代革命党建設の組織路線を、以下に明らかにしたい。

〔Ⅰ〕六〇年代新左翼運動と安保政治決戦の敗北

(A) 六〇年代新左翼運動と我党の位置

六〇年代日本新左翼運動は、一方ではベトナム革命によって切り拓らかれた戦後歴史ブロックの崩壊過程における国際的な等質性・同時代性をもった新たな急進的革命運動の必然性を日本において体現する運動であったとともに、他方では、五〇年代末期から六〇年安保闘争において「日本的トロツキズム」として形成され急進的学生運動＝市民主義最左派の指導部隊として定着した六〇年代新左翼諸党派とその運動が前者を媒介準備し、両者が結合する中で独自な特質を有した運動として形成された。それは、五〇年代＝六〇年代のスターリン主義的国際共産主義運動及び社会民主主義的国際運動と区別される革命的大衆運動・共産主義運動の国際的形成の一環を客観的に構成するものであった。かかるものとしての六〇年代日本新左翼運動が切り拓いた階級闘争の新たな地平はこれまでわれわれが確認してきたところであるが、現時点において要請されているのはその歴史的限界性の明確化である。疑いもなく七〇年代階級闘争の地平に踏み込んだわれわれは、「大衆運動としての六〇年代新左翼運動」の歴史的限界を次のように概括しうる。

第一に、「社会主義と労働運動の結合」の部分性・一面性・跛行性・自然発生性である。第二に「ベトナム反戦・侵略加担阻止」あるいは「安保粉砕・日帝打倒」という形で表現された国際主義の抽象性・理念性・外在性である。第三に、全共闘運動に先駆的に表現された根源的な社会叛乱闘争の有した直接性・無媒介性・非戦略性である。以上の「大衆運動としての新左翼運動」の有した歴史的限界に相関する「党派としての新左翼運動」の歴史的限界は、第一に具体性を有した世界革命戦略及び戦略的展望の欠如である。これは、抽象的権力闘争主義であり、急進的大衆の権力闘争への無媒介な志向（必然的に一国的な）の自然発生性への拝跪である。このことは党（派）の問題としては、理念や観念としてではない世界党への具体的現実的展望をそのうちにはらまない一国革命主義的党のあり方の問題である。第二に全共闘運動と党派の分裂・乖離、あるいは党派軍団化という擬似的「結合」＝分断に極限化された、新たな根源的質を持った社会叛乱闘争の自然発生性に対する内的な党的指導性の欠如である。それは、この高次の自然発生性を、その質をかえることによって革命を準備する運動―組織陣型に構成する党的指導の質的転化、「党―統一戦線」を「党―ソヴェト」の質を現在的にはらむものに転化させることであった。第三に、党派と労働運動との極めて自然発生的な結合関係である。これは、「反戦派労働」運動としてしか自己を総体化しえない抽象性と外在性であり、民同型労働運動の崩壊過程における革命的な左翼反対派以上の位置と内実を獲得しえなかったことを示している。

このような六〇年代日本新左翼運動の中にあってわが党の位置はいかなるものであったか。わが党は、その形成の前過程における、一方での六〇年安保闘争以来の六〇年代新左翼の市民主義最左派としての運動的「伝統」の不在、他方でのスターリン主義的もしくはソフトスターリン主義的な、「国際共産主義運動」との最終的な思想的実体的分離の歴史的立ち遅れという二点をふまえた上で、六七年結党以降、六九年五月党三大会での質的転換を経て、われわれ自身がベトナム革

命によって呼びおこされた党派であるということ、その歴史的必然性を自覚化していくことと、旧日本新左翼の持っていた労働運動との自然発生性的かかわりをどのように越えていくのか、今日における労働運動と社会主義との結合の意識的追求という点に六〇年代後半における党形成の基軸を設定した。そして六九年秋期決戦において、革命的左派の不抜の一翼として反帝政治闘争の最前線を構成するに至った。六九年秋期決戦の敗北を、敗北として徹底して総括し、その教訓を引き出すことによって（七〇年二月第四回党大会をバネとして）**反帝拠点闘争**と**反帝労働運動**の構築＝七〇年代闘争の実践的展開に全面的、目的意識的に着手し、さらには六月闘争と新しい統一戦線運動の萌芽たる**六闘委**（六月闘争委員会）運動を経て、現在に至っている。この間、叛軍闘争、入管闘争の新たな質に着目し、いちはやくそれを担い、領導してきたのがわが党に他ならない事はあらためて確認するまでもない。

わが党が既成新左翼より遅れてやってきたという問題、かかる「後発性」にもかかわらず、われわれが一方ではベトナム革命によって呼びおこされた党派であるという自らの歴史的存在根拠を――先進帝国主義国日本という場において――徹底的に自覚していくことを通じて、そしてそれが単なる理念的立場の問題としてではなく、六九年秋期決戦にのぼりつめる六〇年代後半階級闘争の実践を通じて、具体的に六〇年代新左翼の内包していた六〇年代的限界性を運動と理論の双方において突破する地平を、切り拓きうる段階に今日到達していることをわれわれはゆるぎない確信をもって語ることができる。それは抽象的な国際主義、抽象的な世界革命の立場を端的に超克し具体的な世界革命戦略への道を**東アジア革命戦略**として明確に確定せんとするゆるぎない立場と同時に既成新左翼諸党派の労働運動のおどろくべき混迷の中にあって確固とした反帝労働運動の構築ということに現実的に着手しつつあることに、明瞭に示されている。

わが党の六〇年代新左翼運動の中での位置と、現在の到達点を以上のごとく総括するならば、われわれが四大会において提起した第二期共労党の建設は、今日その基礎的条件の建設の段階から、全面的な計画性・目的意識性をもった本格的段階に踏み出さなければならないのである。

(B) 六〇年代後期階級闘争の運動・組織総括

わが党がベトナム革命によって呼びおこされたという歴史的規定性を刻印されている点はすでに明らかにしたとうりであるが、われわれはさらにここで、六〇年代新左翼運動の実体に他ならなかった**戦闘的大衆闘争**（それは六七年砂川・羽田闘争において開始され、六九年安保政治決戦の敗北において基本的には終焉したところの階級闘争の一サイクルである）の現実過程にそくして、その内実を展開することが必要であると考える。

六七年二月、五月、七月の三波にわたる砂川闘争においてその萌芽を形成し、一〇・八羽田闘争で全面展開をとげた戦闘的大衆闘争の質を理解するためには、それに先行する「戦後階級闘争」の構造を、その世界性において、あるいはその主客の関係において確定しておくことが必要であるように思われる。なぜならば、「新左翼運動」、戦闘的大衆闘争は、あくまでも「戦後階級闘争」の限界を突破するものとして、その解体の過程から成長し、発生してきたものだからである。

「戦後階級闘争」は、戦後革命の挫折にその根拠を有する歴史的な

一期間の総体として把握される。すなわち、世界的には、戦後世界革命の朝鮮三八度線における固定化、先進国革命の敗北という事実から、「戦後帝国主義世界体制」の米帝を基軸としての形成、そして労働者国家ブロックと帝国主義国家ブロックとの形式的対立と後者の優位性における前者の〝封じこめ〟、第三世界の「政治的中立路線」（バンドン会議）と「経済的な新植民地主義への従属」――これらの諸指標によって示される「戦後歴史ブロック」の中に日本階級闘争も包摂されていたのである。

こうした「戦後歴史ブロック」における「戦後日本」と「戦後日本階級闘争」はいかなる内実としてあったのか。この問題については数多くの論議がこれまで行なわれてきたこともあり、ここで全面展開することも不必要であるが、六七年一〇・八の意義を確定する上で是非必要な諸点のみを以下明らかにしてみよう。

㋑朝鮮戦争を契機に復活を開始した日本帝国主義の基本的な「日帝再建戦略」は、米帝のアジアにおける対ソ、対中反共戦略に受動的・部分的に参与する自己限定を行なう限りにおいて、「経済主義的」であり、国際政治における帝国主義的ヘゲモニーに固執するのではなく、なによりも帝国主義的下部構造の再建、再編に中軸を設定していた。また経済的復活の内実も旧帝国主義的な「対外膨張政策」ではなく、国内の労働力と市場を最大限発掘するという一国的政策を追求した。

㋺日帝の国際路線は基本的には、「対米従属路線」であり、独自のアジア戦略、世界戦略は持つことなく、国内路線は、帝国主義的下部構造再建に必要とされる限りでの「政治反動」を、議会において「反動立法」を強行するという形態で貫徹することに集約されていた。

㋩一九五〇年代に自己形成を遂げ、六〇年安保闘争で完成された型を示し、日韓闘争以降全面的解体過程に突入した戦後階級闘争は、次の諸点にその特徴を有していた。第一に、社共（社民、スタ党）をその議会内政治代表部とし、その底辺に総評に組織的には集約された組織労働者＝基幹プロレタリアートが位置し、その周辺に「進歩的文化人」（イデオローグ）を先頭とする「進歩的市民」が存在する。そして戦闘的な学生部隊は、この運動構造を急進的街頭闘争において左から補完するという全体的構造を有していたこと。第二に、この運動構造を規定する対象としてのブルジョア支配階級の階級攻勢は、「逆コース」「戦争とファシズムへの道」と表現される形態をとっていたこと。すなわち日帝の帝国主義的下部構造再建（市民社会の帝国主義的再建）のための方策を「議会において〝反動〟法案を強権的に採決する」という形態において実現しようとしたこと。第三に、「逆コース」「戦争とファシズム」に市民意識＝（階級意識ではない！）として反発する国民世論（平和と民主主義）を結集軸にした闘争が展開され、闘争主体はプロレタリア的性格を欠如し、闘争の場は議会内が主要なものとされる（街頭闘争やストライキ闘争はあくまでも議会内闘争に集約され、その圧力手段として機能する）という限界性をもっていたこと。

こうした諸点に規定された、「戦後階級闘争」は、まずベトナム＝ドル危機による戦後世界の（戦後帝国主義世界体制の）崩壊の開始、そして日帝の経済再編の一定の完了と帝国主義的対外膨張の開始、ベトナム革命闘争の前進と東北アジア、東南アジアにおける反共軍事戦線の崩壊と再編などによって急速な変質と再編を強制されたのである。

旧左翼、戦後革新勢力の日韓闘争、ベトナム反戦闘争の破産と無対応の中で問われていたものは何であったのか。それは第一に、その依拠する「平和と民主主義」的戦後イデオロギーの破産であり、戦後型市民の「進歩性」に替りうる新たな闘争主体の問題であった。第二にそれは、「〝反動法案〟提起→社共による議会でのバクロ→議会に向けての大衆闘争の高揚→強行採決→大衆闘争の解体」という戦後階級闘争に独自のサイクルを超える闘争戦術の問題であり、そして第三に、議会主義的闘争形態の限界性をこえるための問題であった。すなわち、戦後階級闘争に固有な、「平和と民主主義」的イデオロギー、その主体、合法主義と議会主義がそこでは問われていたのだといえる。三波にわたる砂川闘争と一〇・八羽田闘争は、まさにこの問題の解決の契機を把み取り、そして全面展開するための型を提起した点にその革命的意義を有していた。

羽田闘争が開拓した新しい闘争の型は次のようなものであった。①課題〜ベトナム反戦、侵略加担阻止、②闘争形態〜現地闘争、③闘争戦術〜実力闘争。闘争主体に関しては党派によって組織された学生を主要構成部分とする実力部隊、④党派による組織化のみには集約しきれない（動労青年部の結集など）反戦青年委員会。この両者によって一〇・八羽田闘争は遂行されたのであった。

課題の問題としては、日帝のベトナム革命闘争に対する反革命的介入が米帝への協力として隠然公然と進行していた事実がまずあった。「協力」「加担」の内実は、在日米軍基地の使用許可（ベトナム出撃）、軍需製品の製造と米軍などに対する販売、輸送、国際政治レベルでの「米帝のベトナム侵略・反革命」への支持、（佐藤訪ベトナムなど）などであった。これらの意味するものは何であったのか。第一には、世界ブルジョアジーの総利害の一環としての日米両帝国主義の共同利害から規定された要因。すなわち、ベトナム革命闘争の粉砕という共同利害に基づき、その法的表現として安保条約の執行という形式にしたがいつつ、米帝のベトナム侵略・反革命に協力した点である。第二には、日帝の資本過剰を対アジア経済侵略（資本輸出）によって解決するための独自の東北アジア、東南アジア帝国主義政治経済ブロック形成に対する野望という日帝の個別利害を貫徹するための布石という点である。

こうした、日帝とベトナム革命闘争との関連における総過程の中で、課題としての「ベトナム反戦」は、次のような特殊的な規定を受けていたと考えることができる。

①日帝の七〇年代アジア反革命侵略への突破口としてベトナム侵略加担を把握し、それに対する反帝闘争を国内において組織するという闘争（いわば具体的反帝闘争）は、旧左翼はもちろん「新左翼」においても可能ではなかった点。すなわち闘争はあくまでも「反戦闘争」として第一義的には定在し、新左翼の内包していた反帝的、国際主義的質はまずイデオロギー的に、その限りでの抽象性をもってしか表現されえなかったのである。羽田闘争の爆発以降、広範な大衆によって語られ、市民社会の底部に深く浸透していった幾つかのスローガン、たとえば、「内なるベトナム」「ベトナム人民に対する加害者としての自覚」「日本を第二、第三のベトナムにせよ」などは、一〇・八羽田闘争と基本的にそれ以降六八年一〇・二一まで続く一連のベトナム反戦闘争の質の有効性と限界性を鋭く照らし出す。それは今やもう古びたものになってしまった。ベトナム革命闘争がインドシナ全域に拡大し、さらにタイ、マレーシア、インドネシア、そしてフィリッピン

へ、東南アジア革命闘争として展開する可能性をも現実化した現在、たんなる「ベトナム反戦」スローガンに固執するのは反動的でさえある。現在の時点におけるスローガンは、「インドシナ革命闘争勝利、東南アジア革命闘争の永続的展開、東北アジア革命闘争（日本―朝鮮革命）を実現せよ！」という内実を有しなければならない。

「内なるベトナム」の自覚は、「進歩派」「革新派」の名のもとに一切の闘争をカンパニア的に歪曲し、放棄して行く（そしてその結果ベトナム人民に現実的に敵対して行く）、社共運動の厚顔な無自覚さに対する鋭い大衆的憤激としてまず、大衆化したのである。この「反帝」の抽象性、イデオロギー批判性に対応するものとして、六〇年代「新左翼」における、客観的な戦後民主主義への一定の依存関係があった。「新左翼」の思想は、すでに戦後型市民の意識をその根底において超えてはいたが、同時に「国民世論はベトナム戦争に反対」という部分を少なくとも自己の後方に措定することが可能だった。つまり、要約すれば、ベトナム反戦闘争は、反帝闘争が真に具体的に展開されるための条件を形成した。すでにのりこえた戦後階級闘争の質を引きづりながら、しかも次の段階へ飛躍するための過渡期として、六七年、六八年のベトナム反戦闘争があった。レーニンの革命的反戦闘争の構造は、この時期においては完全に逆立して登場した。すなわち、反帝闘争が反戦闘争として組織されたのではなく、反戦闘争が反帝闘争として展開されたのである。

②この時期におけるベトナム反戦闘争の現実的展開は、常に侵略加担の事実を、拠点＝現地においてバクロするという形式をとったのである。これをバクロすることによって、一つには、「安定と繁栄」の六〇年代の神話の中に解体されきったプロレタリア階級・人民に、「日常性の内の侵略加担」の自覚をせまり、さらにそこを拠点とした新たなる主体形成を獲得していったこと、二つには、社共戦後革新勢力の無能力と欺瞞性を明らかにし、その外部に闘争主体の結集軸を指定しえたことを、革命的左派は自己の主体形成に十分に役立てることができた。

ベトナム反戦・侵略加担阻止の課題と、現地実力闘争の闘争戦術・形態の意味するものに問題を移行させる。

戦後社会の崩壊は、かつてのように、議会内に階級矛盾の焦点が形成されるわけではなくなった点に鋭く表現された。特に、ベトナム反革命侵略への加担を深める日帝の矛盾は、議会内にではなく、特に侵略拠点の「現地」に集中的に蓄積されていた。他方、登場したばかりの革命的左派には、伝統的な議会を中軸とした全国政治闘争を展開する力量も、その必要性の確認もなかった。「新左翼」は、侵略拠点の現地において、帝国主義本国における反革命的現状維持を突破する鋭い実力闘争を展開することにより、市民社会内部の矛盾を引き出し、発火させることに成功したのであった。羽田以降、佐世保、王子、成田、全国反基地、新宿と連続する「現地実力闘争」の連鎖は、六〇年安保闘争に代表される闘争の型とはまったく異なった種類の全国政治闘争を形成したのである。

当面、一〇・八羽田闘争においては、主要に党派の実力部隊のみで闘われた現地実力闘争が、一一・一二羽田では党派の実力部隊の背後に、反戦青年委員会の結集を始めとする厚い層をなしたスクラム部隊を創出することに成功し、さらには、佐世保では大量の「市民」、王子では「群衆」、そして新宿では「生産点」におけるプロレタリアートの闘争をも、実力部隊は自己の後方に次々と組織していったのであ

る。現地実力闘争のこの高揚が、後の全国学園闘争の爆発とともに、革命的左派の政治へゲモニーとしての確立に全面的な支柱を提供したことは疑いない事実である。

ここで注目すべきなのは、第一に、王子における現地住民との結合、あるいは三里塚における現地農民との結合を党派の実力部隊がかちとることによって、これら「現地」に、七〇年代的質を有した反帝地域拠点の萌芽的形成の契機を残した点であり、第二に、セクトとノンセクトの相互依存と相互反発という、六九年度の階級闘争の構造を規定する運動上の矛盾が形成された点である。

すなわち、党派の実力部隊の「市街戦」のもたらす衝撃は、確実に市民社会の底部から新しい闘争主体を輩出せしめるにもかかわらず、それらはただちに諸党派に分割されることはなく、反帝政治勢力の一員ではあるが党派には属さない「ノン・セクト」として膨大な層をなすにいたるのである。これらの「ノン・セクト」が、「組織でなく運動」という原則によって動いてきたべ平連やその類似の運動体と結合するのはある意味では当然といえた。羽田闘争以降、全国各地に無数のノン・セクト地域運動体が形成されたのはこれらの理由によると思われる。そしてこれらノン・セクト地域運動体は、「一九六八年六月行動」の呼びかけによって、全国的な反基地闘争、侵略拠点撃破闘争に結合するにいたる。すなわち党派の実力部隊によって市民社会深部から呼びおこされた無型のエネルギーは、こうした運動体として自己を表現し始めたのである。

一九六八年六月行動の前進は、夏期の全国反基地闘争に分節化しつつ、秋期の、再度の全国的集中へと登りつめていった。一〇・八、一〇・二一の二波にわたる新宿闘争がそれである。

一〇・八新宿米タン実力阻止闘争は、「ベトナム侵略加担阻止現地実力闘争」の一年間にわたる深化の結果を大衆的な闘争の爆発という形で明白にした。「侵略拠点」新宿に、先行的に投入される党派実力部隊、その後方に展開される群衆の自然発生的な「反権力」闘争への決起、一〇・八を前後して展開された国鉄労働者の米タン阻止闘争、これらの諸要因の結合として、新宿駅とその周囲における機動隊の実力粉砕、街路・駅頭占拠、街頭バリケード戦の展開がかちとられたのであった。一〇・八新宿闘争は、六七年一〇・八羽田闘争が切り拓いた階級闘争の新しい主体、闘争の型を全面展開しつくしたところに、その意義があった。「ベトナム反戦闘争」は、その限りでは、ひとつの頂点に登りつめようとしていた。そして、一〇・八羽田闘争以降の戦闘的大衆闘争は、続いて爆発した一〇・二一新宿闘争によって最頂点に達したのだった。しかし、頂点への登りつめは、同時にその崩壊の始まりでもあった。それでは、一〇・二一の二面性とは何であったのだろうか。それを、一〇・八羽田からの現地実力闘争の頂点と、昨秋安保政治決戦に連続する敗北の起点として把握することもできる。一〇・二一では何が問われていたのだろうか。

一〇・二一闘争で問われていたもの。①課題としての「ベトナム反戦・侵略加担阻止」が、階級闘争の主軸であるための特定の条件を失ないつつあった点。②現地実力闘争の有効性が、戦後社会における擬制の「安定と繁栄」の根拠を問い、今やひとつのイデオロギー的欺瞞への全面的転化を完了した戦後民主主義を告発する限りで市民社会底部から膨大な反帝政治勢力的主体を輩出せしめる決定的な媒体であったというその一点において、それが涸渇しようとしていた点、③日帝の「ベトナム侵略加担の推進」という形式に見合った反革命―抑圧―

侵略の抽象的部分性の本格化が、「一〇・二一騒乱罪発動」の中に示された点。

六七年以来の戦闘的大衆闘争が登りつめた頂点としての六八年一〇・二一闘争は、主体的にも客体的にも、階級闘争の新しい局面、新しい水準を一挙に開示したのである。その内実としては、日帝の七〇年代アジア反革命的主体形成の本格化、すなわち、六五、六六、六七、六八年までの米帝のベトナム反革命侵略に隠然・公然と加担して行くという、その限りでは依然として受動的な日帝の動向、アジア反革命侵略を可能とするための政治社会再編、帝国主義的抑圧の抽象性、部分性が、政治過程においては、「安保・沖縄」問題の帝国主義的再編、処理をめぐって全面化・能動化・具体化せんとしてきたことである。この意味での、課題の「ベトナム反戦」から「安保沖縄」への転化は、六七、六八年の戦闘的大衆闘争が対立しつつも依拠し、利用することのできた「戦後民主主義」の基盤が完璧に解体することをもたらしたのである。新宿闘争において萌芽的に見られた（それは大衆闘争の奔流によって打ち破られはしたが）「都市ロック・アウト」「上からの自警団の組織化」「機動隊の質的量的な増強」などは、戦闘的大衆闘争全体の非合法化を実現するものとしての日帝権力による十・二一騒乱罪攻撃とともに、日帝ブルジョアジーが、戦後民主主義という全体的へゲモニー形態（たんに権力形態、国家形態を規定するだけでなく、市民社会の諸へゲモニーの形態をもそれは規定していた）を自から解体し、プロレタリア人民、戦闘的大衆闘争の主体に対して戦後民主主義という両へゲモニーの妥協の場としての「特殊なる闘争空間」を排除する、帝国主義的抑圧の質的強化として実現されつつあったのである。そしてこのことは、国家としての、また体制内イデオロギーとしての戦後民主主義に対するラディカルな批判者として戦闘的大衆を結集し、新しいへゲモニーに自己を高めた革命的左派を重大な試練に追いやった。歴史的事実としては、六九年度階級闘争において革命的左派はついにこの試練を突破しきれなかったのであるが。

端的にいって、「内なるベトナム」というスローガンに代表された国際主義の抽象性が問われたのであり、一般的反政府闘争、侵略加担阻止闘争として組まれた「反帝闘争」の抽象性（反帝が反戦として、

つまり一般民主主義的要素をも包括していた歴史的限界性）が問われたのであった。

一〇・二一新宿闘争は、「新宿米タン現地実力阻止闘争」として、その限りで爆発した。しかし、迫まり来る階級闘争の激化は、六七、六八年の革命的左派＝反帝政治勢力の形成期をいまだその脆弱な主体の質にあまる重みをもって、否応なく次の段階に押しあげつつあった。

六八年の末に日本階級闘争が直面せざるを得なかったその質的転化の必然性に対して、六〇年代新左翼運動は、闘争戦術＝形態の「中央闘争」化において応えんとしたのであった。六八年一一・七闘争、そして六九年四・二八闘争がそれである。しかしながら、六九年四・二八闘争の敗北と挫折は、党派軍団の投入地点を「現地から中央」へと移行させることによっては、当時直面していた問題の解決になりえないことを明確に示したのであった。六〇年代新左翼運動の極北たる赤軍派の発生もここにその根拠を有する。わが党は、四・二八中央実力闘争の敗北を、迫まり来る秋期政治決戦の勝利に向けて止揚する指針として、「叛乱型政治闘争」を提起したのであった。

叛乱型政治闘争論は、第一に、六七年以降のベトナム反戦闘争の高揚、戦闘的反戦、反政府闘争の激発を、大学闘争の高揚をも含めて、いかに安保闘争に、総体として止揚するのかという問題と、第二に、政府危機を創出し、政治危機を獲得するための、政府打倒闘争はいかに実現されうるのかという問題とを、すなわち「戦闘的大衆闘争から政府打倒闘争」への発展の論理を、闘争形態論・闘争戦術論にまで絞り上げつつ、解明せんとするものに他ならなかった。この二点にわたる問題に、われわれはいかにして答えたのだろうか。

①「侵略拠点撃破闘争」を通じて、ベトナム反戦闘争を安保粉砕闘争に転化するという路線は、さらに社会叛乱闘争たる大学闘争の高揚をも踏まえて、一切の国独資型支配構造が蓄積する矛盾を、七〇年への帝国主義的国内再編が蓄積する矛盾を、「叛乱型」の大衆闘争に転化し、市民社会底部からの闘争の爆発を準備しつつ、それを「拠点政治ストライキ」のプロレタリア・ヘゲモニーをもって、政府打倒闘争に集約するという路線に発展した。この際重要なのは中核などの「政府打倒」なき羽田現地阻止主義派に対して、「安保粉砕＝佐藤訪米阻止＝政府危機創出」のシェーマをもって「政府打倒闘争」の意義を鮮明にした点である。

②政府打倒闘争をかちとる闘争戦術として措定されたのは、「拠点政治ストライキを軸とする街頭制圧・地区叛乱」に他ならなかった。全大学がバリケードで武装され、新宿闘争に見られた帝国主義的抑圧強化に対する自然発生的な大衆の憤懣の増大を見るならば、かかる「拠点政治スト・地区叛乱」は、ただちに全都全国の総叛乱に拡大しうると展望したのであった。かかる叛乱型政治闘争の、一〇・二一闘争を突破口とする爆発のみが、深刻な政治危機を創出しうるという発想こそ、当時のわれわれの政治路線における土台を構成していた。

以上二点を確認しつつ、われわれは、全力をあげて秋期政治決戦に突入せんとしたのであった。

しかしながら、五月段階におけるわれわれの展望は、愛知訪米を突破口とする、日帝の政治攻勢の質的深化によって、その土台そのものが解体せしめられていった。すなわち、叛乱型政治闘争の第一の基盤であった「侵略拠点現地」に蓄積される諸矛盾の叛乱型爆発は、アスパック伊東現地闘争の不発と敗北により、その第二の基盤であった「大学闘争を先頭とする社会叛乱闘争」は、大学法の強行による学園

バリケード破壊、国労動労反合闘争の買い取りによって、各々反革命的に抑圧せしめられていったのである。かかる現実の根拠は、なによりも、戦後民主主義の枠を先行的に突破した日帝国家権力の予防反革命的抑圧強化に、抽象的反帝闘争たる戦闘的大衆闘争、純粋社会叛乱たる大学闘争の戦後民主主義への逆依存性が、有効に対処しえなかった点にあったのだ。

かかるものとして秋期政治決戦は、「強いられた決戦」としての性格を有して闘われねばならなかった。われわれは、一〇・二一闘争、一一・一三闘争を、あくまでも生産点拠点政治ストライキと街頭叛乱の結合においてかちとらんと死力を尽した。くりかえすまでもなく、秋期安保政治決戦においてわが党が設定した政治的獲得目標は「佐藤訪米阻止・佐藤帝国主義政府打倒」であり、その政治的目標を獲得するためにわが党が計画した基本的戦術は「拠点政治ストライキの先行的・連鎖的波及を基軸とする叛乱型政治闘争の波状的・連続的展開（拠点政治スト・街頭叛乱・政府中枢進撃）」であった。しかしながらわれわれはこの闘いに敗北せざるをえなかった。それは、個々の戦術上の誤まりから説明することはできないある種の「絶対的限界性」に、われわれを含めての六〇年代新左翼が直面したことに帰因している。それは、一〇・一〇大衆カンパニア闘争と、一〇・二一実力闘争との矛盾と断絶の中に、明確に示されている。

ともあれ、わが党の労学軍団の激闘は、都庁において、築地において、あるいは扇町において、戦後階級闘争最初にして最後の「政府打倒闘争」を、同志の血と屍の名において切り拓いたのだった。七〇年代反帝闘争の指針たる**反帝拠点闘争**と**ソヴエト型統一戦線**も、かかる秋期政治決戦の激闘からのみ提起されえたのである。

〔II〕東アジア＝日本革命戦略と七〇年代階級闘争

わが党は同志糟谷孝幸の血をもって染めぬかれた六九年秋期安保政治決戦の敗北の痛苦にみちた総括と教訓をふまえつつ、日米共同声明以降の日本階級闘争の構造的転換に相即する具体的反帝闘争—労働者闘争の構築の中から、七〇年階級闘争への主体的推転の一歩一歩を、反帝拠点闘争—反帝労働運動—ソヴェト型統一戦線構築の血のにじむような実践的積み上げとその運動＝組織論的深化を通じて切り拓き、この現実的実践的到達地平をふまえて四大会三中委（七〇年七月）において〝東アジア＝日本革命勝利〟の確固たる戦略的提起への飛躍を闘いとった。そして、さらに四中委（七〇年一一月）で〝七〇年代革命党建設〟の組織戦略的一歩を切り拓らき、歴史的五回大会を七一年初頭に闘いとらんとしている。

七〇年代階級闘争と東アジア＝日本革命の戦略スローガンは、次の如く確固としてかつ明確に提起されなければならない。

☆ 日本プロレタリアート人民とアジア第三世界解放闘争との合流をかちとり、日帝打倒—東アジア革命勝利へ！

☆ 日帝のアジア侵略・反革命を、日本プロレタリアートの総反乱で撃砕せよ！

☆ アジア・太平洋反帝国際統一戦線の形成をかちとり、米日帝国主義の東アジア支配体制を粉砕せよ！

☆ 東アジア革命の勝利的進撃の中で、アジア労働者国家を不抜の世界革命根拠地へ！

☆ 第三世界解放革命と先進国プロレタリアートの結合によって、新

たな共産主義インターナショナルをかちとれ！

☆ 日・朝・中人民の革命的団結万才！ 東アジア革命勝利！

☆ 東アジアを、プロレタリア世界革命の渦心たらしめよ！

(A) 東アジア＝日本革命戦略確定の前提的立場

東アジア＝日本革命の戦略的提起は、六〇年新左翼の抽象的世界革命主義（理念としての世界革命の立場プラス内実における一国主義）および先進国革命主義と、その重要な理論的基礎としてある危機論型革命論の根底的克服の上に提起された。抽象的世界革命主義＝先進国革命主義＝一国革命主義は、真実の世界革命の具体的総体性＝現実性を獲得しえぬ観念的擬似革命性として定型化された六〇年代日本新左翼運動の歴史的限界性を体現する理念的立場性に他ならず、ロシア革命以降の現実の世界革命過程を担いきりひらいてきた中国革命→ベトナム革命の第三世界解放革命過程とは切り結ぶことなき擬似戦略であった。六九年秋期決戦の敗北の総括と〝東アジアの革命＝反革命攻防においてのみ内的に措定される日本階級闘争＝日本革命〟という七〇年代的枠組みの深刻な把握の上に提起された〝東アジア日本革命戦略〟は、六〇年代的限界性たる抽象的世界革命主義＝先進国革命主義＝一国革命主義を克服し、**第三世界解放革命との合流においてのみその現実性を獲得する「先進国（日本）」革命**として措定しかえし、獲得すべき革命の世界性を、アジアという場において生きた具体性として把える立場性をその強固な立脚点としている。第三世界解放革命を、単なる「後進国革命」としてとらえ、その運命的限界性（「生産力の低さ」！）を云々する先進国革命主義＝先進国革命優越主義は、その近代主義的本質において、現在決定的に撃砕されなければならない。第三世界解放革命のもつ世界革命的意義の根本的とらえかえしの上に、第三世界解放革命と先進国プロレタリアート人民との革命的合流、過渡期労働者国家のその革命根拠地化という動態的連関において今日の生けるプロレタリア世界革命の基本的な戦略的骨格を確定せねばならない。第三世界解放革命を左翼スターリン主義としてしかとらえられない先進国革命主義者は、今日の世界革命過程の実相とは無縁な徒党でしかない。

先進国革命主義＝一国革命主義の重要な理論的背骨は「危機論型革命論」である。危機論型革命論は、資本主義の物象的危機に革命の「戦略」的展望と運動＝組織路線を直接に無媒介的に基礎づける立場であり、それは本質的に自然成長主義と経済主義であると共に、他方では〝疎外された前衛主義〟（「その日のために党の強化を」！）を生みだす。一国主義的大衆運動主義あるいは大国主義的〝疎外された前衛主義〟は資本の物象的危機＝客体的対象の「危機」のうちに「革命の現実性」―「世界性」をみいだそうとする転倒した立場なのである。（「危機論型革命論」の批判については共労党理論誌『革命の武装』No. 1を参照）

東アジア＝日本革命戦略は、このような抽象的世界革命主義＝先進国革命主義＝一国革命主義と危機論型革命論の根本的批判・克服の上に、六〇年代階級闘争の敗北と七〇年代冒頭の実践的地平にたって、七〇年代における東アジアの革命と反革命の攻防と日帝の画時代的な戦略展開の分析の中から提起されたのである。

(B) 日帝の七〇年代戦略展開と東アジア革命

① 一国主義的戦後の終焉

「安保粉砕・日帝打倒」のスローガンによって日本における階級闘争が全体として政治的に総括される時期は終焉した。日帝はその見かけ上の一国的発展期を終焉させ、みずからの帝国主義的世界政策への独自の接近を開始したのである。

戦後の日本プロレタリアート人民の闘争は基本的に「安保粉砕」をめぐって行なわれてきた。（一九五一年のサンフランシスコ条約の調印、一九六〇年新安保の調印、六九年日米共同声明）そこでは、「安保粉砕」は、日本革命の戦略的環として措定されてきたのであるが、このような事態こそが今や基本的に終わりを告げているのである。

もとより、日帝の世界政策への接近は、現在まさに日米共同声明の執行としてあらわれている過程であり、それゆえ単純な日帝自立論的展開ではない。現在の局面は、日米共同声明がまさに安保の継続強化として提起されるという段階を示している。

日帝は、戦後からの質的な飛躍をもって、あきらかに当面の日米共同声明執行段階をこえた帝国主義的全面展開の過程にはいったのであり、その内実は、東アジアにおける政治的経済的軍事的支配の確立にある。この帝国主義的目標は国内的には、核武装・安保廃棄、いわゆる自前防衛、つまり、安保軍に依存することのない独自の日本帝国に向かっての方向性にほかならない。この方向性を明確にし、かつそれを現在の時点に逆に媒介するものとしての六九年共同声明があったのである。すなわち、われわれがいま対決すべき国内の全体制は、まさに、「安保」をこえた帝国主義的目標へむかっての新安保体制という二重の過程をあらわしており、この二重性を正しくとらえることなしには、われわれの闘いは誤った方向に導かれるだろう。

日本における帝国主義的国内再編は、まさにこの状況に規定されて、きわめて急速に進められている。すなわち七二年の「沖縄返還」と朝鮮半島への日帝の反革命的責任の確立が六九年政治過程の鍵であった。このことからもあきらかなように現在の国内的再編は単なる国内的再編としては語れないのである。それは日帝の東アジア抑圧国家への国内再編としてはじめてその本質を把握することができる。

このことは、国内再編をめぐる闘争において、われわれがただちに戦略的な課題に直面する時代に突入したことを意味している。このような展開は、「安保粉砕・日帝打倒」という戦略の一国主義的性格をあきらかにし、またそれを破産させる。なぜなら「安保粉砕・日帝打倒」は、戦後期における日帝の一国的（国内支配の面では戦後民主主義的）展開期の受動的・自然発生的反映にほかならず、日帝の一国主義が、急進的新左翼運動の主体の側に自然発生的転化されたものとしてあったのである。

現在われわれが日帝打倒を語りうる立場は、世界革命戦略、東アジア＝日本革命戦略の立場からしかあり得ないのである。

② 東アジアにおける革命と反革命

ベトナム解放革命は、先進帝国主義国を含めて全世界に、世界革命の過程をときはなち、そしてほかならぬ東アジアを世界革命の最前線へとおし上げたのである。すなわち、東アジアこそは、戦後一貫して、中国革命の世界史的な勝利の拡大を阻止しその影響力の拡大を遮断しようとする米帝の反革命の中心点だったのであり、米帝の東アジア支配は「北米＝ラテンアメリカ」・「西欧＝アフリカ」の帝国主義支配の構造とは次元を異にする反革命戦略に直接立脚する圧倒的軍事支配として現出した。この米帝支配が、東南アジア人民の武装解放闘争によって軍事的にうちやぶられ、敗北を余儀なくされているのであり、

この中で日帝は「アジアの盟主」として再登場することに自己の命運を賭けるにいたっているのである。

東アジア革命は、「太平洋国家」たる米帝を内部からも脅かす世界革命の正面の位置に立ち、それゆえ、それ自身のなかに「アジア・太平洋革命」をはらむ世界革命の中心環に転化しているのである。世界革命にとって東アジア革命のこの決定的意義は、歴史的には、それがロシア革命→中国革命という世界史上プロレタリア革命の本流と世界帝国主義の盟主たる米帝との歴史的死闘の最前線に位置するところからきている。この構造が破壊されぬかぎり（たとえば中国が「米中平和共存」の回路に誘導されることはこの構造の破壊にみちびくであろう）、東アジア革命は、決して地方性と中断におちこむことはないであろう。

東アジア革命の新しい局面は、ベトナム革命戦争のインドシナ国際革命戦争への転化によってきりひらかれ、東アジア革命情勢全体の転換点がつくりだされた。今や東南アジアの情勢は、北ベトナム・南ベトナム解放戦線・カンブチア民族統一戦線の連合の形成によって革命の国際性の画期的段階をかちとった。米帝は今や孤立主義の必然性とその不可能性―反革命を孤立主義によって貫徹しようとすればますます東アジア支配の危機が深化し、革命の戦線を拡大する―という最も危機的な矛盾に落ちこんだのである。この深刻な帝国主義の危機の中で、米帝の側からする唯一の有効な対応は、あらたに日帝を前線によびだすことである。

インドシナ革命の新たな展開、日帝が日米共同声明を踏み台として、東北アジア・東南アジアに独自な登場をとげたこと――この東アジアにおける革命の新たな水準での対決は、北ベトナム・中国・北朝鮮のアジア労働者国家の革命根拠地国家としての再編過程を促進しているのである。（「中朝共同声明」等）

③　日帝の戦略的展開とその方向

日帝の日米共同声明以降の七〇年代戦略展開は、以下の四つの動因が〝東アジアにおける反革命の危機〟によって結合されることによって作動したものである。すなわち、(1)東アジアにおける帝国主義的支配総体の危機の中で、反革命の「責任」をひきうける焦眉の必要性、(2)この危機に個別日帝の立場から帝国主義的に対処する必要性、とくに東南アジア革命の東北アジアへの北上を阻止し、そこに「生命線」をひく独自の必要性、(3)戦後期の経済膨張――日本資本主義の異常な拡大と全世界をその再生産構造に組みいれたことからする独自の世界政策への接近の必要性、(4)米帝の敗北を個別日帝の利益の立場から運用しようとする狙い。これらの四動因は、(1)によって基底的に制約されているのである。

日帝の戦略的展開の当面の環は何か。それは、日米共同声明の執行により沖縄を帝国主義的に統合することを通じて、東北アジア圏（韓国・台湾）を決定的に日本帝国の勢力圏に編入し、そこに日帝の反革命支配を確立することにある。このことは、東北アジア圏を単に市場として支配することではなく、この独自の勢力圏を足場に東南アジアに政治大国として反革命的に登場することと組み合わされている。日米共同声明の執行過程とは、正にこの二重の反革命的任務の同時的遂行なのであり、この過程の一応の到達点として、七二年沖縄返還＝自衛隊沖縄進駐＝四次防発足が位置しているのである。

日帝による東北アジアを勢力圏として掌握することと東南アジアへ進出することの一個二重的推進は、正に東北アジアの革命を分断する

陣型とし画策されているのである。（反革命の側にこの分断はすでにない）。東北アジアを反革命に固めきるという七二年への過程は、東北アジアへの革命の北上を阻止し、東北アジアの「域内平和」を日帝のもとに組織し、この地域を東南アジアから切断するという性格をもっている。日帝の「本丸」たる東北アジアにおいて日帝が打ちやぶられるためには、日帝による東北アジアの東南アジアからの反革命的分断（東北アジアの「域内平和」）を、革命の側がうちやぶり、東南アジア革命に東北アジアを主体的に合流させることが必要なのであり、「東アジア＝日本革命」の戦略的提起は、この「東北アジア↑↓東南アジア」という構造をもち、「東北アジア革命路線」＝〝日本―沖縄―朝鮮革命〟の戦略的具体化をその内に包摂する革命的戦略路線にほかならないのである。

④　日本国家の転質――戦略展開を支える国内再編

日帝の国内的政治再編はかかる全体的構造の中で日帝の戦略展開をささえるものとして強行されている。それは、戦後国家の清算の新たな帝国主義的上部構造の建設として総括され、それを支える新たな国内基盤形成として展開されるのである。この国内的基礎は、一切の右翼的勢力とかつての「戦後革新勢力」（完全にブルジョア・ヘゲモニー下に組みこまれた）とを単一の右翼ブロックとして戦略的に形成されるのである。（労働運動の帝国主義再編＝戦線統一の決定的な反革命的意味）。この帝国主義的右翼ブロック国家の特徴は、それが外見上戦後国家のなしくずし的延長線上に、すなわち、戦後国家の一国主義的「国民統合」を外見的に維持しつつ形成されるがゆえに、蔽いかくされ、それ故に特殊に倍化された帝国主義的排外主義として現出する点である。日本国家はもはや現実には一国の枠を脱け出し、韓国・台湾をも政治的に総括するに至っているが、この現実が日本一国における「域内平和」として集約され、それは「拡大され、もはや一国的ではない一国主義」としてそれ自体が苛烈な排外主義に転化する。その重圧は、帝国主義的に統合されようとしている沖縄人民、入管体制（反革命的に再編強化されつつある）の下にある在日朝鮮人・在日アジア人の上に加重される。民族的抑圧・差別を、正に抑圧差別として認めないという体制――これが、戦後国家からなしくずし的転化が生みだす特徴であり、右翼ブロック国家の国民統合の存在仕方である。

この帝国主義的右翼ブロックは、極右派と帝国主義的労働運動を含む親帝右派、中間派＝人民戦線派の前者のヘゲによる単一ブロックへの統合であり、日本国家は、このブロックに基礎をおき、その弱点を治安警察の暴力で強力に補完するそのようなブルジョア民主主義的帝国主義国家を規定しなければならない。

以上の日帝の戦略展開とそれを支える国内再編は、第一に東アジア総体の帝国主義支配の危機の中での反革命的登場である点に、第二に日帝の巨大な経済膨張はいまや東アジアにとどまらず、全世界にわた

＊文化を支え
暮しをリードする
王子製紙
本社　東京都中央区銀座4-3
工場　北海道苫小牧市
愛知県春日井市

る政治的・軍事的支配の確保を一方では要請するが現実には全く不可能なこと、第三に、六〇年代高成長がうみだし七〇年代戦略展開の結果として激化する巨大な国独資的社会矛盾を蓄積し、これを国内的に収拾する手段と能力を欠いたまま苛酷な再編成を上から強行せざるをえないこと、第四に、右翼ブロックの反革命的政治結集の水準が日帝の戦略展開とは矛盾して現状的維持的折衷性というジレンマを内的にかかえこんでいること、第五に日帝の一国主義的集約形態はその内に沖縄・韓国という決定的な革命的火薬庫（東南アジアの革命の火に直結しうる）をかかえこんでいること、これらの中に重大な脆弱性をはらんでいるのである。とりわけ、「中国問題」の国際政治の前線への登場と米日帝国主義のアジア再編の前提の危機的動揺の中で鋭く焦点化する朝鮮情勢、「朴三選」をめぐる韓国内部の危機の急速な成熟は、日帝の戦略展開とその構造に決定的な打撃を与えうる諸条件を形成せずにはおかない。

(C) 七〇年代階級闘争の現実的地平

東アジアの革命と反革命の攻防と、日帝の七〇年代戦略展開の以上の分析の中から、七〇年代階級闘争の現実的地平――東アジア＝日本革命の勝利を切り拓く日本プロレタリアート人民の課題は次のように設定される。

第一は、全力を尽して、先行する東南アジア革命の波頭を、東北アジア革命に連動、結合させ、単一の東アジア革命の奔流を形成することである。日本―沖縄―朝鮮をつらぬく単一の反帝闘争、国際革命の戦線をつくり上げること、朝鮮人民・沖縄人民の闘いと決起に徹頭徹尾自己犠牲的に運命をともにする日本「本土」プロレタリアート・人民の戦線を構築することである。この国際的枠組みの中で、七二年沖縄統合・自衛隊沖縄進駐への全国的政治対決をつくり上げねばならない。

第二は、日帝のギマン的域内平和体制に鋭い亀裂をいれることである。すなわち、擬似一国主義的囲込み体制を現存する国際反革命抑圧体制として徹底的に暴露しぬき、七〇年代日帝の国内的階級基盤たる右翼ブロックとその上にたつ新たな帝国主義反革命上部構造の形成との非和解的戦闘を展開することによって、日本プロレタリアート人民を東アジア革命の戦列に獲得することである。「国益優先・労資一体」を掲げ帝国主義支配階級の下僕としてアジアに乗り出しつつある特権的「労働運動」＝帝国主義的労働運動と対決する反帝労働運動の革命的潮流の形成は、七〇年闘争の決定的な一大中心環である。

第三は、七〇年代帝国主義国内再編によって加重される国独資の全矛盾の蓄積を基礎とした労働者人民の社会的反乱を激発させ、それを党の首尾一貫した戦略的指導力によって東アジア革命の国際的任務と結合させることである。ここにおいても、反帝労働運動と反帝地区共闘――ソヴェト型統一戦線の形成が決定的な環をなす。

第四に、以上の戦略的諸課題が、ことごとく新たな質と構造をもった七〇年代的運動陣型を要求していること、別言すれば、六〇年後半反帝闘争の直接的延長線上では決して勝利的に遂行されないことを確認せねばならない。

入管闘争・叛軍闘争・反帝労働運動をはじめとする七〇代階級闘争の現実的構成部分は、従って単なる個別闘争では断じてなく、それ故一般的なカンパニア闘争や組合主義的闘争の水準においては一歩も前進することはできないのであり、それらは、東ジア＝日本革命の勝利

に向けて永続的に闘い抜かれる戦略的な闘争に他ならないのである。

入管闘争は、七〇年闘争の核心的内容を凝集的にはらんだ闘争である。すなわち、それは、日本プロレタリアート人民の帝国主義公民から国際主義的プロレタリアート人民への「つくりかえ」を賭けた戦略的闘争なのであり、従って日本階級闘争・戦後階級闘争総体の歴史的限界とその展開構造それ自身の根底的な変革なしには闘いぬけない闘争である。（東アジア解放闘争との関連における戦前戦後日本階級闘争の歴史的とらえかえしは、『統一』三八七～八号の「糟谷孝幸虐殺一周年党政治集会基調報告」を参照されたい）。入管闘争は、六〇年代後半反帝闘争の如く「国民」の即自的要求に何らかの形で依拠するのは不可能であり（即自的要求は常に一国主義的である）、在日被抑圧民族との関係性において具体的に問われる国際主義的な階級的再形成を現実的に着手することに他ならない。同時にそれは、六〇年代新左翼の「表層性」という否定的体質の徹底的な克服を死活の問題として提起するのであり、われわれは「真の意味での下層プロレタリアート」（レーニン）に強固に立脚し、敵の反革命的管制高地のただ中に鋭い反帝国主義・プロレタリア国際主義の戦線をつくりださねばならない。入管闘争は、民族的統一性（国家を媒介に帝国主義公民として総括されている）と帝国主義的市民社会をその根底から分解する「国民」の二つの部分の非和解的な闘争（内戦の質をはらんだ）の展開とアジア第三世界解放革命との合流という七〇年代階級闘争の根本的特質を凝集的に内在させている。反入管地区宣伝工作者集団の密集した形成を軸に強固な反入管戦線の具体的構築をおし進めねばならない。

小西誠三曹の決起を画期として形成・展開されてきた叛軍闘争は東アジア＝日本革命の現実性を獲得していく重大な戦略的闘争に他ならない。叛軍闘争は、反基地・反産軍闘争、自衛隊とその帝国主義軍隊化を支える社会的基盤を解体する闘争、在日米軍兵士反乱米軍解体闘争をも包摂する闘争であり、その基軸は革命兵士のプロレタリアートへの獲得に他ならない。東アジア＝日本革命、なかんずく東北アジア国際革命は、大衆武装―武装闘争ばかりでなく軍隊（米軍も含めて）の「獲得」をめぐる闘争の死活性を具体的に提起しているのであり、「武装大衆闘争と兵士反乱の合流で、自衛隊解体―人民革命軍建設を！」という戦略スローガンに導かれた首尾一貫した叛軍闘争の目的意識的展開が必要なのである。小西三曹の決起を起点とする叛軍闘争の「助走的段階」（第一期）から、今日隊内工作・兵士工作を主軸とする叛軍闘争の本格的展開の時期に入っている。密集した兵士工作者集団の全国的系統的形成、その担い手を不断に輩出し同時に具体的攻撃性をもった反基地反軍産闘争を担う大衆的な地区行動委員会の強化が必要である。その中で反乱兵士・革命兵士の強固な組織的結集を軍隊内における党細胞―大衆的政治組織の建設をテコにおしすすめねばならない。日帝の現局面のおける帝国主義軍隊化の過程的矛盾（「魂なき帝軍」）は、一方では三島「反革命前段階蜂起」に代表される反革命的「叛軍闘争」を不断によび起こすが、他方「自らの死をかけるべき価値」を真実の国際主義と革命戦争の担い手たることにみいだす革命的職業軍人・青年将校の獲得の決定的な課題を提起している。その核心は、帝国主義公民の自己解体と東北アジア国際革命への革命的国際主義の思想性に他ならない。

反帝労働運動の革命的潮流の形成の決定的な戦略的意義は先にのべた通りである。日本新左翼の「反戦派労働運動」的限界＝「社会主義

と労働運動の結合の自然発生性」は、不断に一方での労働運動からの召還と他方での組合主義的組織温存主義を生みだしている。わが党は、東アジア＝日本革命の戦略性の中に七〇年代の「社会主義と労働運動の結合」を闘いとるべく、日本帝国主義の心臓部・コンビナートをゆるがしたゼネラル石油精製不当解雇撤回闘争を先頭にして、全金神鋼機器や私鉄中鉄の〝組合分裂下〟の闘争や都職の差別撤廃闘争など、急テンポに展開されつつある帝国主義的右派運動＝〝戦線統一〟運動に対決し、日本帝国主義の戦略的部門における大衆的労働者反乱を基軸とする七〇年代反帝労働運動の全国的陣型――職場・工場・地域・産業・全国をつらぬく運動陣型の創出のために闘いぬいてきた。ゼネ石精闘争敗北の試練と教訓の中から、わが党はゼネ石精闘争連帯行動委員会運動の展開をはじめとして、自主的職場闘争委員会、職場共闘、大衆的職場オルグ団、戦闘的第一組合、戦闘的地域(産別)労働者共闘、そして工場における党的中核＝自立的な政治的活動家組織の問題など、反帝労働運動の組織戦略にかかわる重要な経験と要素を獲得してきた。(ゼネ石精闘争の総括は『統一』三八一号、反帝労働運動の運動・組織論的解明は『革命の武装』No.1及び『統一』三八〇号の白川論文を参照)。反帝労働運動が、戦後革命の流産と相対的安定期に形成され今や階級形成の桎梏に転化している「一国主義的戦闘性」をうちやぶり、アジア的展開をとげている帝国主義的労動運動との対決の中で、「下層」プロレタリアートとアジア人民との連帯を闘いとっていくことぬきに、日本プロレタリアートの革命主体への形成はありえない。わが党は、現在不屈の革命的執念をもって、日帝の東アジア侵略の尖兵・産軍複合体の拠点・親帝右派労働運動の筆頭＝大日産のただ中からの労働者反乱を、七〇年代反帝労働運動の巨大な烽火・全国の闘う労働者の一大拠点闘争として爆発させるべく全力を傾けている。

〔Ⅲ〕七〇年代革命党の建設

わが共産主義労働者党は、第三回中央委員会での東アジアの革命戦略にもとづく七〇年代革命党の政治的内実の確定をふまえ、第四回中央委員会で「七〇年代革命党建設」の本格的提起を行なった。

三中委が確定した七〇年代革命党の政治的内実は第一に、東アジア革命戦略を獲得した党、全党的な戦略的、綱領的な団結を獲得した党であり、第二に、反帝労働運動の形成展開を領導しうる党、第三に、ソヴェト型統一戦線の形成を領導しうる党、第四に、党の機能としての軍事を駆使しうる党、第五に、世界党としての内実を現実に獲得していく党、新たな共産主義インターナショナルの形成を現実的に着手し担っていく党である。

第一の革命戦略については、われわれは抽象的世界革命派＝一国革命派(反帝反スタ派・「単純世界プロ」派・観念的世界革命戦争派)に対して、獲得すべき革命の世界性をアジアという場において生きた具体性として把えるアジア革命派＝具体的世界革命派として自己を定立する。更に、アジア労働者国家についてトロツキー派(四トロ)の毛沢東・金日成スターリニスト政府打倒、あるいはMLの毛沢東主義＝毛沢東体制無条件支持を拒否し、中国・北朝鮮の東アジア革命の根拠地化の現実性とそれを基礎とした国際的党派闘争として提起する。日帝打倒・東アジア革命のきわめて重大な一戦闘領域として日本国家独占資本主義の内部的破砕の問題を、反帝労働運動―反帝拠点闘争―ソ

ヴェト型統一戦線の問題として接近する。われわれ反米帝反日帝東アジア革命統一戦線の実体的形成、北ベトナム・中国・北朝鮮の革命根拠地への転化、東アジア革命を担うアジア・インターの形成への具体的接近と相互連関的推進の中で、反帝反スタ派、スタ官打倒派、毛沢東依存派を断固として克服していく。

第二について、われわれは、一国的労働運動路線、組合内民同内左派路線、戦闘的経済主義、本工主義に対して、アジア第三世界人民と団結する労働運動、戦闘的革命的潮流の独自の全国的形成、下層プロレタリアートを含む普遍的団結――反帝労働運動とそれを領導する党を対置する。

第三の統一戦線――ソヴェトの問題は、叛軍・入管・公害等の地区大衆行動委員会・職代工代運動に編み上げられてゆく職場委員会・職場行動委員会、それらを基礎とするソヴェト的質をはらんだ反帝地区共闘の建設、反帝統一戦線の全国的再編――ソヴェト型統一戦線の全国的形成を全ゆる回路からおしすすめることである。国独資的矛盾が生みだす根源的な社会反乱闘争は、第一次全共闘運動においてすでに破産した「社会反乱の自然発生性への拝跪没入＝サンディカリズム」も「社会反乱闘争への党派囲い込み的対応→抽象的政治闘争への昇華」も無効である。社会反乱闘争のもつ個別性を不断に止揚しながら、階層をこえた地区的な普遍的団結に不断に形成し、反帝政治闘争と運動的に通流しあう戦略的運動組織陣型の問題として、〈党―ソヴェト〉の質を現在的にはらんだ人民的政治生活の形成、ソヴェト型統一戦線とそれを領導する党の問題としてのみ正しく提起され解決されうるのである。

第四の軍事の問題については、叛軍闘争の秘密細胞作りへの矮少化、党派的「大衆」武装、党＝軍路線、(「軍事の党」)等の誤てる傾向に対して、プロレタリアートへの革命兵士の獲得を基軸とする革命的大衆闘争としての叛軍闘争、ソヴェト的大衆武装、「党の機能として軍事」(軍隊内の党建設・叛軍闘争の指導・武装大衆闘争の指導・党戦闘団建設をつらぬく)を完全に駆しうる党＝「党の軍事」を断固として対置する。軍事問題の戦略的スローガンは「兵士反乱と武装大衆闘争の結合で、自衛隊解体・人民革命軍建設へ」として提起されねばならない。

第五の世界党・インターナショナルの問題について、わが党は、ハバナ―朝鮮―中国―インドシナ―中国をつなぐ第三世界的軸が東アジアという場において、先進帝国主義国日本を包摂しており、東アジア革命の現実性を媒介として第三世界―過渡期国家―帝国主義本国を貫いた普遍的インターの現実的形成の可能性に立脚し、それを主体的に現実化する重要な一環を担うことを党の本質的任務として措定する。東アジア＝日本革命への道を主体的に切り拓くことと、新たな共産主義インターナショナルを建設の主体的一環を担うことは、相補的関係

ふやす
ふやすでおなじみの――、
住友信託銀行
本店
大阪市東区北浜5丁目(新住友ビル)
電話06(203)1321(大代表) 郵便番号541

にあるのである。

以上の三中委のでの東アジア革命戦略から措定される政治的内実の確定をふまえ、わが党は四中委において「七〇年代革命党建設」を全面的に提起した。その核心的内容は次の諸点に要約される。

㈠〝行動の党〟の止揚――〝戦略的行動の党〟へ

わが党は、結党以来〝行動の党〟として自らを形成し、大衆闘争の自立的な内在的発展の論理にあくまで忠実に、大衆行動の最先頭にたって闘いぬく政治的資質をつくり上げてきた。この〝行動の党〟として資質を全面的にうけつぎ発展させながら、七〇年代にむかって大胆な脱皮と飛躍を闘いとろうとしている。すなわち、個々の大衆闘争の戦闘的司令部にとどまることなく、全ゆる戦線の大衆闘争、全ゆる領域での大衆的反乱を、〝東アジア＝日本革命〟――特殊的には〝日本――沖縄――朝鮮革命〟へむけて首尾一貫して戦略的に集中し、ソヴェト型統一戦線運動の全国的陣型へ編みあげていく党、つまり東アジア＝日本階級闘争の総体の政治的指導部たりうる党――〝戦略的行動の党〟への脱皮である。

行動的急進主義と奇襲戦に色どられた六〇年代後半の大衆闘争と六〇年代的〝行動の党〟との相互規定的関係全体を、革命と反革命との一進一退の攻防戦が全構造的レベルで演じられる七〇年代前半の大衆闘争と七〇年代的〝戦略的行動の党〟との相互規定関係に引きあげねばならない。われわれは、「党か、大衆運動か」の二元論的発想が生まれる根拠自体を、戦略的永続的な質をはらむ七〇年代階級闘争の特質に即してのりこえ、党と大衆運動の双方からつくりだされる緊張関係の真只中に自己を定立させる。党と大衆闘争とのあいだに能動的につくりだされる鋭い緊張関係こそ、党の指導性を成長させ、党派性をきたえあげ、党の内的な思想的緊張をつくりだす。

㈡〝学生・インテリ党〟的体質と〝日本社会「上層」の党〟的構造の止揚――〝プロレタリアート・被差別・被抑圧「下層」人民じしんの党〟〝全構造的闘い〟を担い支配構造総体を攻略する党へ

わが党を含めて、六〇年代の新左翼諸党派が、自ら何よりも、イデオロギー的党派〝革命的行動の宣伝の党〟として自己形成したことは、ある意味では歴史的に不可避であった。従ってまた、わが党は、主として学生・インテリゲンチャ・大企業プロレタリアートの一部の戦闘的部分に立脚し、日本社会の限られた「上層」部分に影響力を獲得してきた。階級闘争の攻防の戦線が、あらゆる戦線と階層へひろがっていく七〇年代にあっては、わが党は、真に広大なプロレタリアートと被差別・被抑圧人民諸階層の根ぶかい戦闘力に立脚する党へ、つまり支配体制の全構造、国家独占資本主義的市民社会の全線に深く浸透しながら、体制内に同化＝からめとれることなく、これを内外から破砕しうる党へ飛躍しなければならない。日本帝国主義が構築しつつある全ゆる反革命的管制高地＝支配中枢の中に侵入し、敵の支配構造

Tokyo gas
★東京瓦斯株式会社
東京都中央区八重洲1の3
電話（273）0111（大代表）

の急所を一斉に破砕しうる力をもった党へ成長せねばならない。いいかえれば、戦略的大経営・大工場――しかも本工＝組合員のみならず、臨時工・社外工・下請諸企業労働者、更に在外企業の外国人労働者を含めた敵の支配陣地――をはじめ、全ての被抑圧被差別人民諸階層の中に不抜の影響力を獲得し、全ゆる戦線と領域でプロレタリアート人民の国際主義的な階級形成を不断におしすすめることによって、日帝の反革命的包囲陣に対して正面戦を挑み、革命を根本的に準備しうる現実的力量をそなえた党への成長でなければならない。東アジア人民との革命的合流のもとに、日帝をその内部から破砕し、被抑圧人民の全ゆる階層を結集する普遍的＝ソヴェト的団結を実現しうる党、従って〝工場の党〟〝拠点地区の党〟〝軍隊の党〟〝沖縄の党〟を結ぶ戦略的拠点をにぎりしめる党へのたゆみない接近がはかられねばならない。わが党は、日帝の支配の諸矛盾の結節点にある大工場・拠点地域・軍隊・沖縄などの全国的戦略拠点を具体的に設定し、党の全力量を注入した工作活動をくりひろげる。

㈢〝新左翼内部の革命的分派〟としての党の止揚――六〇年代新左翼総体を内在的に止揚再編し、階級闘争総体を独自に領導する党へ。

東アジア革命闘争の新たな波動と日帝の新たな戦略的展開の中で、今日、六〇年代後半闘争を〝党派軍団――党派的大衆闘争機関――党派間統一戦線〟をもって領導した党派を頂点とする新左翼運動の総体は、深刻な内的再編と転換の過程に入っている。新左翼党派の内的再編過程は、無党派活動家層はもとより、民同型労働組合や社会党内活動家層の流動的な分解過程と結びついて進行している。新左翼の転換過程は、日帝の東アジア反革命戦略展開にともなう日帝と右派労働運動との「大右派ブロック」の形成、および社共ブロック＝民同型労働運動のそれへの全面的屈服という階級的諸勢力総体の歴史的再編過程の重要な一環を構成している。自らの六〇年代的なあり方に無自覚に、かつ保守的しがみつく新左翼諸党派が群生し、旧来の党派的大衆闘争が大衆の新しい闘争と戦闘力の全面展開にとって桎梏となっている以上、われわれは、新左翼総体を七〇年代水準にむかって止揚していかねばならない。同時に、党は新左翼諸党派のあいだの相互関係の枠内でのみ、問題を考え行動をくむ〝狭苦しい党〟のあり方を克服し、自らを〝新左翼内部の革命的分派〟から〝東アジア＝日本階級闘争総体〟を独自に領導しうる党派へおしあげていかねばならない。社共ブロック＝民同型労働運動の〝左翼反対〟派的位置の限界性を止揚し、階級闘争の全ての課題、全ゆる戦線を自らの責任で担いきっていく歴史的役割と現実的な力を、わが党は全力をあげて獲得するであろう。

全日本の闘う労働者・農民・兵士・学生・市民諸君！　日帝打倒・東アジア革命勝利の真紅の旗の下、七〇年代革命党建設の歴史的事業を共に担いぬき、〝赤い七〇年代〟を闘いとれ！

日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派
反スターリン主義革命的プロレタリア党の創成めざして

第一章　破産したパラノイア的決戦主義と革命的プロレタリアートの闘い

六九年秋から七〇年の闘い――七〇年安保＝沖縄闘争の最終局面であると同時に七〇年代闘争の出発点をなす時点におけるこの一年有半の闘いは、日米共同声明の発表に示されるように当面の安保＝沖縄闘争の総体としての敗北を喫した（そしてそれを通じて日本階級闘争の危機と腐敗の一層の深化を端的に示したのであった）のだとはいえ、わが同盟を中核とし、これに指導された戦闘的労働者および全学連の闘いは、日本階級闘争の深部に、その未来を決定する拠点を確固としてうちたてた。とりわけ六九年秋と七〇年六月の結節点的時点における闘いを通じて、それは現実的に立証された。社共および総評の完全な闘争放棄と議会主義的な堕落、そして反代々木はみだし左翼の惨めな破産――これらとは対照的にわが同盟は、労学の大衆的で戦闘的な闘いをゆいいつ組織し、推進したのであった。

①　七〇年闘争と日本左翼戦線の基本的動向

ところですっぽり「体制内化」し安保＝沖縄闘争の大衆的推進をかなぐりすてた既成左翼に対して、「階級決戦」を呼号しつつ、六九年一〇～一一月闘争を武装蜂起主義的にあるいはサンディカリズム的に闘い、それによって同時にまた組織的破産を現実にあらわにし空中分解の危機におとし入れられたのが、わがパラノイア的決戦主義者・ブント＝ブクロとそれにあおられて急速に「革命主義」へ突っぱしった一切の反代々木行動左翼集団であった。そうであるがゆえに彼らは、七〇年「六月決戦」を言葉のうえでは語りながらも、右翼的なカンパニア主義でお茶をにごすか、あるいはマンガにもならないケチな「武闘」に虚ろな自己のなぐさめを見いだすかのいずれでしかなかった。

かくしてふたたび自己破産を確認させられた彼ら小ブルジョア急進

主義者どもは、安保＝沖縄闘争から早々と逃亡し、入管闘争にのりうつり、「入管決戦」をデッチ上げることによって、破産の排外主義的のり切りを策したのであった。だがそうすることによって彼らは、7・7集会における華青闘のかの「告発」を契機として、いっせいに「被抑圧民族への迎合」主義に自己をおとしめ、「華青闘の告発をうけとめる」と称する「坊主ザンゲ＝自己批判」運動を競いあいつつ、毛沢東的民族主義への屈服の道を選んだのであった。

既成左翼ばかりでなく、かかる小ブルジョア急進主義諸集団のはみだし運動をも、執拗なイデオロギー闘争を展開し組織戦術を柔軟に駆使しながら、左翼的＝革命的にのりこえ、反安保＝沖縄闘争、入管闘争の大衆的・戦闘的展開を通じて日本階級闘争の新らしい質を創造し、七〇年代闘争の真実の拠点をきづきあげ、さらに前進しつつあるのが、わが同盟を中心とする反スターリニズム革命的左翼にほかならない。

労働戦線でも学生戦線でも、既成組織の内部において、また独自的な運動を組織し推進しながら、われわれは真に左翼的で戦闘的な運動を、しかも大衆的な規模でつくりだしてきた。六月二三日にゆいいつうちぬかれた動力車労働者の政治ストライキと、これに対するわが全学連、反戦青年委員会の支援闘争とが、かの六・四ストを質的に上回るかたちで実現されたことのなかに、その一端はしめされたのである。

さて七〇年闘争のかかる客観的現実を基礎としつつ、今日の日本階級闘争は七〇年代にむけてかつてない激しい流動と再編の過程に、したがって決定的な転回点にたたされている。

約一〇年にわたる高度経済成長を通じて帝国主義的雄飛の政治経済的基礎を確立したわが支配階級は、国家暴力装置を総動員しつつ反対運動をおしつぶし、七〇年代の日米両帝国主義者の進路を基本的に確定した「共同声明」発表にこぎつけ、基地沖縄の施政権返還問題をブルジョア的に解決すると同時に日米安保同盟の実質的強化をかちとった。これを背景としながら彼らは、衆議院選挙における「勝利」の上に七〇年代の帝国主義的日本の対内的強化と対外進出に自信をもってのりだした。米帝によるベトナム戦争の全インドシナへの拡大に対する公然たる支持の表明と「アジア参戦国」会談への愛知外相の参加、米核戦略に従属した沖縄施政権の七二年返還を先取りし沖縄人民を日帝の支配秩序に編みこむための「国政参加」選挙の強行、在日外国人とりわけ在日北鮮系朝鮮人への抑圧を直接的＝核心的ねらいとする入管攻撃等々の、やつぎばやの攻撃はその露頭にほかならない。

日本帝国主義者は、その再編強化が現実にかつ公然と開始された日米軍事同盟を基礎とし背景として、ベトナム戦争のインドシナ半島への拡大、そして米帝の軍事的・経済的援助の削減などを利用しつつ、朝鮮、台湾、東南アジアへの新植民地主義的侵略を急速におしすすめている。そしてそのためにも、わが支配階級は、ブルジョア・ナショナリズムを煽りたてると同時に国内支配体制を着々と強化しつつある。

わが帝国主義ブルジョアジーの自信にみちた諸政策の被支配階級におけるあらわれが、ほかでもない、いまドラスティックに進行しつつある労働戦線の右翼的再編の策動である。

みずからがつくりだしたにもかかわらず自己の思惑と組織的規制をこえた突出的闘いをくりひろげはじめた反戦青年委員会、これにおどろきあわてて自党組織および労働組合などから反戦の闘いをすすめている戦闘的労働者たちを組織的に排除することを六九年八月に決定し

た社会党の同年暮の総選挙で端的に自己暴露した没落と分裂的危機は、それに拍車をかけた。

いまや右翼的分裂が必至となっている「たたかわざる総評」、没落と分解の歩をはやめつつある社会党、そして後退した社会党の位置にとってかわることを夢想しつつ議会主義クレティン病をいっそう悪化させ、民主連合政府の適法的樹立の名のもとにブルジョア議会選挙への埋没に狂奔する代々木スターリニスト党。かかる既成左翼の今日的動向、そのとどまることを知らぬ腐敗の進行は、日本労働者運動が、総体として帝国主義的秩序にあみこまれつつあることの、現時点における組織的表現にほかならない。かの日米共同声明の発表は、ただたんにわが支配階級にとって一つの結節点的な意味をもっているだけでなく、同時に日本階級闘争が新らしい転機にたたされていることをしめすものにほかならない。

しかも、いわゆる「体制内化」した既成左翼に絶望し、激しい武装闘争を連続的かつ多発的にくりひろげることを念願してたたかった小ブルジョア急進主義諸集団＝八派連合は、六九年秋の「階級決戦」を通じて本質上組織的に壊滅し、第一次ブントの轍をふみつつある。いやむしろ今日彼らは、とりわけブクロ＝中核派は、わが同盟による大衆闘争の左翼的戦闘的推進と原則的にして無慈悲な党派闘争の貫徹から、破産した自己の組織を排外主義的に防衛し壊滅的危機をのりきるために、「革マル＝武装反革命」なるデマゴギーによる狂信的キャンペーンを行なうだけでなく、わが同志海老原を虐殺することによって、その組織的、思想的、道徳的腐敗を極限にまでおしすすめている。のみならず反代々木行動左翼諸集団は、全体としてみずからの明確な路線をかかげることができず、それぞれの組織の変質を、その腐敗過程を急速に進行させている。

二度にわたる華青闘の「告発」――「被抑圧民族の立場」＝民族主義を基準としてセクト・ニヒリズム＝反政治主義、すなわち大衆路線を道徳主義的にうちだしたもの――に反代々木行動左翼総体が屈服し、「抑圧民族としての自己の立場に無自覚であった」ことの「自己批判」＝坊主ザンゲを競いあい、全体として入管闘争における「被抑圧民族への迎合」主義に、したがって毛沢東的民族主義への政治的・思想的な転落の道をつきすすんでしまっていることに、それは端的に示されているのだ。

しかも彼らは、「第三世界」のラディカリズムへの憧憬において、反マルクス主義・反前衛主義を標榜する文字通りの小ブルジョア急進主義者・ノンセクトラディカルズのニヒリズムの群に屈服し没しさることによって、消耗していた彼らを活気づけ、反マルクス主義・反前衛主義の流行に棹さすことしかできない。

それはほかならず、六九年一〇～一一月闘争をパラノイア的決戦主義にもとづいて武装蜂起主義的にあるいは山猫スト願望派としてサンディカリズム的にたたかって破産した、小ブルジョア行動左翼諸集団の破産の自己確認なのである。

だが彼らは、みずからの破産が同時にわが同盟を中心とする革命的左翼の断固たる党派闘争の貫徹を一モメントとして決定的に促進されているというこの厳然たる事実において、みずからの破産の根底的な総括を回避し、むしろ右翼的に清算しつつ、華青闘の「告発」にのりうつることによってそれを道徳主義的に隠蔽し、自己保身と自己延命の道を託したのである。そうであるがゆえに彼ら小ブル急進主義者集団・八派連合の腐敗と危機は、〝相乗的〟に〝連鎖反応的〟に昂進せ

ざるをえないのである。

われわれは、かつて労働者・学生に対してパラノイア的妄想にもとずいて反プロレタリア的な〝犬死〟を強要し、かついま、その破産ののりきりのために腐敗を極めているすべての小ブルジョア急進主義集団に対して、最後の鉄槌をくだすことをいささかもちゅうちょするものではない。そのためにもわれわれは、さしあたり彼らの組織的危機の今日的のりきりとその本質を暴露するとともに、その根拠をなす小ブル的革命主義、パラノイア的決戦主義の核心をえぐりだしておかなければならない。

② パラノイア的決戦主義の破産ののりきりと反マルクス主義的腐敗の進行

六九年秋の「決戦」で本質的に破産した反代々木行動左翼集団・八派連合の今日の状況は、およそ以下のように要約しうる。

まず第一に、この間のわが同盟を中心とする革命的左翼の断固たる組織的闘いの結果として、わが革命的左翼と小ブルジョア行動左翼諸集団との総体的な力関係が大きくつくりかえられていると同時に、八派連合それじたいの分解が大きく促進されているということである。

そして第二に、従来八派連合内で一定のイニシアティブを掌握していたブクロ＝中核派がみずからの破産と腐敗（その頂点が海老原虐殺問題だ）およびそれを契機としたわれわれの集中的な党派闘争の展開によって組織上・運動上の凋落を深め大きく後退し、かつ同時にそのことが、「セクト支配・八派政治」反対を標榜するノンセクトのムード的拡がりをもたらし、彼らからの集中攻撃を生みだす要因ともなっている。

第三に、昨春すでは形成されつつあった〝アジア革命派〟（ML・共労・四トロ）が7・7華青闘の「告発」と八派のそれへの屈服という腐敗した状況の中で、華青闘をシンボル的表現とし、ノンセクトラディカルズに依存しつつ登場し、ブクロ派をはじめとするブント戦旗派、統社同、社青同解放派などの「日帝打倒主義」の諸潮流（これらは「派」をなしていない）との対立を激化させていることである。こうした対立関係の中で日本型毛沢東主義者は、毛沢東主義の大衆路線的・道徳主義的側面を前面におしだしながら、自己の伸長をさまざまに策している（ML派の二度にわたる「整風」を通じた純毛派への「改造」など）。そして孤立を深めているブクロ派は、かかる流行に屈服しそれにのりうつることによって、華青闘の前に跪きながら、なんとか運動上での一定の地歩を維持し、生きのびる道をさがすことに懸命になっている。

第四に、〝アジア革命派〟やブクロ派のように無節操に自己の過去の路線を清算することをいさぎよしとせず、かといってそれらとの断固たる対決を行なう気力をもたず、消耗の淵にさまよいながらとにかく「日帝打倒主義」を堅持しようとして孤立しているブント戦旗派、統社同、社青同解放派の極小諸派――「流行におくれ」た彼らは、民族主義を強要する華青闘や〝アジア革命派〟に「原則」主義的に反発して屈服させられたり（解放派）、「党の革命」と称する没理論的で非組織的な「分派」闘争にむけてわが同盟の理論を剽窃してなんとか自己の「立脚点」をたて直そうと「理論」主義的にもぐったり（戦旗派）、あるいはまた「アジア三派粉砕」などと叫んで共労党とのささやかな〝内ゲバ〟を試み「日帝打倒主義」者の結集を夢想してパンクし、いまやアナクロ的な「綱領づくり」へサークル主義的に逃げこん

でしまっている（統社同）というぐあいで、まったくシンヌガー化してしまっている。

そして第五に、〝アジア革命派〟と「日帝打倒」主義諸派との政治路線的な対立と交錯しつつ、前衛党組織路線をめぐる対立――「レーニン的党組織」を主観的にはつくらんとするブクロ派、戦旗派、統社同などと、反前衛主義的方向に傾斜するサンディカリストやアナキスト（共労党、解放派、叛旗派、情況派および種々のノンセクトラディカルズなど）との対立――の存在。

今日の反代々木的行動左翼諸集団は、かくして、毛沢東主義的民族主義と反マルクス主義、ニヒリズムを相互に競いあいつつ、総体としてヘドロ公害なみの腐臭を放つ底なしの泥沼に入りこみつつある。そして、かかる腐敗こそ、六九年秋に全面的に開花し破産したパラノイア的決戦主義の反動的のりきりの腐敗した姿であり、その諸形態をなしているのだといえよう。

とりわけ、ヘドロの海にうかび上った魚のように白い腹（黒い腹？）を見せているのが、ブクロ＝中核派と共労党にほかならない。

昨春ごろから自己の組織的な崩壊状況とわが同盟の党派闘争との間で六〇年の第一次ブントと革共同との関係を本能的に直感し類推せざるをえなかったわがブクロ＝中核派官僚は、周知の通り六月闘争を組織温存主義的にのり切り（しかもまたそれをめぐって、内部に「非和解的」対立を激化させたのであったが）、その直後からわが同盟の一挙一動に戦々兢々としていたのであった。ブクロ官僚による反革マル排外主義の没理論的政治主義的な注入と、下部活動家の追いつめられせっぱつまった心情と危機意識の昂進、半狂乱的精神状態にまで陥こんだ彼らは、ついに同志海老原の虐殺を行ない、かつ、それへの権力の前以外での死の沈黙によるのりきりによって、彼らの組織は思想的・組織的腐敗のみならず、道徳的・人間的頽廃をもさらけだし、その最後的な破産をみずから刻印した。この事態を新らたな転機としたわが同盟の断固たる追撃の闘いによって、ブクロ官僚は自己が犯した「殺人」への対処をめぐって三分解し、さらに入管闘争へののりうつりと「決戦」の政治技術主義的なデッチあげ（「入管気狂いになれ」という官僚の恫喝）による運動主義的のりきりも、華青闘への屈服によって完全にパンクしたのであった。わが同盟による党派闘争における敗北と解体的危機、そして他方、八派連合内での反セクト（ブクロ）主義を標榜するノンセクトとこれとゆ着しつつ相対的に浮び上ってきた〝アジア革命派〟との関係における孤立化――かくして進退極まったブクロ派は、10・8前夜華青闘の再度の「告発」に無様にも屈服し、しかも7・7の「政治的自己批判」を暴露された彼らは、「再度の」「根底的な」坊主ザンゲを行なったのである（「前進」506、511号など）。そうすることによってブクロ派は、彼らの組織のよってもってたつ立脚点をも急速に変質させていったのである。いいかえればそれらの文章に示されているものは、破産した革命主義者の末路そのものである。

この論文は、第一に直接には10・8集会での華青闘の批判（①決戦主義、②党派の政治的利用主義、③運動の利用主義、④地域化なしのカンパニア――それぞれナンセンスであるというもの）に全面的に屈服することを明らかにし、決戦主義方針を否定して地域住民闘争に埋没する方針をうちだしたということである。いいかえれば、ブクロ派の入管闘争方針の一切の破産を自己確認したことをそれは意味している。そうすることによって同時に、入管闘争の内容それじたいにおける変質を不可避的におしすすめたのである。「日帝のアジア侵略を内乱へ転化」する闘いの重要な一環として、したがって「決戦」として位置づけられていたそれを、「入管体制粉砕の闘いを単純に抽象的日帝打倒に等置してはならない」と称しつつ「日本階級闘争の排外主義的基盤そのものをきりくずす闘い」なるものに手直しし、さらに「被抑圧民族の生活と闘いに学ぶ」闘いとして、みずからの内にある「抑圧民族の人民としてのけがれ＝排外主義との闘い」なるものにまでちりちぢめ、そうすることによって「被抑圧民族への迎合」主義を一層純化してきたのである。いまや彼らにおいては、地域住民闘争への埋没と逃亡を、「日本階級闘争の質的転換」などと称して、美化し正当化しはじめてさえいる始末なのである。

第二に、そうすることによってブクロ派の路線そのものにおける毛沢東主義への屈服をいっそう徹底的・全面的におしすすめたということである。かつてML派に対して「日帝打倒こそ被抑圧民族への連帯だ」などと対置していた自己を、今日では「日帝打倒主義があった」などと「自己批判」するにいたっている。いまでは「アジア人民の闘いに支えられることなしには日帝打倒は不可能である」という、いわゆる〝玉つき革命論〟から進んで「アジア革命なしに日本革命なし」「在日アジア人民の解放なしに日本プロレタリアート人民の解放なし」とまでいいきり、さらに「アジア民族解放闘争が世界革命の先行的・主導的位置を占める」とさえ主張し、毛沢東主義者と〝アジア革命派〟の主張を全面的に受け入れるにいたっているのである。

第一、第二の必然的結果として、第三に、今日のブクロ派は反スターリン主義の鼻輪を最終的になげすてる（形式的にも反スタを放棄する）ほんの一歩手前にまでつきすすんでしまっているということである。すなわち彼らはスターリニスト的民族解放闘争のいっさいを美化すると同時に、毛沢東型スターリン主義への批判をひっこめ、ただもっぱらスターリン主義を排外主義の別名として、したがって反スターリン主義を「排外主義との闘い」に等置し、そこに解消してしまっているのである。しかもこの排外主義なるものは、帝国主義者のナショナリズムイデオロギーの一形態としての民族排外主義の問題と、スターリニストの（一国社会主義―二段階戦略にもとずく）民族主義の結

反入管全国通信

われわれは更にいかなる情報の水路を拓こうというのか？　われわれは啓蒙を欲しない。「指導」を、方針の提示を、欲しない。

われわれはこの通信を「読まれる」ことを欲しない。戦士たちの行為の中に「解体される」ことを欲する。切刻まれ、或いは剽窃され、いずれにせよこの限定された紙面に活字として収り返っている事からの脱出を。そして何よりもわれわれは「逆流」を欲する、この朱曾有の困難な階級戦争の中で、直接的個別的闘争の枠をこえ「綱領」的差違を超えた集合的力量による経験総括を絶えずおしすすめることを。

隔週刊
50円（〒共）

発行
反入管情報センター（準）
東京都新宿区新小川町1－12
山吹荘　電話03(260)2065

果として現象するそれとを一緒にし、むしろ前者にひきよせて（すなわち「抑圧民族の立場」＝排外主義という形で）二重うつしにしたものである（したがって「スターリニズム」は帝国主義の排外主義と闘わないもの、というようなものでしかない）。そうであるがゆえに彼らは「日本プロレタリアートの排外主義的堕落をスターリン主義の責任とし、自らはそれから自由であるという傾向があった」「排外主義との闘いの不徹底、汚れがあった」これらは「本質的な問題」であるなどと「自己批判」しつつ、「（排外主義に）直接間接におかされてきた自分自身に対する自己批判」が「反帝・反スターリン主義」であるとまでいいだすにいたっているほどである。道徳主義的言辞によっておしかくされている「反スタ＝排外主義との闘い」なるものは、ようするに毛沢東主義への屈服・被抑圧民族への迎合を最後的になしとげた今日の腐敗した路線を反スタ戦略へ投影したものにほかならない。いまやブクロ派は日本反スターリン主義運動からの脱落者としての系譜の地位に甘んじることをいさぎよしとせず、それを「自己批判」してスターリン主義の系譜にみずからを位置づけようとしているとさえいえるのである！

ところで、毛沢東主義に屈服し地域住民闘争への埋没を決定したということは、直接的にはこんにちのブクロ＝中核派の組織的危機と瓦解をおしとどめるための運動上の技術的のりきり策であるが、同時にそれは破産した革命主義的闘いの手直しとして意義をもっていること、これが第四の問題である。

ブクロ派は六七年の10・8闘争以後、基本的に「革命の現実性」の名のもとに「大衆闘争を直接同時に革命闘争として闘う」という革命主義にもとづいてたたかってきた。とりわけ、〝安田攻防戦〟にあおられてパラノイア症状を急速に昂進させた六九年秋のブクロ派は、「日帝は機動隊によってかろうじて支えられているにすぎない」という超主観主義的で軍事力学主義的情勢認識を行ないつつ、「機動隊殲滅」を実現することによって日本革命を直接に日程にのぼせることを願望して、完全に軍事方針主義的路線をうちだした。かつそれを物質化するためにブクロ官僚どもは「肉を弾にしてたたかえ」とか「命をかけよ」とか恫喝し、そうすることによって学生のみならず労働者部分をも根こそぎ軍団化し街頭へ引っぱりだして「一〇～一一月決戦」を「武装蜂起」主義的にたたかい、そしてかかるパラノイア的決戦主義は必然的に大破産しブクロ組織は壊滅的危機に陥ったのであった。

ブクロ官僚は、革命主義のこの破産を、その方針の反プロレタリア性を、根底的に総括することなく、ガタのきた組織の官僚主義的統制、カンパニア主義による組織温存と運動上の技術的のりきり策の駆使によって隠蔽せんとしてきたのであった（とりわけ労働戦線においては徹底した右翼路線と組織温存をはかり、全逓・ゼネ石精をはじめとして頭を下げて右翼社民やスターリニストの尖兵になりさがり、戦闘的労働者への公然たる敵対すらをも行なってきたことは周知のことである）。

だが今日のブクロ派は、わが同盟の徹底的な追撃と、毛沢東主義への屈服によって、かかる革命主義の破産の確認と、その手直しを現実的に余儀なくされてしまったのである。決戦主義を否定し地域住民への埋没をきめこんだということは、それを決定的なものとしたのである。にもかかわらず、現実的な問題として登場した破産した革命主義との対決（その実践としての「一一月決戦」そのもの、その根本的総括は――それこそブクロ派のブクロ派としての存在基盤の喪失を意味

するものであるがゆえに――今日依然として回避し、伝統的ななしくずし的手直しによるのり切りを策しつつ、むしろ次のようにいうことによって自己の過去を没主体的に清算してしまっているのである。「日本革命的左翼の傾向的病気としての左翼小児（病）的意識」の清算として。だがそれは、革命組織としての失格をみずから宣言したものにほかならない。

かくして今日のブクロ派は、「被抑圧民族への迎合」をとことんまで純化させつつ、神秘化された「在日アジア人の生活と闘い」から「学ぶ」ことをシンボルとして、わずかに残った下部同盟員を地域住民闘争へと右翼的に動員するために狂奔しているにすぎない。組織とその指導部（路線）の破産を個々の同盟員の「点検」――道徳主義的・人間主義のオブラートにつつまれた恫喝による――に解消しつつ、ブクロ官僚は右の路線を徹底した官僚主義的統制を物質的根拠として物質化し、組織の官僚主義的タガハメを行なわんとしているのである（だがしかし、革命主義を手直しし地域住民闘争への埋没を確定したブクロ派は、そうすることによって逆に従来からの指導部内の実体的対立を一層激化させ、組織の分裂の現実性を開花させているのである）。

他方、ブクロ派のかかる変質と腐敗をさらに上回る形において、かつそれに先だっておしすすめていったのが共労党モモンガー一派にほかならない。

六九年春、わが反スターリニズム運動の前進や反代々木のラディカリズムに煽られ、かつ決定的には「フランス五月革命」への憧憬を拠点として、それまでの構改路線を破棄・清算し、右翼スターリン主義から左翼スターリン主義へ行動左翼的にのりうつった共労党は、六九年秋の闘いをサンディカリスト的にたたかった。彼らは、一方の武装蜂起主義者に山猫ストの願望を対置して小ブル的な革命主義的パラノイアを競いあい、そして破産した。彼らは、「政治危機―経済危機―社会危機の複合的＝連続的発展」などと称する、かの現象論的・力学主義的な「連動的危機」論を前提として「先進国型革命論」としての「政治・社会同時革命」を主張しかつ夢想した。〝大衆を煽りたて山猫ストを実現（すれば）→それをテコに社会叛乱（が勃発し）→日帝の屋台骨がうちくだかれる（だろう）〟と思いこみながら。――だが事実は、ただ一つの〝山猫スト〟も、一人のゲリラ戦士をも生みだすことなく、彼らの願望はみじめに頓座したのであった。

共労党は、こんにち、そうしたみずからの過去と対決することなく、それは「仮説」でしかなかったときれいさっぱり清算し投げすて、7・7華青闘の「告発」に対する党派（八派）のぶざまな屈服を直接的契機として、反マルクス主義、ニヒリズムをイデオロギー的支柱にふたたびたちあらわれてきたノンセクトラディカルズにへばりつき、新たな「仮説」＝「第三世界革命」の神話へとのりうつり疎外をとげてしまっているのである。

彼らはみずからの過去を（ブクロ派に投影しつつ）まるで他人ごとのようにとりあつかいながら、いとも簡単に切りすてる。曰く「一国主義」「先進国革命主義」「近代主義」。そして「植民地後進国人民の闘いを本国プロレタリアートの政治的都合に従属させる犯罪的方針（と思想）」であった、と。自己の破産とそれがもたらされた根拠を誠実に総括するという公党としての責任を完全に放棄し、新らたな流行にのりうつることにのみ狂奔していること、ここに今日の共労党の第一の腐敗が如実に示されている。

帝国主義日本における闘いで破産し、プロレタリア革命へのニヒリズムにとりつかれ、「第三世界」へと逃亡した彼らは、「第三世界革命戦略」なるものを急拠デッチ上げ、それを自らの〝独自性〟としておしだしはじめたのである。だがそうすることによって彼らは、反マルクス主義、ニヒリズムへの転落をあらわにしたのである。これが今日の共労党の第二の、そして決定的な腐敗にほかならない。

共労党の「第三世界革命戦略」なるものに対する具体的な批判をここで行なうわけにはいかない（それについては「解放」一七九・一八〇号古川論文参照）。彼らは今日、みずからの過去を「危機論型革命論」なるものにもとめ、それを清算するためにさまざまな観念的操作を行なっているにすぎない。曰く、「危機論型革命論は物象的危機に『革命』の戦略的展望を直接無媒介的に基礎づける立場」であり、「神の視点を前提とする客観主義的科学主義的立場」であるとしてこれを清算する。だがそれは、ア・プリオリな「戦略的展望」（主観主義的、ヘーゲル主義的に構想された「革命戦略」――すなわち「第三世界革命戦略」）に対象世界（の分析）をもぐりこませ解消するという単純な裏返しでしかない。しかしそうすることによって彼らは、「客観主義的科学主義」の否定と称して、情勢分析そのものを放棄してしまったのである（日帝の「理念」から天下り、「一国主義を脱却」した日帝の「東アジア反革命制圧」なる彼らの分析ならざる情勢判断はその紋章である）。

彼ら（とくにわがニヒリストの出戻り坊や黒木など）は、さらにすすんで、あからさまなレーニン主義の否定を、したがってマルクス主義の否定を公然とおしだすにいたっている。

レーニンの『何をなすべきか』を「近代主義」として否定する（「第三世界」の運動をよりどころにした「実存的飢餓感」にもとずく『没イデオロギー的な』大衆叛乱」なるものからの断罪）ことを突破口として、彼らはさらに「『環境的世界の内にある主観』による意味の了解」を基準として「情勢分析的思考」＝「（科）学」＝「近代主義」（＝合理主義）＝マルクス主義を、「大衆叛乱」にとって「外的なもの」（あるいは「非和解的敵対」）として否定・排斥していくのである。

かくして今日の共労党には、「第三世界」の「大衆叛乱」をあらかじめ無批判的に前提とし、その「意味を了解」することのみが残されているだけである。

これこそ先進国日本における革命の挫折によって闘いをあきらめたものが、ラディカルな運動として映しだされる「第三世界」に、あたかも神に対するがごとく、卑屈に拝跪する姿であり、小ブル・ニヒリストの末路である。それは六九年秋、山猫ストを願望し、サンディカリスト的にたたかわんとして破産した革命主義者の末路であり、かつそれと今日の腐敗とは裏腹の関係にあるのである。

（なお、反代々木諸派がそれに屈服し、あるいはご都合主義的に依拠している毛沢東主義そのものに関しては、黒田寛一『現代中国の神話』『毛沢東神話の破壊』を参照せよ）

さて以上みた反代々木行動左翼主義諸集団の今日的腐敗と壊滅的状況は、ようするに小ブルジョア革命主義、パラノイア的決戦主義の破産の必然的帰結であり、八派連合の今日的な分解と対立は、その破産ののりきりの諸形態を意味するものでしかない。まさにこの事態は、われわれの七〇年闘争の革命的＝左翼的闘いの断固たる推進と、そのただ中における党派闘争の原則的にしてかつ無慈悲な貫徹の結果としてつくりだされているものにほかならない。

第二章　革命的プロレタリア党の創成と反スターリン主義運動

①　七〇年におけるわれわれの闘い

右にあきらかにしてきたように、過去三年間にわたる安保＝沖縄闘争や反合理化、賃金闘争などを左翼的あるいは革命的に推進することをつうじて、われわれは、労働戦線においても学生戦線においても、その大衆的基盤を著しく拡大してきた、といえよう。

とりわけ、社会党の没落、総評のより一層の右傾化に抗し、いまなお労働者階級の大多数が基本的に組織されている労働組合内外で左翼的闘いを推進することを通して、労働戦線における確固とした基盤を、われわれは確立してきたのであった。

われわれのこの闘いは、帝国主義的社民による労働戦線再編策動の急速な進展という事態に端的に示される労働運動の危機、すなわち賃闘を中心とした経済闘争を経済主義的にたたかい、これに平和と民主主義の闘いをつけくわえるという民同型労働運動の破産という事態を根底的にのりこえるものとして、進められてきた。

すなわちわれわれは、社共両党に基本的に指導された経済闘争や政治闘争の議会主義的、カンパニア主義的歪曲そのものと対決し、反戦闘争や、安保＝沖縄闘争を職場の中から左翼的に実現してきた。これらの闘いの過程で、組合の内外に公然、非公然、半公然のフラクションやそのときどきの闘争課題をめぐる討論の場などを創造し、左翼的労働者の組織化と変革の闘いをおし進め、それを基礎としつつ労働組合運動の強化をも実現するという闘いを、総評官公労系労組のみならず、民間労組においても、われわれは推進してきたのであった。

それば かりではない。反戦青年委員会の形式面を最大限に活用しつつ、基幹産業の戦闘的労働者たちを種々の形態の反戦闘争や反安保＝沖縄闘争に組織的に動員し、戦闘的デモンストレーションをくりひげ、かつその成果を各職場にもちかえり定着化するための、またこれを基礎とした地区的ないし産別的な闘いをさらに拡大し強化するための、種々の理論的＝組織的活動をも、われわれはくりひろげてきた。こうすることによって、わが同盟とそのまわりに結集した数多くの革命的労働者たちを中心として、反戦青年委員会が地区的および産別的に創出された。

もちろん、この闘いと組織化は、反代々木行動左翼集団の街頭行動主義的、武闘主義的あるいはサンディカリズム的な諸偏向とこれにもとづいた種々の運動形態および闘争形態の観念性をあばきだし、のりこえていく闘いを着実に、上からでなく下からおしすすめることをつうじて、なしとげられたのであった。反代々木諸派のばあいには、労働組合運動とは別個に、それからはみだすという形でしか、いいかえれば学生活動家OBというべきものを直接に街頭化させるという形でしか、反戦青年委員会とその運動をつくりだすことができなかったのである。が、これにたいしてわれわれは、われわれの闘いをつうじて創造した種々の労働者組織形態を実体的基礎として、組合青年部を全体として動かしたり組合諸機関の承認をとりつけたりするという形態において、反戦青年委員会の運動を独自的に創りだしてきた。こうして労働戦線におけるわが同盟組織は、各地において、産別的にも地区的にも、著しく大衆的基盤を拡大し各種のフラクションを強化することに成功した。

このような労働組合内外における闘いと反戦青年委員会の強化確立の闘いとを基礎として、同時に革命的学生運動を一貫しておし進めてきた全学連の闘いをそれと結合させることによって、われわれは既成左翼や反代々木行動左翼の総破産とは対照的に七〇年六月の動労半日ストとその支援闘争とをゆいいつ革命的にかちとってきたのである。

わが同盟の指導に本質的に媒介された、このような青年労働者、学生の左翼的闘いこそ、七〇年闘争の過程で着々と培われてきた革命的左翼の力量の表出であり、この質こそが七〇年代闘争においてさらに発展的に継承されてゆかねばならない唯一のものである。そのような七〇年代闘争の方向性をさし示し、その革命的出発点を確実にきりひらいたという意味において、七〇年六月におけるわれわれの闘いの決定的意義がある、といわねばならない。

安保＝沖縄闘争の最終局面であると同時に七〇年代階級闘争の発端をなす時点における、われわれのこの闘いの決定的意義は、さらに七〇年秋の日本階級闘争のなかで、再び鮮明となった。

なぜなら、総評の10・21国際反戦統一行動が公害問題とからめたカンパニア主義的運動にとどまったことにも示されるように、昨秋における労働者階級の闘いは、全体として物価、公害などの国民運動の一環に解消され、日本帝国主義者によってたくらまれている沖縄の国政参加選挙に対しても、議会主義的カンパニアがわずかにとりくまれたにすぎなかった。しかも一昨年の「一一月決戦」で本質的に破産した反代々木行動左翼集団は、「アジア革命派」と「日帝打倒派」へと分裂し、対立をくり返しながらも、入管闘争へとのりうつり、沖縄＝安保闘争から実質上逃亡した。そして自己破産を隠蔽するために「従来の闘いは先進国革命主義であった」（いいだもも）とか「日帝打倒主義的偏向があった」（ブクロ＝中核派）とかいった笑止千万な坊主ザンゲをおこない、「被抑圧民族の立場に立て」などという反マルクス・主義的言辞のもとに毛沢東主義に屈服せざるをえなかったのである。

とりわけ、わが同盟の党派闘争のまえにふるえ上り、殺人者集団と化したブクロ＝中核派は、海老原虐殺問題で組織的腐敗と思想的頽廃、さらには底知れぬ道徳的堕落を一挙に爆発させ、諸党派間を「お手やわらかに」と頭を下げてまわるとともに、大衆に向かっては「黙秘権の行使」を公言するという前代未聞の腐敗ぶりをいかんなく発揮し、われわれの追撃からただ逃げまわっていたにすぎない。

日本階級闘争のこのような危機と腐敗をうち破り、沖縄＝安保闘争、入管闘争を断固として推進し、それらを通して労働者学生の階級的組織化を着実に実現してきたのは、ひとりわが同盟とそれに指導された先進的労働者学生のみであった。

佐藤・ニクソン会談で日米軍事同盟の強化を策す佐藤訪米や、日帝の支配秩序にあみこむ沖縄国政参加選挙粉砕などの沖縄＝安保闘争とともに、アジアにおける帝国主義とスターリン主義の対立、激化の中で在日外国人、なかんずく北朝鮮系朝鮮人弾圧を目標とした入管法再上程の策動に対する反対闘争を、一切の毛沢東主義・民族主義への屈服をのりこえ推進してきたのは、六月反安保政治ストを左翼的、革命的にたたかいぬいてきた先進的労働者学生であった。しかも、この過程で、同盟滝田や全逓宝樹などを中心とした労働戦線の右翼的再編策動に対しても、労働組合を基礎にそれに反撃する討論集会を公然と実現し、あるいは非公然の種々の闘いをくりひろげることを通して、左翼的反撃を展開するとともに、一昨年の「一一月決戦」で本質的に破産しさった反代々木諸派解体の闘いを圧倒的に実現してきているのである。

ある。

破産したパラノイア的決戦主義者の毛沢東主義への屈服、反マルクス主義への転落という悲喜劇的事態を大胆につき破り、既成左翼の腐敗を突破し、日本革命にむけ労働者階級の階級的組織化をかちとる任務は、かくしていまやわれわれのみに課せられた光栄ある任務なのだ。

② 七〇年代闘争の展望をきりひらきえた組織的根拠

ところで、このような闘いは、一朝一夕にして可能となったわけでは、もちろんない。それは、以下にのべるような日本反スターリン主義運動の血のにじむ苦闘を通してはじめて可能となったのである。

その第一の直接の根拠は、パラノイア的決戦主義にまで転落した反代々木行動左翼集団との原則的対決をとうして、安保＝沖縄闘争を革命的に推進し、その過程で同時にわれわれの運動の組織的基礎をうちかためてきたことにある。

すなわち、六七年10・8闘争の現象的高揚に陶酔したブクロ＝中核派を中心として、反代々木行動左翼集団は、今日の世界情勢が、あたかも一九三〇年代の革命前的情勢に突入したかのように錯覚し、七〇年闘争にむけての政治決戦、階級決戦を呼号した。主客諸条件を無視し、大衆闘争を直接革命闘争としてたたかうという路線が、ブクロ官僚を中心として、下部の反対を官僚主義的に圧殺し、強行されたのであった。そして、それが六九年の4・28闘争で頓座するや、六九年秋には、武装闘争形態のエスカレートをもってそののりきりをはかろうとする武装蜂起主義者と、それに反発し、政治社会同時革命論の名のもとで山猫ストを願望するグループへと彼らは二分解した。

しかし、それらはつまるところ、「安保政治決戦＝勝利→秋期階級決戦」を呼号し、その戦術をめぐり三分解していった六〇年ブントの行動左翼主義的発想と、かわるところはないのである。ただ闘争形態がエスカレートしたにすぎないのだ。いいかえるなら、今日の反代々木行動左翼集団が、既成左翼の腐敗した運動そのものをのりこえるのではなく、それから単純にはみだし、労働者階級の闘いの外部から運動の爆発を追い求めるという安保ブント以来の大衆運動主義から一歩もぬけ出せていないことをそれは意味しているのである。

二極分解したパラノイア的階級決戦主義者の、このような本質を暴きだし、社共の議会主義的カンパニア運動そのものをのりこえつつ、われわれは安保＝沖縄闘争を労学両戦線で推進してきた。

安保自動延長という形での、沖縄施政権問題のブルジョア的解決と日米軍事同盟の再編強化との本質をあきらかにし、またそれによって生み出される個別的諸事態と対決しつつ、日米共同声明粉砕の闘いを、破産した「祖国復帰・返還要求」運動をのりこえつつ展開してきた。そのなかで、うちかためられたわれわれの組織的力量を基礎として、一定の情勢においてはこの闘いを反政府闘争へ、さらには反権力闘争へとおしあげてゆくべきことを、われわれはあきらかにしてたたかってきたのである。七〇年安保実質改定期という特殊な時点においては、安保条約の破棄を、したがって自民党政府打倒をめざした闘いを、われわれは場所的にくりひろげてきたのである。

このような闘いを媒介として、またその過程で、労働組合の内外に種々の組織をつくり出し、労働組合運動を左翼的に強化するとともに反戦青年委員会の地区的確立を実現し、反戦青年委員会の再編強化の闘いをおし進めてきた。また学生戦線における闘いも、小ブルジョア急進主義者のそれとは決定的にことなり、右のような先進的労働者の

闘いと連帯することを通して、革命的学生運動を圧倒的に前進させてきたのである。(『日本の反スターリン主義運動』を参照せよ)

ところでこのことは同時に、反代々木行動左翼集団のすべてが、既成左翼にかわる党建設を願望しながらも、その党建設の叫びが完全に空語化せざるをえなかったのとは対照的に、真のプロレタリア党創成の闘いを基礎として、われわれの闘いが進められてきたことを意味しているのである。既成左翼、すなわち議会主義政党としての存立の危機におちいった社会党と、議会主義的堕落を純化し、従来社会党が果してきた役割をかわって果そうとする日共との反労働者的本質は、今日あまりにもあきらかである。音を立てて崩壊しつつある社会党にしろ、宮顕体制のうち固められた議会主義クレチン病患者日共にしろ、もはや彼らのもとには戦闘的労働者の一人をも包摂しえなくなっている、といっても過言ではない。

これに対して、今日の反代々木左翼の場合には、党建設の闘いを大衆運動の展開の中に埋没させていた第一次ブントとは若干異なり、権威失墜した日共にかわる前衛党の創造を、あたかも問題としているかにみえる。

だがしかし、前衛党建設が叫ばれれば叫ばれるほど、その主張とは対照的な組織的現状を自覚せざるをえなかったのが、今日の彼ら反代々木行動左翼集団であった。たとえ、目標がかかげられたとしても、労働戦線での組織建設の闘い、その緻密な組織活動の欠如のゆえに、労働者本隊のなかに組織的基礎をつくり出すことは、まったく不可能なのであった。「反戦派労働運動」の名のもとに、労働組合内外における組織活動を「組合主義」として足蹴にし、はみだし運動に陥っていた彼らの「一一月決戦」の破産と、それ以降の文字通り組合主義への転落、地域活動への再転換などのめまぐるしい変遷が、彼らの党建設なるものの破産を端的にもの語っているのだ。

また、学生戦線においては、全共闘運動の名のもとに勃興したノンセクト・ラディカル運動、その左翼急進主義と反前衛主義的運動に癒着し、それによって破産したパラノイア的階級決戦主義の延命を求めようとし、逆に反前衛主義的風潮を拡大せざるをえなかった。いまさらのように「レーニン組織論への敵対との闘い」などとわめきちらしているブクロ派の今日の姿は、そうした彼らの破産をもの語ってあまりある。

そもそも、ノンセクト・ラディカルの抬頭と衰退に示されるような心情的アナキズムは、大衆社会化状況によってもたらされた砂のような大衆の前意識、下意識の直接的表出にほかならない。

七〇年安保実質改定期における日本階級闘争の激動、さらに欧米の左翼急進主義運動を規定する雑多な思想の日本への移植に触発され、それ自体としてはプロレタリア革命への抽象的出発点でしかない「自己否定」なるものを安直にかかげ、行動左翼的であると同時に組織ニヒリズム的傾向の濃厚なものとしてノンセクト・ラディカルはたちあらわれた。そして彼らの行動上の破壊主義、組織上の自由分散主義の背後には、わが反スターリン主義運動への極めてケチくさい反発が横たわっていたのである。

すなわち、彼らは、わが同盟を日共スターリン主義者と同一視し、「前衛主義」などと嘲笑することによって、主体性論を基礎としたわれわれの組織論の独自性に対する無知をさらけ出しているばかりでなく、また反帝・反スタ戦略に対しても、小ブルジョア的反権威・反権力主義的立場から反発するという低水準さを示し、かつそれを誇りとさえしていたのだ。

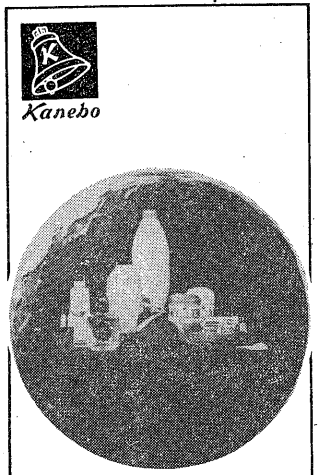
このゆえに、われわれは、右のような没イデオロギーを誇りとするまでに腐敗しているノンセクト・ラディカルズの反前衛ラディカリスト集団としての本質を暴露し、その解体を実現するという原則的にして正当な闘いをゆいいつ断固としておし進めてきたのである。

だがしかし、このような原則的対決を完全に放棄し、一時的な全共闘運動の盛り上りに狂喜し、それをソヴィエト運動だとかコンミューン運動だとか意味付与してきたのが反代々木行動左翼集団にほかならない。それは労働組合(自治会)内外での組織活動を放棄して、運動の高揚を妄想するはみ出し運動の破産として結果せざるをえなかったばかりでなく、「党建設主義」の名のもとに前衛党建設の闘いを放棄して、階級形成を観念的に願望していたにすぎない、彼らの組織論の破産を集約的に示したものであった。

これにたいして、われわれはレーニン的前衛党建設の闘いの基本的意義を継承しつつも、同時にその理論の中にはらまれている「党=職業革命家集団」論的限界を突破し、プロレタリア階級内部に実体的基礎をもったプロレタリア党を創造してゆくこと、この基本的目標のもとに、組織本質論のみならず、組織現実論をも解明し、それを基礎として反代々木行動左翼集団の破産とは対照的に、労働戦線内部での組織的前進をかちとってきているのである。このような、前衛党建設を基礎とした組織的闘いこそが、七〇年闘争を革命的に推進しえた、第二の根拠といわねばならない。

ところで、既成左翼の没落と反代々木左翼の装いを新たにした登場にもかかわらず、七〇年闘争が六〇年のそれを本質的にのりこえられなかったなかで、われわれのみが唯一それを突破し、新たな闘いを創造しえた第三の最深の根拠は、ほかでもなく、現代世界に生きるプロレタリアートにとって本質的な問題であるスターリン主義との対決を根底的になしとげてきている、という世界に冠たるわが反スターリン主義運動の独自性にある。

一九五六年のかの二つの国際的事件への対応の仕方をめぐるくい違いが、中ソの理論的対立へとひきつがれつつあったとはいえ、六〇年闘争時の国際共産主義運動は、クレムリンの権威のもとに基本的に統



一されていた。そして、国内では、既成諸組織と公認指導部のワクをこえでた全学連の大衆行動によって、一枚岩の団結を誇っていた日共の神話がひきはがされ、「のりこえられた前衛」とか「前衛党物神崇拝の神話」とかがようやく常識となり始めたにすぎなかった。これらの事態は、本質的にはハンガリア革命の衝撃を出発点として日本で開始された反スターリン主義運動を基礎としつつも、直接的には、この革命的共産主義運動に触発されて生み出された左翼スターリン主義者集団第一次ブントによりもたらされた。しかしそれが本質的に左翼スターリン主義の枠内でしかなかったがゆえに、スターリン主義からの根本的脱却の闘いは挫折し、この闘いは第一次ブントにかわって革命的左翼の指導権を確立したわが革共同の手により進められてきたのである。

それから一〇年、スターリニスト陣営は、中国文化大革命、チェコスロバキア問題などで錯乱をきわめ、中ソの国家的分裂からさらにそれらに対応することすらできぬ右往左往の自主独立グループを生み出すに至っている。国際共産主義運動のこのような分解と没落は、あたかもスターリン主義の急速な自己崩壊を示しているかにみえる。

だが、問題はこのように崩壊しつつあるスターリン主義に対し、一切の反代々木左翼が明確な対決をなしえないという根本的問題にある。スターリン主義をフルシチョフ修正主義と同一視し、毛林派に純化したML派はもちろんのこと、キューバを世界革命の根拠地、中国を半根拠地国家と規定する第二次ブント。さらには、今日のソ連邦を「社会主義国」とか「過渡期国家」とか、「疎外された労働者国家」とか並存的に規定して恥しげもなくふるまう共労党。しかも、日本型スターリン主義者に反発して発生したこれら左右のスターリン主義者とは異なり、反スターリン主義を標榜するブクロ中核派においてすら、今日では一知半解のレーニン的原則を現代世界にあてはめたり、毛沢東主義者に屈服したりし、スターリン主義との対決は、いまやほとんど失われてしまっているのだ。これは、反スターリン主義革命的共産主義運動の苦闘から脱落し、左翼スターリン主義者集団と野合しつつ、わが革命的マルクス主義者の闘いへの敵対をくり返してきたブクロ派の必然的帰結である。

このように、反代々木左翼がスターリン主義への明確な理論的態度をとりえない以上、ソ連邦のスターリン主義的変質と国際共産主義運動の変質とを決定的転回点としたスターリニスト陣営の形成、これに対応した帝国主義の国家独占資本主義への新たな推転により存続している現代世界、すなわち、帝国主義とスターリン主義とに分割支配された現代世界の根底的打倒の一環として、日本階級闘争を推進しえないのも、けだし当然といわねばならない。

あらためていうまでもなく、ロシア一〇月革命の実現にもかかわらず、革命ロシアの孤立、ロシアの政治、経済的後進性、世界革命の遅延、という外的条件のもとでスターリンその人が一国社会主義建設可能論をうちだし、その結果世界革命をも一国主義的に分断した。この一国社会主義の建設と革命の理論によってもたらされたロシア共産党と国家、国際共産主義運動の変質の総体を、われわれはスターリン主義とよぶのである。

したがって、スターリン主義は、レーニンが『帝国主義論』で規定している社会民主主義・社会排外主義とは異なり、その打倒は反帝闘争の推進の問題に解消するわけにはいかないのである。

つまり、スターリン主義陣営は、全体として各国帝国主義の戦争と

侵略に反対し、労働者階級の味方であるかのようにみせかけつつ現存しているばかりでなく、さらに帝国主義各国の内部においては、スターリン主義者とその党は、一国社会主義と二段階革命戦略とによって、革命運動を敗北にみちびいている、特殊な存在である。スターリン主義国家と党、国際共産主義運動とにより、プロレタリア革命の敗北がもたらされているがゆえに、われわれはこれにたいして反帝・反スターリン主義の戦略をかかげてたたかってきている。すなわち、帝国主義の内部においては、スターリン主義とのイデオロギー的、組織的闘いなしには、帝国主義国家権力の打倒は現実になしえず、また世界帝国主義の打倒は、スターリン主義国家権力の打倒とともに永続的に完遂されない限り、プロレタリアートの普遍的解放は実現しえないのである。（朝倉文夫・土門肇『日共イデオロギー批判』をみよ）

反帝・反スターリン主義の旗のもとに一貫してたたかいぬいてきたわれわれのこの闘いこそが、七〇年闘争のただ中において、その一端をさし示した、といえよう。このようなわれわれの闘いの意義とそれを可能ならしめた根拠とを、さらに鮮明にするとともに、それを日本プロレタリアートのただ中に物質化してゆくのでなければならない。

第三章　七〇年代階級闘争の核心問題は何か

周知のとおり、七〇年闘争においてわが同盟を中軸とした戦闘的労働者と全学連は、六月動労ストの実現をはじめとした真に労働者的な闘いの一端を、公然と日本階級闘争場裡に登場させた。いまや、七〇年闘争の総体としての敗北のあとをうけて、より困難な情勢がわれわれの前に厳然と存在しているにもかかわらず、われわれは、この七〇年闘争において端初的に切りひらいた七〇年代階級闘争の新たな質をひきつぎ、さらにそれを発展させるためにたたかいぬくのでなくてはならない。そのための核心問題を、以下三点にしぼってふれる。

《労働戦線の右翼的再編粉砕の闘い》

日本労働運動の主座の位置を占めていた総評のあいつぐ後退と右傾化、そして「総評四原則」に示される右翼的再編への屈服――その裏側で進行する社民・民同左派の没落、さらに同盟の日本労働運動に占める位置の相対的伸長、いまや日本労働運動は総体として帝国主義に編みこまれる労働運動そのものへと雪崩れを打って変質しつつある。

帝国主義者による高度経済成長政策と種々の合理化攻撃は、組合組織破壊攻勢とともに、ここ数年、一段とその激しさを増してきた。国家の経済の長期的展望に見合った労働運動（同盟）、高度工業国にふさわしい産業再編成の時代の労働運動（JC）等々、労働者階級内部において政府・資本家階級の経済政策労働政策の物質化を担ってゆく役割をはたす労働運動（帝国主義的労働運動）が、ますます勢いをまし、いまや、このような労働運動を推進するためのナショナル・センターをつくり出す流れは、総評、社・共をも基本的には組みこんでしまったといっても過言ではない。

日米共同声明の発表を一つの結節点とする帝国主義日本の支配体制の強化と新植民地主義的侵略の開始――その被支配階級におけるあらわれが、いまドラスティックにすすめられている労働戦線の右翼的再編の動きである。七〇年代階級闘争の第一の核心問題は、この労働戦線の右翼的再編粉砕の闘いを強力にくりひろげることである。

ところで、このたたかいはまさに日本階級闘争の死命を制する決定

的に重要な闘いであるにもかかわらず、いやそうであるからこそ、ゆいいつ右翼的再編と真向うから対決してたたかっているのは、わが同盟を中軸とした戦闘的・革命的労働者をおいて存在しない。すでに右翼的再編の波にのみこまれ、「総評四原則の積極的支持」をうたう協会両派や日共はいうまでもなく、さらに反代々木行動主義諸集団もまた各単産単組に基本的に足がなく、右翼的再編に抗する拠点も理論ももちあわせてはいない。

たとえばかれらは、七〇年闘争で総破産した「反戦派労働運動」なるものへの総括はどこへやら、現在を「一九三〇年代」と単純にアナロジーし、何を錯覚したのか歴史的にもその破産が証明された「赤色労働組合主義の精髄の復権」を夢想したり（共労党）、左翼組合主義的フシ穴から「民同の左右分解」を客観主義的、力学主義的に願望し、「階級的立場を堅持した幹部を支える」という名目で民同のフトコロに眠り、全逓、ゼネ石精とあいつぐ反階級的裏切り行為に汲々としている（ブクロ派）にすぎない。そもそもかれらには、右翼的再編に対して日共ほどの危機感すらなく、何一つ拠点をもち合せていないことを物質的基礎に、労働戦線の現状変革にかかわる実践的立場の一カケラも存在しないのである。だがしかしわれわれは、この間の賃闘、反合や七〇年闘争の戦闘的実現によって確実に築き上げてきたところの理論的組織的力とかちとった成果を基礎として、さらに一層、右翼的再編粉砕の闘いを強力にくりひろげてゆかねばならない。

すなわちわれわれは、賃上げ、合理化反対闘争や沖縄・入管闘争を労働組合において断固として左翼的にたたかうとともに、労働戦線の右翼的再編に反対する運動そのものをくりひろげ、そうすることによって労働戦線の総体としての左翼的強化、闘う組合づくりを実現し、これを媒介としてわが同盟組織の組織的強化をかちとり、これをテコとした労働者階級の階級的組織化のためにたたかいぬくのである。

昨六月うちぬかれた動労安保政治ストは、そして六八～六九年の国鉄反合闘争は、六〇年六・四ストを、あるいは三池闘争をのりこえるものとしてたたかわれただけではない。労働運動総体が雪崩れうって帝国主義に編みこまれつつあるなかで、まさにこれにくさびを打ち込み、これへの真向うからの真に労働者的な反撃の闘いとしてかちとられたのである。いまや、この動労の「名誉ある孤立」を賭した闘いは、労働戦線のあらゆるすみずみまで、とりわけすべての青年労働者たちに浸透し、深い共感と連帯をつぎつぎによびおこしている。とりわけ、全逓の戦闘的労働者たちは、全逓大会において、あるいは年末始闘争において、いまや宝樹支配体制を根底からゆるがしはじめているのだ。われわれは、労働戦線の内部から公然と反逆ののろしをかかげはじめたすべての戦闘的労働者たちの闘いを断固として牽引し、労働戦線の右翼的再編粉砕へとこれを集約し、まさにゆいいつたたかう部隊として、このたたかいをさらに一層おしすすめるであろう。

すでにこのような闘いに対し、国家権力、ブルジョアジーの側からも、また右翼的幹部の側からも、きびしい弾圧や攻撃が加えられてきている。六月政治ストを打抜いた動力車のたたかう仲間たちに対する不当逮捕の攻撃、全逓福中の処分攻撃、さらにあいつぐ組合分裂等々。われわれの組織的闘いを基礎に、これら一切の攻撃をはねかえし、ある場合には組合の左翼的分裂をも辞さず、右翼的再編粉砕のためにたたかうのでなくてはならないのである。

《沖縄、入管闘争のさらなる推進を》

六九年一一月の日米共同声明の発表は、七〇年代階級闘争の一つの結節点である。いうまでもなくこの声明は、米極東軍事戦略に従属したかたちでの、したがって日米軍事同盟を強化するかたちでの、沖縄の施政権の日本国家権力への返還に関する合意が、日米両帝国主義者どもの間で部分的対立をも孕みながらなされたことを意味する。

七〇年闘争の敗北のしるしでもあるこの日米共同声明の発表を一つのくぎりとして、日本帝国主義者はいまや、一方ではこの声明の内容の物質化を強行するとともに、他方では強化された日米軍事同盟を基礎とし背景として積極的な新植民地主義的侵略の策動と国内支配体制強化の諸攻撃を加えてきているわけである。それゆえ沖縄、入管闘争をはじめとするたたかいを、安保＝沖縄安争の敗北のただなかから断固として組織化し、くりひろげ、新たな前進を切りひらいてゆかねばならない。これが七〇年代階級闘争の第二の核心問題である。

現段階の沖縄闘争は、なによりもまず、日米共同声明において合意され、そして本年四月返還協定調印によってその国際法的確認がなされようとしている、米帝の極東軍事戦略に従属したかたちでの沖縄の施政権返還と対決する闘いとして、それゆえ四月返還協定調印阻止の闘いとして組織化され、たたかわれなければならない。だがしかし、既成左翼の「祖国復帰（返還要求）」運動の破産と分解化とその今日的腐敗の深化のなかで、またシンヌガーのフリムンたる小ブル諸派の雲散霧消のなかで、すでに一一月国政参加選挙にみられたように、この闘いはきわめて困難な条件のもとにおかれている。とはいえわれは、「祖国復帰（返還要求）」運動の破産と「真の返還要求」への手なおしをのりこえ、小ブル諸派の破産をしりめに、断固として沖縄―本土において四月返還協定調印阻止闘争を牽引し、たたかいぬかなくてはならないし、またたたかいぬくであろう。この闘いは、依然として現在の最重要な政治的課題なのである。

いうまでもなく当然にも、この沖縄闘争は、共同声明を結節点とした日米軍事同盟の強化の攻撃に対する現時点からする反撃の闘いとも直接結合してたたかわれるのでなくてはならない。これは、あの六九年秋の闘いの敗北を場所的にのりこえるものとして現在においてもたたかわれなくてはならない。それだけではない。「祖国復帰（返還要求）」運動の破産をのりこえ、沖縄施政権のブルジョア的返還に反対するたたかいを通じて、われわれは断固として場所的に沖縄人民解放をめざしてたたかいぬいてゆくのでなくてはならないのである。

ところで、入管法再上程をはじめとする現在の入管攻撃は、核心的には、共同声明によって強化された日米軍事同盟を背景とし基礎とし、米核戦略に協力・加担しつつなされている日本帝国主義の新植民地主義的侵略の策動の、その一環としての在日アジア人への抑圧攻撃である。と同時にそれは、帝国主義日本の国内支配体制強化の攻撃としての役割をもっているのである。それゆえ現在の入管闘争は、七〇年代階級闘争にとっての一つの試金石としての意義をもっているといっても過言ではないであろう。だがしかし、七〇年闘争の破産ののりきりとして入管闘争に逃げこんだかに見えた反代々木行動左翼主義諸集団は、まさにこの地点において大きくつまづき、ヘドロの海におちこんでしまったのである。すなわち、「日帝のアジア侵略」とか「日帝のアジア帝国化」などという没理論的な情勢判断を基礎に、なだれを打って「被抑圧民族への迎合」主義に転落しさったのであった。

だが、「被抑圧民族」の民族主義的たたかいに対する迎合などによっては帝国主義本国の国家権力を決して打ち倒すことができないだけで

なく、現段階の帝国主義ブルジョアジーの海外進出や侵略の企てすら粉砕することができないことはあまりにも明らかなことではないか。

まさに帝国主義日本の地において、帝国主義ブルジョアジーの侵略策動やそのための諸攻撃に対し断固として階級的なたたかいを挑み、またこのたたかいの過程において被抑圧人民と階級的連帯をかちとるという方向性をつらぬきつつ、この入管闘争を革命的にくりひろげてゆくことが、われわれの課題なのである。

《破産した行動左翼主義諸集団への追撃と反スターリン主義運動の飛躍的前進のための闘い》

さて、右にのべた七〇年代階級闘争の厳しい任務をになうとともに、われわれにとって、不毛ではあるが、避けてとおることのできないたたかいとして、七〇年闘争で完全に破産し崩壊の危機にたたきこまれた反代々木の行動左翼主義群小党派を日本階級闘争から一掃するという課題が依然として残されている。日共スターリン主義とわが反スターリン主義の中間に一時的にただよったこれら小ブル急進主義者どもを最後的に解体し、それを通じて反スターリン主義運動の飛躍的前進をたたかいとること、これが七〇年代階級闘争の核心問題の第三である。

現情勢ではきわめて困難な職場闘争の地道な組織化と展開を放棄し、「七〇年危機」とか「内乱的死闘の時代」とかとパラノイア的たわごとを口走り、そして決戦主義的方針のもと党派系列化した一握りの「反戦派労働者」なるものに棍棒と火炎ビンをもたせて街頭武闘を強要し、しかも権力のエジキに供することが「革命党」の任務であると主張し実行し、そうすることによって左翼小児病院的観念性を自己暴露し、崩壊の危機におとし入れられたのが、ブクロ＝中核派をはじめとした反代々木の行動左翼主義群小党派であった。かれらは七〇年闘争で本質的に破産し、潰えさったのである。まさにその後、昨秋開花した毛沢東的民族主義、道徳主義は、この屍が発する腐臭にほかならないのである。

だがしかし、破産を現出したこれらの諸党派はなお、さまざまな陰謀をめぐらせて延命しようとたくらんでいる。たとえ運動上で完全に破産し組織的危機におとしいれられているとはいえ、延命をたくらみ、腐敗をエスカレートさせているこれら反代々木群小党派を無慈悲に最後的に解体するためのたたかいは、われわれに課せられている焦眉の現実的課題なのである。われわれは、七〇年闘争を通じて強化しまた創造してきた拠点およびかちとった成果を基礎として、このたたかいをイデオロギー的にも組織的にも貫徹しなければならない。

とりわけ「革命パラノイア集団」たるブクロ＝中核派は、「革マル殺せ！」というかれらの信念を直接に実現することを通じて延命をはかるという狂挙に出たのであった。わが同盟を中軸とした戦闘的労働者と全学連によって実現された六月動労ストは、ブクロ＝中核派を主役とした小ブル急進主義者どもの七〇年闘争の破産を完璧なものとしただけでなく、さらに凋落したブクロ派の内部において、それまで潜在していた対立を一挙に顕在させたのであった。悲しいかな、わがブクロ官僚どもはその習性にしたがって、この危機的事態を政治技術主義的に「打開」しのりきることしかなしえなかった。すなわち、わが反スターリン主義運動に対する徹底した敵対と、そしてその必然的帰結としての、わが同志海老原の虐殺がそれである。だがそれは同時に、彼らの内部対立の「非和解的」な激化と下部の動揺、そしてわれ

われの追撃からの自己保身としての毛沢東主義へのぶざまな屈服と思想的変質とを生みだしたにすぎなかったのである。

われわれはこの同志海老原虐殺の問題を、七〇年闘争において破産したブクロ派による反スターリン主義運動への反階級的敵対として本質的にとらえ返し、その持つ意味を公然と明らかにすると同時に、さらにブクロ派をはじめとした反代々木行動左翼主義諸派の最後的解体のためのたたかいが、もはや一刻の遅滞もゆるされぬ焦眉の課題として浮び上っていることをすべての戦闘的労働者、学生、市民に訴えていった。それゆえわれわれは、ブクロ中核派に対する同志海老原虐殺糾弾のたたかいを断固としておしすすめ、これを七〇年秋期闘争の組織化と展開を軸とした党派闘争と結合し、さらにさまざまな特殊的組織戦術をも緻密に貫徹し、最後的な解体のためのたたかいをおしすすめてきたのである。

それだけではない。われわれは、この海老原問題をめぐるブクロ派以外の反代々木諸派や左翼知識人なるものの腐敗した対応に対しても、断固たるイデオロギー闘争をくりひろげ、そうすることによって反代々木戦線の総体としての革命的再編のためのたたかいをもおしすすめてきたのである。（近刊『革命的暴力とは何か』を参照せよ）

このわれわれのたたかいによって、わがブクロ＝中核派は思想的にも組織的にもまったくナマコ的存在になりはて、反スタの鼻輪はいまや形式的にもこぼれ落ちる寸前に立ち至ったのである。そしてこれまでブクロ派に拠ってのみ反革マルとして「野合」しえていたにすぎない反代々木の行動左翼主義諸集団は、遠心的に拡散し、霧散している。パラノイア症から廃人につき進んだかれらをこれ以上生き永らえさせてやることは、むしろわれわれにとって道義的犯罪ですらある。

われわれは、マルクス・レーニン主義の原則にのっとって、この党派闘争にすみやかに終止符を打つであろう。それに十分な思想的組織的諸準備はすでに完全に整っている。

すでに簡単にふれたように、七〇年代階級闘争の三つの核心問題――労働戦線の右翼的再編粉砕の闘い、沖縄、入管闘争のさらなる推進のための闘い、そして七〇年闘争の破産によって崩壊し混迷する反代々木左翼戦線の革命的再編の闘い――は、きわめて厳しいのである。そうであるがゆえに、これらの闘いをゆいいつ革命的におしすすめているのはわが同盟をおいてほかにない。

どのようにひかえ目に見ても、「七〇年代は革マルの時代だ」というのは、学生戦線においてのみならず、労働戦線においても周知の事態である。ある反代々木の行動左翼主義集団はわが同盟を誹謗するつもりでつぎのように書いている。「革マルは総評第一党派を狙っている！」（ブント）。

だがしかし、われわれの目的は死に瀕する反代々木の学生活動家が思いえがくような貧困なものではありえない。すでにわれわれは、革命的プロレタリアートの闘いの露頭をしめした七〇年闘争を区切りとして、社民、スターリン主義者との「本来の戦線」における激烈な闘いに突入し、そしてそれをおしすすめているのである。そうであるがゆえに、われわれはこのような闘いを究極的勝利に向けておしすすめるための主体的組織的根拠を一層強固に打ち固め、反スターリン主義のための闘いを、断固としてくりひろげなくてはならないのである。

わが同盟は、反スターリン主義のための闘いを飛躍的に前進させ、これを基礎に七〇年代階級闘争を前衛的に牽引しぬくであろう。これはほかでもなくわれわれのみに課せられた栄誉ある責務なのである。

日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）

第三次アジア革命へ合流する極東解放革命を推し進めよ

(一) 日本「新」左翼運動の総括
——六七～六九青年労働者学生急進主義運動の歴史的位置と性格——

①一九六七年以降のヴェトナム反戦・全国大学闘争、沖縄本土復帰闘争の三つ（ここでは青年労働者大衆の広範な自然発生的急進化の傾向について直接たちいらないことにする）は、大衆と活動家たちのブルジョア民主主義的幻想をふくみつつ攻勢的な急進主義的大衆諸闘争として爆発し、政治情勢における重要な戦術的主導権を形成しつつ発展してきた。これらはかつてロシア革命と第三インターナショナルの諸国共産党の運動が依拠したヨーロッパ中心の旧世界帝国主義体制の衰退と崩壊過程の諸矛盾と大衆諸闘争とは異なって、戦後において決定的に再組織されたアメリカ合衆国を主軸かつ主導者とした新帝国主義とその支配構造そのものの固有な矛盾に基礎づけられており、この新帝国主義体制のもとで官僚的に堕落させられた旧時代の大衆運動の改良主義的無能化に抗し、形成してきた新しい性格の急進主義的大衆諸闘争であった。ヴェトナム革命とヴェトナム反戦闘争は、まさしく新帝国主義体制のもとでの軍事的かつ植民地主義的構造そのものにもとづくものであり、大学闘争は現代帝国主義工業経済社会に固有の矛盾をもっていた。

とりわけ、沖縄労農人民の反軍事植民地抵抗闘争の発展は、一九五〇年代以降のアジアにおける新たな軍事帝国主義体制の根幹とブルジョア日本の新帝国主義的性格の根底そのものに本質的に基礎づけられており、アジアおよび日本における新帝国主義体制にたいして根本的に挑戦するものである。

ヴェトナム革命とヴェトナム反戦、全国大学闘争そして沖縄反軍事植民地闘争—これは新帝国主義世界体制とそのもとに形成された現代帝国主義工業経済社会にとって本質的な解決不能の矛盾であるゆえに、かつて急進主義的ではあったがこの新帝国主義世界体制のもとで改良主義的に堕落させられた伝統的大衆運動とその必然的に官僚化した政治組織機構によっては絶対に実現されえないものであった。

②一九四五年以降の日本労働者階級の急進民主主義かつ戦闘的な高揚は、共産党の政治指導もあいまってアメリカ帝国主義との徹底的な大衆的権力闘争を経験することなく敗北し、急進民主主義的な諸要求はブルジョア日本経済の急速な再建と発展のなかに改良主義的に吸収されていった。この大衆運動はアメリカ帝国主義のアジア反革命軍事体制にたいして平和主義的な抵抗の運動を企図しただけであり、自らの〝国民国家〟がただ平和主義的であることをもとめる以上には進みえなかった。

大衆的運動は結局のところアメリカ合衆国を主軸に形成された新帝国主義体制のうちにあってその改良主義反対派の水準であったというべきである。にもかかわらず、この一九五〇年代においてこの改良主義運動は広範な労働者大衆の自発的参加をもっておしすすめられた。この改良主義左翼としての広範な大衆の自発的参加は一九五七年から六〇年にかけて大ブルジョアジーと政府の意識的な攻撃によって粉砕されてしまった。

ここに新帝国主義体制下における日本改良主義運動総評・社会党構造の大衆的衰退とブルジョア抑圧的な官僚化の深化がはじまる。

新右翼労働官僚勢力の台頭とともに、改良主義労働組合機構にたいするブルジョアジーの統制力と政治的圧力は飛躍的につよまる。

広範な大衆の自発的参加は、それがブルジョア民主主義的あるいは改良主義的なものであっても深く抑圧されていった。大ブルジョアジーとその国家の大衆の圧力からの相対的独立化はすすんだ。

③一九六七年以降六九年一〇・一一月闘争に至る日本反帝国主義闘争生誕へ向けた急進主義大衆闘争は、この改良主義運動構造の官僚的堕落のもとで抑圧されてきた意識的かつ急進的な青年・学生活動家たちのヴェトナム革命に依拠し、ヴェトナム革命に触発された運動としてまずはじめられた。ヴェトナム革命の孤立のなかでの断固たる抵抗闘争に依拠し、これにたいする直接連帯の行動に改良主義運動機構の官僚的堕落と抑圧に対抗する統一した政治的結集を見いだしたのであった。六七年羽田闘争につづく六八年一月の佐世保闘争は、急進的学生活動家たちによる街頭における戦闘的街頭行動が佐世保市民の深く政治的に抑圧されてきた平和主義的不信と警戒心の爆発をよびおこし、これを大衆的に結合してブルジョア政治支配体制に重大な不意打ちをくらわせた。王子および新宿（六八年一〇・二一）においても基本的に同様のパターン—つまり一九六〇年以降発展した大衆の政治的自発性の官僚的抑圧にたいする民主主義的憤激および平和主義的警戒心と学生・青年労働者の急進主義的街頭直接行動とが大衆的規模で結合する——そして政治権力の側は政治的準備に欠けて不意打ちをくらう。こうして急進主義的大衆闘争が政治情勢における戦術的主導権を形成していった。この反戦闘争において、労働組合官僚は青年労働者大衆にたいする官僚的統制力をしばしばおびやかされた。

日大、東大闘争からはじまる全国大学闘争は、過渡的ながらも一つの社会的層をなす広範な学生層を急進主義的かつ爆発的大衆闘争にみちびきいれた。大衆的かつ急進主義的直接行動に向けて水路を準備したのはいうまでもなく羽田・佐世保・王子へといたるヴェトナム反戦闘争であり、フランスの五月であった。

この闘争の背後にあったのは本質的に急進的な矛盾のエネルギーの

要素と抑圧されているブルジョア民主主義にたいする幻想というものであった。このブルジョア民主主義的幻想は闘争の徹底的な大衆性のうちに実現された爆発性を形成するうえで重大な役割をはたしていった。

(4)一九六七年からこの一〇―一一月にいたる全闘争は、ブルジョア日本の大衆運動の中に反帝国主義の極左翼にむけた大衆組織の端緒、その可能的な極を歴史的に形成したということなのである。一九四五年八月以降にはじまる日本労働者階級の戦闘的かつ前革命的な立場は共産党の政治指導もあいまって工場および全国における意識的な二重権力形成の闘いに全面的に踏みこむことなく、全体として急進主義的ブルジョア民主主義運動の水準にとどまったといわなければならない。つまり〝人民戦線〟の政治水準をこえていない。共産党の指導のもとに工場および全国における過渡的二重権力闘争を意識的に放棄したことは民主主義的水準におけるアメリカ帝国主義との大衆的権力闘争の回避として革命的反帝国主義潮流の大衆的形成を妨げた――ここにヴェトナム人民の闘争の本質的に革命的性格と日本大衆闘争の以後における深い改良主義的性格の相異がうまれてくる。

すでに一九四五～五一年の大衆的闘争において、戦後ブルジョア日本における革命的反帝国主義潮流の形成は崩壊していたのである。

一九五〇年代以降のブルジョア日本の大衆運動が極東軍事植民地構造にたいして一指だにふれえず、朝鮮人民、沖縄労農人民に深い孤立とその長期にわたる抵抗闘争を強制して今日驚愕させられるのも当然である。

それゆえ、われわれは一九六七年から六九年一〇―一一月闘争にかけた全闘争を政治情勢の単なる戦術的左右への移行や動揺の水準でとらえることは絶対に出来ない。

根本的なことはこの全闘争の歴史的かつ戦略的な意味でありこの見地と立場からする達成された政治的成果なのである。

戦術的にいうならば、この全闘争は抑圧されてきたブルジョア民主主義的幻想をも広範に動員しつつ急進主義的な戦闘的直接行動として広範な大衆をもその自然発生性において引きつけて政治情勢における部分的だが重大な戦術的主導権を形成しさえした。政治権力と伝統的改良主義全国諸組織はしばしば重大な戦術的守勢と防衛においこまれた。

だが政治権力とその政治委員会は、今年の四～六月を転機に情勢にたいする彼らの戦術的主導権の再建に着手した――（そのテコは国内的には伝統的ブルジョア民主主義的幻想を大学と街頭において攻勢的に解体する警察力機動隊の物理的制圧力を中心とするの無制限動員と強化であった）。このことがブルジョア民主主義的幻想にもとづく大衆の自然発生性を政治的に受動化し、同時に急進主義的直接行動の極を形成している大衆的活動家層を物理的に鎮圧し制圧していった。沖縄については六八年一一月屋良革新候補の主席当選とこれに直ちにつづく二・四ゼネストの企図によってブルジョアジーは不意をうたれ衝撃をうけ、沖縄本土復帰闘争によって戦術的に先をこされた。

ブルジョア日本政府はここで七二年「本土並み・核抜き」とする帝国主義的沖縄施政権返還の政策と路線をだすことによって、二・四ゼネスト裏切りによって衝撃と動揺を強制された沖縄本土復帰闘争にたいする彼らの戦術的主導権を少くとも一時的にはうち立てることに成功した。

大学と街頭におけるブルジョア民主主義的幻想の徹底的な解体と警

察力の急進主義的直接行動にたいする無制限動員、そして沖縄本土復帰闘争の政治的動揺と〝混迷〟およびブルジョア日本政府の「七二年返還」路線にたいする政治的たてなおしの努力――この二つの要因が一〇―一一月闘争において反戦青年委員会に結集する青年労働者の自然発生的運動をとりわけ東京において徹底的な困難に追いつめていったし、唯強力な目的意識性にもとづくことなしには反戦労働者の闘争的結集を不可能にしてしまった。

(5)われわれが戦略的かつ歴史的な成果から今後のわれわれの闘いの政治土台として主張すべきものは、ヴェトナム反戦と基地をはじめとする軍事体系にたいする攻勢的諸闘争、全国大学闘争を中心とする教育体系にたいする闘争、沖縄反軍事植民地闘争――これらがいかに自然発生的な欠陥や限界につきまとわれていたとはいえ積極的かつ攻勢的な大衆的諸闘争として提起され闘いぬかれたこと。

しかも、それらは改良主義的な構造のなかでではなく、政治権力の強権的支配と伝統的大衆運動諸組織の合法主義的大衆闘争抑圧の企図と公然と対抗し、政治権力の日常支配との直接的対決のなかで遂行されたこと――これは全国政治権力との直接対決にむかう大衆的二重権力闘争としての本質的な過渡性をもった端緒としての大衆闘争であった。

そしてたしかにいま政治情勢における戦術的主導権は全国的には彼らの側に大きく奪われた。闘いぬかれたこの過程そのものは、この全闘争に参加した圧倒的多数の急進的大衆活動家たちのあいだに残存していたブルジョア民主主義的幻想を深く解体した。

全国学生運動に基礎をおく急進的学生活動家においては、伝統的改良主義運動にたいするイデオロギー的幻想は一九五八年から六〇年にいたる諸闘争において崩壊し、中間主義的な制約のなかで急進主義的独立化を獲得した。そして、この学生活動家運動に基礎をおく急進主義的流れは六七～六九年の諸闘争に全力をあげて介入し、残存するブルジョア民主主義的幻想は徹底的に打ちこわされた。新しい急進主義運動、新しい反帝国主義闘争においてさらに決定的なのは反戦派労働者運動をつうじた新しい急進主義的青年労働者運動の歴史的成立である。一九五八年から六〇年の諸闘争をつうじて伝統的大衆運動の改良主義的幻想からイデオロギー的かつ急進主義的独立化を獲ちとったのは当時の全学連運動の急進民主主義左翼の分派だけであって、労働者運動における大衆的活動家の政治的独立化は極く少数にとどまった。青年労働者活動家層における伝統的改良主義運動からのイデオロギー的および政治的な独立化は、まさしく一九六七年から六九年一〇―一一月闘争に至る過程そのものを通じて実現された。

この闘争の全経過をつうじてもっとも先進的かつ意識的な青年労働者活動家たちは伝統的改良主義運動からイデオロギー的かつ政治的に徹底的な自立化をとげざるを得ない。

同時に彼らに対して日本「新」左翼諸分派はいかんともしがたい無能かつ無力を鮮明化せざるを得ない。青年労働者層に基礎をおく新しい急進主義的な政治運動とそのイデオロギー的土台形成の歴史的意義は巨大かつ測りがたいものである。

われわれは、次の時期の青年労働者を主軸とする急進主義運動の全面化へ向けて徹底的に反帝国主義の政治へゲモニーを打ち樹てるべく努めるであろう。（同盟機関紙「世界革命」六九年十二月五日第二〇一号「六七―六九年総括と展望」抜粋）

(二) 極東解放革命とわが反帝闘争の任務

(1)戦後アジア軍事帝国主義支配体制の重要な一角がヴェトナム―インドシナ諸国人民の武装解放闘争によって決定的に食い破られた今日のアジア情勢の新しい歴史的局面。

換言すれば、闘うアジア人民のあの壮大な第二次アジア革命が、アメリカ帝国主義の巨大な軍事反革命によって徹底的に踏みにじられ、中途挫折を経験させられたにもかかわらず、その屈辱と苦節の十五年をひたすら雌伏しつづけた彼らは、自身の力のみで再びインドシナ半島を最大の根拠地として第三次アジア革命とその新しい歴史的局面を切り開いたのであった。これらは絶対的に不可逆的であり、かつ趨勢的に今後発展、拡大しつづけるのみである。かくて、決定的な敗退をこうむったアメリカ帝国主義は、相対的に成長をとげた新日本帝国主義を重要な相伴者として、その唯一の拠点、単一の極東帝国主義支配体制の再確立にとその力を投入しつつある。

アジア情勢の構造的特徴は、ヴェトナム・インドシナ革命と極東軍事帝国主義支配体制との対峙・抗争の具体的展開に他ならない。これを決定的な抗争軸として、労働者国家中国・北部朝鮮は前者に結集し、インドシナ半島東南アジア土着―カイライ反革命諸政権は後者にと結集しているといわねばならない。

アジア情勢の歴史的性格および今日の具体的段階から、われわれはわが革命の歴史的綱領的性格と任務について以下の規定を与えねばならない。

第一に、わが革命は反帝国主義永久革命である。

新日本帝国主義の力を有機的一環としつつも、アジアにおける帝国主義反革命支配体制がただアメリカ帝国主義軍事力によって支えられていること、第二次アジア革命以後のアジア情勢は、革命と反革命の双方にとって深く軍事性が主導してきたこと、以上を考えるならば、わが革命は、この反革命の軍事中枢にたいして徹底的に挑戦しかつ解体を図ることなしに勝利はありえない。アメリカ帝国主義軍事権力による世界アジア反革命の綱領、これに対決しうるのは、ただ反帝国主義永久革命の綱領である。日本労働者大衆がどのような改良急進的な大衆的決起をなそうとも、この綱領に飛躍的に到達しかつこの水準で闘争しぬくことなしに真実の勝利をかちとることはできない。

第二に、わが革命は、闘うアジア人民による第三次アジア革命の一有機的分節として位置する極東解放革命として闘いぬかれねばならない。

ヴェトナム―インドシナ革命のアジアへの永久的発展、同様に民族的・半民族的勝利の枠にとどまった中国・朝鮮革命のアジアへの永久的発展をめざす第三次アジア革命の一有機的分節としてわが革命が位置するということは、なによりも以下のことをわれわれに無条件に要求するものである。すなわち、第一には、われわれの革命的感性・政治意識・イデオロギー、総じてわが綱領が、ヴェトナム・インドシナ革命に最も具体的に獲得されかつここから出発していなければならないということであり、第二には米日帝国主義の労働者国家・朝鮮にたいする軍事反革命の包囲・敵対という構造自身を根本的に理解し、両労働者国家を無条件に防衛するということである。かかる闘うアジア人民の血と苦闘とが集積されている歴史過程および軍事帝国主義支配体制にたいして闘う今日の第三次アジア革命に、われわれが無条件か

ら強固に自身の基礎をおくことなく極東解放革命を語る場合、それは真実の革命を宿すことのないぬけがら同然に過ぎないであろう。

それはまた、自身の根深い一国性・民族性をただ単純地理的に外延させるだけであり、あまたある日本急進主義諸党派から自己を区別しようとする単なる規定指標にすぎないであろう。第三次アジア革命の一有機的分節たるわが革命、ということこそを決定的かつ現実的にわれわれは理解しなければならない。

同様に、わが革命が第三次アジア革命の一有機的分節としての極東解放革命であるとするわれわれの綱領的論拠は以下によって明らかである。

歴史的に見て極東は、旧日本帝国主義のアジア侵略による「大東亜共栄圏」の強固な反革命根拠地であった。

この旧日本帝国主義の反革命の歴史は、強制的に形成を余儀なくされかつ今日一層抑圧体制におかれている在日朝鮮人民、在日アジア人民問題として受け継がれている。

旧日本帝国主義の敗北後、極東＝朝鮮は、中国、インドシナ半島とならんで第二次アジア革命の最大の抗争の場であり、同時にこの中途挫折以後その南半部はアメリカ帝国主義によって軍事反革命植民地として強制させられ、沖縄とともに極東反革命体制を担いつづけてきたのであった。この体制の下に、日本ブルジョア、プロレタリアートの双方は、平和主義的・改良主義的土壌を保障しえたのであった。そして、今日の極東は、新日本帝国主義の意識的参加を重大なる副軸としてヴェトナム―インドシナ革命に対抗せんとする強固なる反革命拠点として再確立されつつある。

アメリカ帝国主義の軍事力なしに極東の安定はない。南朝鮮軍事植民地の確固たる維持と防衛なしに帝国主義日本本土の安定はありえない。沖縄の米軍事基地の存在なしに、日本本土―南朝鮮の安定はありえない。まったく同様に、帝国主義日本本土の政治的、経済的安定度は南朝鮮軍事植民地のそれにほぼ比例させる。かくして単一かつ運命共同体としてある極東の形成は、わが革命を極東解放革命という綱領的結論に導いてゆく。

南朝鮮人民による軍事植民地解体・打倒の闘争を自己の闘争として

世界の名車

ついに成し遂げた
総合優勝――

〈第18回東アフリカ
サファリ・ラリー〉

今年も3月26日から5日間このラリーが行われました。出場車91台中、豪雨の原野5000kmを完走したのはわずか19台。ブルーバードが常にトップを争い世界の強豪を大きく引き離してゴールイン。〈総合・クラス・チーム〉優勝の3冠を独占しました。まさに《世界の名車＝ブルーバード》です。

NISSAN 日産自動車株式会社

ブルーバード

徹底的に把えつくすこと、沖縄人民の反軍事植民地闘争を自身の課題として徹底的に把握しつくし闘おうとすること。新日本帝国主義国家権力の弾圧・抑圧下にある在日朝鮮人民の防衛をまさしく極東解放革命そのものとして理解し闘おうとすること。以上の水準＝極東解放革命に確固としたかつ多数の日本労働者大衆が到達することなしに、勝利の果実を展望することはできない。かくして、われわれは、米日帝国主義の最強かつ最後の拠点である極東においてその解体・打倒をめざさんとする極東解放革命をもって、ヴェトナム―インドシナ三国人民と最も深く連帯して闘おうとする。

われわれは、極東解放革命をもって、ヴェトナム―インドシナ三国人民と最も深く連帯して闘おうとする。われわれは、極東解放革命をもって、ヴェトナム―インドシナ永久革命につづいて立ちあがろうとする全アジア人民に最も深く連帯せんとする。同様にまたわれわれは、極東解放革命をもって労働者国家中国・朝鮮を無条件に防衛し、かつ反帝国主義闘争に決起せんとするこれら両国人民と兄弟的連帯を築こうとする。われわれは、これら米日帝国主義―極東軍事反革命体制にたいして自身が闘いぬこうとすることこそが、労働者国家両国における政治革命の展望を最も具体的に開く有力な一助であることを深く確信する。

われわれが挑戦し闘争しなければならない時代は、米日帝国主義の最後の最後の時代であること、われわれが挑戦し闘争しなければならない対象は、米日帝国主義の残された唯一の拠点たる極東であること、われわれは以上の困難だが光栄ある歴史的任務を貫徹すべく闘うアジア人民とともに極東解放革命を闘いぬいてゆかねばならない。

第三次アジア革命の一分節としての極東解放革命、その重大な一翼を担わねばならない日本本土反帝国主義労働者革命は、第三に次の絶対的要件を満足させることなしに勝利の展望を切り開くことはできない。

すなわち、アジアにおいて歴史的かつ現実的に抑圧民族でありつづけているのは日本民族のみに限定されていること、したがってこの根本的自覚に立ち、具体的な抑圧民族性を徹底的に解体しぬくことこそが必要である。

つまり、日本抑圧民族性の二つの表現、意識的民族排外主義および受動的な国民的平和主義の既成の根深いヘゲモニーに対して、これを徹底的に打倒しかつ反帝国主義、国際主義のヘゲモニーを持続的に打ち樹てることなしにはわれわれは勝利をうることができない。

歴史的見地から日本民族の一世紀をふり返って概括して見るとき、旧日本帝国主義下の日本労働者人民は、一八九五年から四五年間までの丁度半世紀もの長期にわたって超侵略的、超略奪的な抑圧民族として位置されつづけてきたのであった。これに抵抗しぬこうとしたのは、スターリニスト的ではあれ国際革命に連帯しぬこうとした日本共産党の極小部分にとどまっていたのであった。

そして、旧日本帝国主義の四五年の敗北以後から今日にいたる四分の一世紀にかけて、日本労働者人民は自己の抑圧民族性にたいする徹底的な無自覚、および受動的あるいは急進的国民的平和主義の支配下におかれていた。

歴史的に見て、この時代は完全な一国的中間主義の時代であった。だが、ヴェトナム―アジア革命の登場、アメリカ帝国主義の軍事的・政治的後退、および新日本帝国主義のアジア人民にたいする直接的敵対の始まり、以上こそはわれわれをして客観的に新しい時代へと導

いているものである。

この時代を真実に日本労働者人民の新しい時代へと主体的に吸収・転化するためには、われわれは戦後四分の一世紀という長期の中間期をのりこえて、旧天皇制日本帝国主義下とはまったく対照的な逆の関係を築きあげねばならない。つまり、旧天皇制日本帝国主義下の労働者大衆が全大衆的に燃えてアジア人民抑圧のために「鬼畜米英」打倒をめざして生命をかけて闘いぬいたのとはまったく逆に、自己の歴史そのものにたいする異常な復襲心と怒りに燃えて被抑圧アジア人民とともに米日帝国主義に銃を向けようとする水準に日本本土労働者人民が到達しない限り、われわれは勝利を獲得することができない。

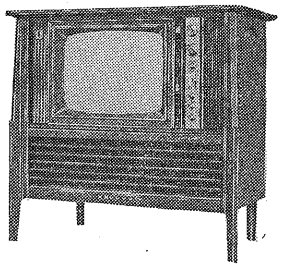
われわれは自身の歴史を卒直かつ大胆に学ばねばならない。われわれはいかなる排外主義的諸傾向にも看過することなく闘争しつづけなければならない。

われわれは受動的あるいは急進的国民平和主義にたいして非妥協的に挑戦、解体しかつ積極的な反帝国主義に転化させるべく闘いぬかねばならない。われわれは、今後必然的に形成される急進的労働者大衆にたいして占拠、自衛武装、工場委員会、労働者管理、一切の生産手段の収奪と無償国有化というわが過渡的綱領で全国的二重権力闘争へと秩序づけるべく干渉し闘いぬいてゆく。

つまり、急進的労働者大衆闘争が自然発生的には容易に到達しうるであろう急進主義的拒否の水準を共に闘いぬきながら労働者権力性を徹底的に貫徹させるべく闘いぬいてゆく。だが、われわれはこの水準にとどまろうとは思わない。今日の革命が反帝国主義闘争を土台・媒介としないかぎり社会主義革命にはなりえないことをわれわれはよく知っている。

したがってわれわれは、以上の如き急進的大衆闘争にたいして、その自然発生的サンジカリスト的諸傾向と対決しぬきながら総体にたいして反帝国主義闘争の観点から闘いぬこうとする。

一世紀の長きにわたって蓄積され培かわれてきたわれわれの抑圧民族としての歴史と伝統、この解体のための闘争はあまりにも至難の業である。われわれは、わが革命の事業についてどのような安易なる幻想をも持とうとはしない。だが、われわれは、わがトロツキスト派の

全自動！あなたはスイッチを入れるだけ
オートファイン 世界 新発売！

オートファインで
瞬間カラーベスト調整
オートのスイッチをポン！赤いランプが光ってカラー調整はＯＫです。カラー・ティント・ブライト…いろいろツマミをいじりまわす必要はありません。いつもスキットした画面をたもつ自動スキット回路やお好みにあわせて調節もできる肌色コントロールがついているのはコロムビアだけ！
オートファイン
19C-82AU 現金正価189,000円
Columbia カラーテレビはコロムビア

みがこの至難かつ重大な歴史的任務に応えうることを確信する。

(2)以上の如き根本的な任務を確認して、われわれは日本本土に真実の反帝国主義闘争の構築のために、およびこの綱領的観点からすべての急進的大衆運動への意識的参加と介入を行なってゆかねばならない。

われわれは、直接的な大衆的反帝国主義闘争の構築をめざしてその最も重大な任務として、米日帝国主義の極東反革命体制の再編強化にたいしてその阻止と解体のために闘いぬかねばならない。そして、その中心的かつ具体的な任務は以下の通りである。

その第一は、極東軍事反革命体制の中枢である沖縄全島米軍基地の安定維持のためにその積極的防衛にのりださんとしている新日本帝国主義の七二年沖縄統合にたいして闘うことである。この闘争は、沖縄人民の平和主義的、大衆的反軍事基地闘争に真実に連帯しかつ発展、飛躍を展望するための本土プロレタリアートの最大の任務である。

その第二は、今日極めて早いテンポで画策されている新日本帝国主義の極東反革命体制の最前衛にたつ南朝鮮軍事植民地体制への反革命的なテコ入れにたいして徹底的に闘争すること、かつその苛酷な軍事植民地体制を強権的日本国家権力によって強制適用せんとしていることにたいして、在日朝鮮人民の無条件の自決権、自治権の獲得という観点から闘いぬくことである。

その第三は、極東軍事反革命体制の重大な有機的一翼を構成する横田、三沢をはじめとする米日軍事基地の撤去、解体闘争である。

そして第四には、沖縄人民の反軍事植民地闘争にたいする具体的軍事抑圧の任務に着手せんとしている、さらには極東、アジア人民への抑圧のために軍事的待機体制に入りつつある日本自衛隊にたいする内外部での闘争である。

かくて、われわれは、以上の四つの闘争を、極東解放革命の一体的かつ同質のものとして展開してゆかねばならない。

同時にわれわれはまた、必然的に形成されかつまた労働者大衆がたどらねばならない急進主義的労働者闘争において、その自然発生的なサンジカリスト的潮流にたいして大衆的二重権力闘争形成の観点から闘いぬかねばならない。この潮流にたいして綱領的、イデオロギー的、具体的に闘争しぬくことなくして、わが反帝国主義闘争の綱領的体系に彼らを獲得することは不可能である。

われわれは、かかる点で、帝国主義労働運動の粉砕、経営拠点における反帝国主義闘争の構築および労働者大衆の具体的力関係としての自立的決定権の形成をめざす反帝国主義労働者闘争の創出をめざして闘いぬかねばならない。（理論機関誌「第四インターナショナル」NO、8　一九七〇・一〇・一「当面する情勢と大衆闘争におけるわれわれの任務」抜粋）

世界にのびる
鉄の住友

超近代的な一貫体制を完成し、国内はもとより、積極的な海外活動を展開した努力の結果、鉄のスミトモの今日があり、明日への躍進が約束されています。

住友金属

(三) 日本新左翼運動とわが同盟の歴史的役割

一九五八年、わが同盟が第四インターナショナルの日本支部として結成されてから今日までに至る十年余――われわれが日本「新」左翼運動において貢献し寄与し得たと確信することは次の点においてである。

a、新しい世界党＝第四インターナショナルに結集して、帝国主義とスターリニストからロシア革命の成果とボルシェヴィキ・レーニン主義を積極的に防衛する――そのことを通して日本における真実の反帝国主義世界永久革命派として自己を位置付け闘いぬいてきたことである。ローザ・ルクセンブルグとレーニン死後、今日にいたる帝国主義時代の全体を通じて、第二インターナショナル革命派と第三インターナショナルの初期の理念と教義たる帝国主義時代における革命的マルクス主義、集中的にはボルシェヴィズムとレーニン主義を意識的に防衛しようとし、この綱領的イデオロギーの見地から不断に国際階級闘争の現実を分析し、革命的諸方針のために闘いつづけてきたのは、国際トロツキスト運動としての第四インターナショナル以外に絶対的に存在しない。国際トロツキスト運動としての第四インターナショナルはすでに永い歴史をもっている。一九二八年トロツキーにたいするソ連邦・スターリニスト国外追放処分にはじまる国際左翼反対派の形成、一九三二年ドイツ・ファシズムの勝利は第三インターナショナルの政治的死滅をしるすものである、とする国際トロツキストの政治的宣言と言語を絶する壮絶な第四インターナショナル創設のための闘い。

そして、ドイツファシズムの席捲する暗黒の時代における闘い。この歴史的反動の時代の中で、マルクス主義と世界永久革命の旗を確固として死守したのはトロツキストとしてのわれわれ第四インターナショナル派以外世界に存在しなかったことは明らかである。もちろん、幾つかの試行錯誤とジグザグの歴史をもわれわれ第四インターナショナル国際トロツキスト運動はもっている。われわれは、それを隠したりしようとはしない。だが、しかし強調しておかねばならないのは、世界党の新たなる創設とそして現にそのために国際的な闘いを続けているのは、われわれ第四インターナショナ派のみであることなのである。帝国主義時代における革命がすべての民族主義的且つ一国主義的マルクス主義潮流によっては反帝国主義世界永久革命として達成することは不可能であるということをわれわれは深く確信している。われわれの同盟十年余の歴史は、この革命的インターナショナルの立場の防衛を通してトロツキズムを日本階級闘争の中に結晶化させてゆくことであった。ヴェトナム革命が、その世界史的意義を有して現代帝国主義世界に挑戦する闘いを敢然と組織している今日、革命的世界党の建設を担うわれわれの闘いはますます重大な使命を帯びているのである。

b、われわれの同盟が、日本階級闘争に持っている歴史的役割とその可能的武器は、反帝国主義世界永久革命戦略の一環としての歴史綱領たる極東解放革命である。六八年ヴェトナム人民のテト攻勢が、アメリカ帝国主義軍事植民権力の歴史衰退崩壊・局面の開始を劇的に全世界に向って示したことは、現代帝国主義世界そのものを、そればかりでなくその革命を民族的見地から追求しようと夢想する一国主義的且つ民族主義的左翼にとっても衝撃的事件であった。ヴェトナム人民

の頑強で不屈な武装抵抗闘争が、現代帝国主義世界の唯一の世界権力たる合衆国アメリカに挑戦していることにおいて、そのヴェトナム人民の英雄的闘いが紛れもなく反帝国主義世界永久革命に向う端緒であることを、ヴェトナム革命の世界史的意義として深く意識したのは日本においてわが同盟であった。

われわれの歴史綱領としての極東解放革命路線確立へ向けての営為はここに出発した。すなわち、ヴェトナム人民の血の雄叫びが、帝国アメリカの現代世界の一元的支配としての新帝国主義世界体制打倒へと向うダイナミズムを現に形成しており、このダイナミズムを永久的に発展強化させるべく、われわれが全力をもって反帝国主義アジア革命へ合流せんとすること。ここにわが同盟の第三次アジア革命の有機的一分節としての反帝国主義極東解放革命の歴史綱領確立へ向けた闘いが開始された。われわれの綱領たる極東解放革命路線は未だ基本的なものでしかないことをわれわれは知りぬいている。革命が歴史的必然性の過程である如く、また綱領の形成確立も歴史過程的営為によってのみ成し得る。われわれは、革命の綱領の豊富化とその本質的確立へむけての過程を極東解放革命とする綱領的総路線として確定し闘いぬかんとす。七〇年代日本階級闘争が、アジア革命へとますます緊密に結合し、合流せねばならぬことが広く大衆的に認識され始めている。それは、ヴェトナム・インドシナ植民地解放革命が主軸となって展開しているアジア情勢の客観的圧力であり歴史的要請なのである。われわれは、第三次アジア革命へ合流する日本階級闘争の反帝国主義的政治水準への飛躍を可能とするテコを今、七〇年代階級闘争の全過程で極東解放革命路線の内実化として一層の闘いの強化によって獲得してゆくこととなる。

昇給ペースがご返済ペース
サラリーマンの家づくりに
ワリチョー住宅ローン
お手持ちのワリチョーの、5倍をご融資。ご返済は15年。昇給に応じたご返済プランが立ち、いまスグにも取りかかれます。
期間1年・利回り年6.213%・無記名
ワリチョー
期間5年・利回り年7.638%・無記名
リッチョー
日本長期信用銀行

反帝労働運動とわが任務

(1)当面する労働運動の情勢は、新日本帝国主義経済の戦後における相対的な発展をその平和主義と改良主義の物質的基盤とした民同労働運動の最後的分解と衰退——帝国主義労働運動への屈服としてある。

民同労働運動の分解は、五〇年代後半から六〇年代初めにかけての高度経済成長期より行なわれていた。それは、技術革新に基づく設備投資と企業合理化の中で、民間基幹産業部門を軸とした民同労働運動の衰退と帝国主義労働運動の登場としてあった。現在の民同労働運動の衰退は、その基礎たる公労協部門における帝国主義労働運動への屈服としてある。

(2)帝国主義労働運動は、労働組合をブルジョア国家支配秩序に組み込み、その一構成体とする。帝国主義労働運動は、労働組合官僚がその個別企業から独立しブルジョア国家へと直接的に結合することがその形成にとっての不可欠の条件である。この帝国主義労働運動の形成は、企業間競争の対立を国家的財政、金融などの政策によって調整、

統合し、個別企業の利害を越えた基本的利害を国家の方向性において統一し、それへと国民的に統合せんとする国家的ヘゲモニーの強固な確立を通して行なわれる。帝国主義労働運動の形成にとって決定的な軸となるのは、したがって公労協部門である。すなわち、帝国主義労働運動形成の官僚的ヘゲモニーは、企業連合組合を基盤とし、企業ごとの個別利害を基礎としている民間企業組合の官僚層にはない。帝国主義労働運動のヘゲモニーは、ＩＬＯ専従体制の確立を基盤とした公労協を中心とした国家的労働組合官僚体制の確立を通して可能となるであろう。

(3)かくして、労働戦線の右翼的統一＝帝国主義労働運動の形成をめぐる攻防の焦点は、まさに公労協内部における民同官僚機構の帝国主義国家への公然たる屈服か、公労協を軸とした下部青年労働者大衆の戦闘的エネルギーの発展による民同官僚機構の解体を資本と権力への直接的対決を通して行なうのか、まさにこの闘いによって全労働戦線の動向は決定されるのである。

(4)民間基幹産業部門における下部青年労働者の急進化は、労働組合官僚支配秩序が相対的に強固なものとして確立されて以降深くそのエネルギーを抑制・統御させられてきた。

高度成長による新日本帝国主義経済の発展と需要労働力の増大に伴う若年労働力不足は、民間基幹産業部門における官僚的労働組合支配を一層可能なものとさせていった。同時に民間基幹産業部門たる鉄鋼、自動車、造船、においては、需要労働力増大に伴う若年労働力不足が、企業の合理化と労働力獲得のため全面的な下請化を進行させていった。尨大な社外工、臨時工、季節労働者、パート労働による差別的雇用構造の形成—ここに低賃金、長時間労働、労働強化による合理化の矛盾が蓄積される。この中小企業、臨時工、社外工の間に蓄積される矛盾が闘争的エネルギーをもって巨大化してゆき基幹産業労働組合下の本工労働者へと波及し、官僚的労働組合支配秩序を揺るがす。

(5)労働運動の来るべき局面は、民同労働運動の最後的分解過程と帝国主義労働運動への包摂・屈服という中での下部青年労働者大衆の急進主義的エネルギーの全面化として現出する。それは、新日本帝国主義経済の発展が第三次アジア革命の開始と米帝の後退という中で歴史的に終焉しつつあり、日本労働者階級を政治経済社会の全分野に渡って支配し統制してきた秩序総体が趨勢的に崩壊の局面を迎えつつある中では不可避の政治的事態なのである。

(6)その局面における労働者の急進化は中道左派や人民戦線左翼へと結晶化していく政治的欠陥があることをわれわれは留意しなければならない。

青年労働者の大衆的急進化と国家資本への直接対決は、その政治経験、闘争経験の蓄積の無さに基因して自然発生的且つサンジカリズム的性格を刻印されている。

われわれは次の来るべき労働運動の急進化を徹頭徹尾反帝国主義的な質として形成すべく闘わなくてはならない。

われわれは、アジア植民地人民の闘いに無条件の支持と連帯の闘いを反帝闘争への日本労働者大衆の全面的組織化として開始しなくてはならない。

われわれは、労働組合官僚の国家資本への屈服と癒着から、労働組合の自立化を防衛する闘いに立たねばならない。

われわれは、下部労働者の「合理化阻止」の戦闘的意欲とエネルギーを全面的に支持し、その自然発生的反乱を労働者管理の闘いへと目

的意識的に発展強化させてゆかねばならない。（同盟機関紙「世界革命」七〇年九月五日第二一八号「当面する反帝労働運動の特徴と反帝労働運動の任務」抜粋）

入管闘争とわが任務

― 在日被抑圧民族無条件防衛の課題 ―

(1)在日朝鮮人民を先頭とする被抑圧民族の民族的自治・自決を獲得していく闘いを無条件に支持し防衛していくこと――この任務の歴史的且つ政治的重大性を日本階級闘争は久しく認識することができなかった。日本階級闘争の歴史の中で労働者人民は、帝国主義抑圧民族性の粋の中に深く呪縛され続けてきた。日本階級闘争の歴史に刻印されてある排外主義的且つ一国主義的性格は、日本労働者人民が闘うアジア人民への国際主義的支持と連帯の闘いを一度たりとも本格的にブルジョア日本内部に形成定着したことのないという厳然たる歴史事実に基づいている。七・七―一〇・八における華青闘の尖鋭な告発的提起こそ、日本労働者人民のこれまでの政治水準とその帝国主義抑圧民族性へ向けられたものであった。

(2)入管闘争の本格的な組織化を、日本労働者大衆をして在日被抑圧民族無条件防衛の闘争へと徹底的に動員し尽くさんとすること――この真の意味における国際主義的任務こそ、われわれ＝日本労働者大衆の闘争的課題として提起されたのである。帝国主義抑圧民族の立場からする様々な「左翼」的大言壮語や空文句は、曰く「中央権力闘争」「日帝打倒」「政府打倒」として、またそれのみならずそのカンパニア性は「後進国革命の民族主義的限界」という露骨なまでの社会排外主義として日本大衆闘争の内部でこれまで横行してきた。この帝国主義抑圧民族性の粋を一歩たりとも踏み出していない日本急進主義大衆闘争の政治主体にとって、華青闘の告発は、解体的打撃としてあった。

或る者は、形式のみの自己批判という名の免罪行為に逃げこむことにより華青闘の告発的提起を政治思想的に受け止めることを拒否した。

他方では華青闘の提起を即自的且つ感覚的にのみしか受け止めることができない結果として「民族的責任」や「民族的原罪」という自己否定的運動水準（差別構造主義）に止めんとする部分が存在していた。われわれは、在日中朝人民を先頭にした入管抑圧体制へと鋭く対決している闘いが、第三次アジア革命の深化拡大に対抗して極東アジア反革命軍事体制再編強化の任務を極東帝国主義化としてなしつつある日本帝国主義への闘うアジア人民の立場からする本質的且つ根本的な闘いであると認識しなくてはならない。

在日中朝人民にとって、入管闘争とは第二次アジア革命の米帝による強大な軍事反革命による中途挫折としていわば未完の革命としてある抗日民族解放闘争の完遂、達成としての歴史的位置をしめているのである。在日中朝人民は、二〇年代初頭からその言語を絶する苛酷な強制労働と被抑圧的生活環境の中で一切の自治・自決の民族的諸権利を強権的に封殺し続けられてきた。この抑圧体制の今日的形態こそ、日『韓』法的地位協定にもとづく入管体制なのである。在日朝鮮人民を先頭とした被抑圧民族の自治・自決を獲得する闘いを無条件に支持し防衛する隊伍がどれほど深く強固に日本労働者大衆の内部に築くことができるのかは、日本階級闘争がアジア革命へと合流し反帝国主義的水準へと自己を強化していく度合でもある。日本労働者大衆は、アジア被抑圧民族の自治・自決を獲得していく闘いに直面して、闘うア

ジア人民の立場を無条件に支持し帝国主義の強権的抑圧体制から防衛しようとするのか、それとも自己の帝国主義抑圧民族としての特権的位置と生活を排外主義的に防衛しようとするか、鋭く二つの道を問われる。われわれは、在日被抑圧民族の自治・自決の要求のすべてを無条件に支持し防衛しようとしなくてはならない。それ以外の政治的立場はすべて民族排外主義へと堕落することを銘記しなくてはならない。

(3)入管闘争におけるわれわれの当面する任務は、第一に在日朝鮮人民の国籍書書きかえ運動を無条件に支持し防衛する闘いを国家権力・法務省の分断解体の弾圧に抗して大衆的に築くことである。

第二に「入管法」の国会再上程阻止を大衆的闘いとして組織化することである。国会へ向う在日被抑圧民族無条件防衛の大衆的包囲の渦を波状的に組織しなくてはならない。

第三に、健保、失保、失対事業など在日朝鮮人民の抑圧的生活環境からの脱却の闘いを支持し防衛する闘いを通して東京入管闘、各地方入管闘を強化していかねばならない。

第四に、東京入管闘事務所、事務局、入管新聞を大衆的に獲得することによって入管闘の大衆的闘争機関としての強化に努めねばならない。そして学園・職場の大衆的深部に入管闘を組織化し、自治会・労組を入管闘争に獲得しなくてはならない。

(4)われわれの闘争スローガンは、次の如くである。

一、在日朝鮮人民の無条件の自治権自決権の獲得のために闘い抜け！

(1) 在日朝鮮人民の無条件の在留自己決定権・無限定の祖国往来を獲得するために闘いぬけ！

(2) 日帝植民地支配による一切の略奪犠牲に対する無際限の補償を！

(3) 「大韓民国籍」強要粉砕・「入管特別法」粉砕！

「韓国籍」から朝鮮籍への切りかえ断固支持！

(4) 健保・社保の無条件の適用をかちとれ！「失対」うちきり阻止！

二、在日被抑圧民族無条件防衛！

(1) 朝鮮人高校生への集団暴行糾弾！

(2) 在日朝鮮人民の自治的・自主的民族教育を防衛せよ！

(3) 華青闘争防衛！官憲の弾圧を許すな！

(4) 巫召鴻劉道昌君の即時無条件在留をかちとれ！

三、「入管体制」粉砕！

(1) 「入管法」再上程阻止！

(2) 日「韓」条約粉砕！「日『韓』法的地位協定」破棄！

(3) 大村収容所・全国入管事務所解体！強制収容・強制送還阻止！

四、統一朝鮮革命勝利！

あなたの三菱
世界の三菱
引起し、刈取り、結束が一行程
三菱バインダー《秋晴れ》
三菱重工
三菱重工業株式會社
東京都千代田区丸の内二丁目5番1号
（〒No100）　☎(03)212－3111（大代）
電略　トウキョウカニュウ　ミッビシジュウコウ

叛軍闘争とわが任務

― 革命的兵士委員会の形成へ向けて ―

戦後二〇年間、日本ブルジョワジーは政治的・軍事的・経済的にアメリカ帝国主義から手厚く保護されつづけてき、同様にまたそれ故にこそアジア人民の深い反帝国主義闘争から相対的に解放されつづけてきた。他方、日本プロレタリアートもまた巨大で歴史的な極限的戦争体験が生みだした長い平和主義の反動のなかに自身をうずめていた。以上二つの事実は、日本自衛隊を日本ブルジョワジー・日本プロレタリアートがこぞって政治的に私生児として取扱いつづけてきたことを示している。「自衛のための、戦力ではない、自衛隊の保持は何ら憲法第九条に抵触しない」と国会で答弁された日本自衛隊は、ひたすら次の段階に備えて、平和主義的労働者大衆の攻勢から防衛され、アジア・極東反革命支配のなかで占める貴重な「私生児」の位置を保たれてきた。戦後日本自衛隊は、その基本性格としてブルジョワジーの守勢を反映したユガミと弱さを持っていた。すなわち、全将校、全士官、全兵士を主体的、積極的、意識的な反革命の政治価置体系に秩序づけられなかった弱さであり、三島事件に対する自衛官たちの反応がこれを如実に示している。

沖縄の帝国主義的併合と極東・アジアへの反革命的介入を日米共同声明のなかで公然と宣言した日本ブルジョワジーにとって、自衛隊の根本的転換と飛躍が今せまられている。治安出動訓練、さらには自衛隊沖縄派遣の具体的準備を通じて着々と準備されつつあるこの転換に、日本プロレタリアートはどう答えようとするのか、ここに問題の核心がある。兵士小西の登場は、この意味で歴史的分岐点を画するものだった。戦後二〇数年にわたってつちかわれた国民平和主義の立場から、始まった自衛隊内の本格的政治分化に応えることは絶対にできない。「違憲・護憲論争」の枠を客観的に真正面から突破し、軍隊に対する革命家の態度を、痛いほど鋭くすべての「左翼」につきつけたものこそ、兵士小西の行動にほかならない。

日本プロレタリアートは、第二次世界大戦―アジア侵略戦争のあまりに悲惨な体験をくぐりぬけ、戦争そのもの、あるいは軍隊・兵士・武器そのものへの嫌悪と拒否という絶対平和主義的意識に包摂された。このなかで生まれた反自衛隊闘争は、平和と憲法を唯一のよりどころとする「自衛隊違憲訴訟」であり、新左翼諸党派内部においても、決してこの次元はこえられなかった。自己のとるに足らない寄せ集まりを「軍団」と呼び、革命の「軍隊」と呼ぶ者たちにしてもプロレタリアート総体の国民平和主義を何ら解体できはしない。軍隊に内部から介入する意識、武器を持つ兵士を組織する試みこそ、兵士小西の行動の底を流れるものだったのである。

自衛隊兵士への政治分解の持ち込み＝革命的兵士委員会の形成は、新しく提起されたものでも、「新左翼」の占有物でもない。それは人民の総武装―赤軍建設から権力奪取へといたる革命のもっとも古典的な第一歩にすぎない。日本プロレタリアートが二〇数年にわたってキバを奪われた「羊」である以上、革命になによりも必要な軍事的規律・精神とりわけ技術を提供するのは自衛隊兵士をおいてほかにはない。われわれは、半世紀におよぶ世界革命運動の伝統に立ちもどり、もっとも困難かつもっとも必須の活動を展開しようとするのである。

革命的兵士委員会の過渡的スローガン――兵士の権利獲得――は、具体的戦闘も治安出動の経験も持たない自衛隊のなかでは、より困難な闘争課題となる。アルジェリア戦争時のフランス軍隊あるいはベト

ナム戦争に動員されるアメリカ兵士の場合と異なり、ここでは現にある日常的秩序それ自体にゼロから切りこんでゆかなければならない。可能な道はただひとつ、自衛隊内外の労働者を組織することであり、自衛隊沖縄派兵阻止に向けて、沖縄・本土の大衆闘争の圧力を、間断なく隊内に持ち込むことである。「小西行動委員会＝各地区叛軍行動委員会」の任務は、兵士・武器そのものを拒否する国民平和主義と闘うため、日常的・系統的に自衛隊兵士たちと接触し、兵士の政治的権利（表現・出版・集会・結社の自由、上官の命令に対する拒否権）獲得のための攻勢的宣伝活動と、なによりもまず隊内の叛軍兵士を無条件に防衛する大衆的支援活動を展開することである。軍隊の問題を、机上の軍事論にすりかえ、あるいは、反（アンチ）軍闘争として「違憲論争」の幻想にいまだしがみつく傾向は、はっきりと解体されねばならない。自衛隊内反乱は、厳密に組織された全国的ネットワークのもとに、はなやかな急進主義街頭闘争とはまったく別の次元で準備される。

公害闘争とわが任務

― 企業の労働者管理 ―

企業に対抗する地域住民闘争は、「公害」という名を持つはるか以前から歴史的に闘かわれてきた。ブルジョワ・マスコミの「公害キャンペーン」が日本帝国主義の奇形的経済発展を背後から支える「安全弁」であるとするならば、多くの基地闘争、なかんづく沖縄住民の米軍政に対する恒常的闘争は、すでにこの「安全弁」の限界をはるかに突破している。資本主義的生産それ自体がまきちらす数限りない害毒と対決するためには、まず「安全弁」を破壊しなければならない。それは第一に、労働者の企業意識であり、第二に地域住民の孤立性、閉鎖性である。経営における新しい労働者運動が、労働組合の厚い壁をとりばらい、権力と直接対峙する過程として、現在多くの産業で進行している。これら急進主義的青年労働者は敗北の経験を重ねつつ自己の可能性を一つ一つ発見してゆく。伝統的労働組合主義を克服することで、企業意識からやっと解放されるこれら労働者こそ、持続的・系統的に「公害」と闘いうる唯一の力である。

だが民同支配の貫徹した民間企業では、公労協部門とは異なり、企業意識との闘争はまず民同支配との正面対決として表現されざるをえない。急進的大衆運動に吸引された青年労働者が公害闘争を自身で担うとき、大衆の圧力に押されて公害と取り組まざるをえない民同の企業依存主義が壁としてあらわれ、労働組合活動そのものの政策が根本から問い直される。腐りきった資本主義生産の害毒は、ここで労働者の階級としての再自覚と新鮮な戦闘性のよみがえりを生み出す。さらに、日本独占のアジア侵出は、「公害」の輸出であり、すでにインドネシア等々で日本企業の設立を阻止をかかげた住民闘争が起きている。改良主義の基盤たる企業意識を解体する運動は、日本帝国主義自体の発展に見合った国際的性格をもつ。六七―六九年日本急進主義運動の成果は、アジア・極東規模における闘争の結合として、ここでも労働者運動と合流されなければならない。

「公害と闘かう労働者の運動は、地域住民の企業監視＝住民委員会による地域管理と結びついて、必然的に企業の労働者管理を日程にのぼせる。公害闘争を「社会運動」の単なる一部門として、外部からマスコミ的に注入する水準では、戦後二〇年にわたって形成されてきた土着の企業意識をうちやぶることはできない。長期的にみるとき、真に「公害問題」を解決するのは、革命党の全国的都市革命戦略である。

日本共産主義革命党
日本プロレタリア独裁とわが綱領

1　日本共産主義革命党新綱領のめざすもの

日本共産主義革命党（旧統一社会主義同盟）は一九七〇年十二月に、第九回全国大会を開催した。この大会は、わが党のあらたな綱領と規約を決定すべき大会となった。

わが党は一九六二年五月に結成されて以来、七年間の苦闘を経て、昨一九六九年九月の第八回大会において、それまで同盟の指導部にあった構造改革派との旧同盟内闘争に終止符をうち、高田新書記長を中心として、マルクス・レーニン主義の基本原則に立脚した革命的プロレタリア前衛党へとみずからを高める大きな飛躍をかちとった。そして、それ以来、昨秋の安保政治決戦、今年の六月決戦の試練をつうじて、みずからの党的な力量を大いに前進させてきた。これらの成果を集約するものこそが、第九回大会における党綱領の決定なのである。

いま、本誌編集部からの要請にこたえて、わが党が現在以降とろうとする政治路線をあきらかにするにあたって、まず、綱領とはなにか、それは日本のプロレタリアート・人民が日々にないつつある闘いと、いかなる関連を有するものなのかを、中心的な問題としたい。

現在、わが日本の革命的プロレタリアートと人民は、みずからの革命への戦術、あるいは展望を、「八派」と俗称されるいくつかの政治党派のうちに表現している。だが、これらの党派のいずれをとってみても、いまだ革命の綱領をみずからの掌中にしていないのが現実である。このことが、各党派の相互の関係を、いわば相対的なものにおしとどめ、これらのうちのいずれから、真の革命党を形成していくのかという、一人一人の闘うものにとっての最重要な課題が、あたかも宙に浮いてしまっているかのような観を呈しているのである。ここから、党を選択せず建設しないことを、主義として固定化してしまうような、無党派主義という小ブルジョア的傾向がたえず生起し残存する。党を選択し建設するということを、いずれの色のヘルメットをかぶるのかという表面的な事態においてではなく、いかなる革命への戦術をみずから選びとるのか、すなわちいかなる綱領をみずからのものとするのかという問題として、正しくとらえかえすならば、各党派間の関係を、革命の綱領をめぐって同一地盤で正面からぶつかりあうものへと正していくことが、いま必要とされているのである。

わが党は、すでに一九七〇年三月の第五回全国委員会総会において、日本の革命的左翼全体がおっている固有の歴史的限界を把握し、これを国際階級闘争の歴史的位置における現況としてあきらかにした。すなわち、世界プロレタリア革命の本格的胎動期たる現況にあって、その意識的体現者たる国際反帝潮流は、内に小ブルジョア的傾向とプロレタリア的傾向への分岐を進行させながら、現代ボリシェヴィキ党を結晶させつつある、ということである。

わが党は、ここから六月決戦におけるみずからの任務として、日本における党―統一戦線の革命的飛躍のための闘いの貫徹をみずからに課し、党機関紙「失駆」二〇六号の論文「党―統一戦線の飛躍でプロ独への大道を歩め」にあきらかにした戦術方針をもって、六・一四から六・二三にいたる一週間の激闘の先頭にたったのである。わが党は、この闘いの革命的、大衆的実現の過程と併行して綱領作成のための具体的な作業を開始していったのである。

だが、七・七集会とその後の過程において露呈された革命的左翼総体のうちにある弱点、そしてこれを契機とする小ブルジョア的なイデオロギー状況の流布は、われわれがみずからに課した綱領形成を当面の重要な環とする革命党建設の任務の緊急性を倍化するものであった。いくつかの党派は、「われわれこそが華青闘の告発を正面から受けとめ、これに応えるものだ。」と、したり顔に語りながら、もっぱら「八派政治反対、党派セクト反対」を語り、被抑圧民族人民にたいする、日本プロレタリアート・人民の真の責任をあいまいにせんとした。これらの諸君のはたす役割は、実は、八派的党派関係の限界を語りつつも、これの克服を真の革命党建設に求めるのではなく、党派を解消することに求めようとするものであった。なるほど、病人が死んでしまえば、その症状ももはや存在しなくなるのである。

たしかに、すでに六月決戦の闘われた時期において、八派的政治状況の限界は、闘うすべてのものにとってあきらかであった。七・七集会における華青闘の告発が、かくも大きな影響を全戦線におよぼしたのも、まさにこの故であった。わが党は、旧同盟五全総において提起され六月決戦の戦術として具体化された革命党建設の道を前進することによって、一部の党派の、華青闘の告発をみずからの戦線逃亡のかくれみのとして悪用する傾向と闘ってきた。

わが党は、われわれの目前の課題や運動を闘いのあとから追いかけながら、これに〝戦略的〟な位置づけを付与していくといった水準を、革命的左翼総体がのりこえていかねばならないと考えている。現在の党派間の関係が、こうした水準にとどまるかぎりは、無党派の広汎な大衆（一部の特殊な反党派主義者のことではない）にとって党派間の闘争は外在的なものにとどまり、八派的状況の止揚をのぞむべくもないのである。こうした意味で、現下の階級闘争の限界は、革命的左翼自体の限界であり、これを全面的に克服し革命党を創成していくことは、革命運動における死活の問題となりつつある。

わが党の第九回全国大会は、こうした課題に応えきっていくわれわれの一大跳躍点であった。

2　綱領とはなにか、それは何故必要なのか

以上のべたように、日本共産主義革命党は、明示された綱領にもとづき革命への大道を歩むべく、党綱領の決定を党建設上の主要な環として設定した。本誌が読者の手にわたるころには、九回大会は終了し、採択された党綱領は広く全国の人民の前に提示されているだろう。本稿の読者にはぜひとも一読を要請したいが、ここではその全貌を仔細にわたって述べることはできないので、われわれの綱領作成にあたっての基本的な立ち場をまずあきらかにしたい。

われわれが綱領作成にあたって主要な批判の対象とするのは、つぎの二つの立場である。

第一は、個々の戦線のさまざまな運動論の単なる総和をもって、プロレタリア権力の樹立にむけた明白な一貫した綱領にとって変えようとするものである。これは結局のところ、目前の個々の運動がすべてであって、究極目標は無であるとする党不用論に行きつくものである。だがこうした立場がみずからの限界を自覚し、みずからを全体の革命の戦線に従属する一構成要素たらしめようとするならば、それはわれわれの批判の限りではない。たとえば、労働組合運動の分野において、運動の階級的発展のためにその特殊な運動論の解明に力を注ぐことは大いに必要である。むしろここで問題とすべきなのは、個々の運動への埋没が、いまできることはこれしかない、といった能動的なニヒリズムに結びつき、しかもそれが、さまざまな「思想的」粉飾をもって、革命理論の装いをこらしてあらわれてくる場合である。旧同盟が第八回全国大会の政治、組織報告をもってあきらかにした、日本構造改革派の後期における構造改革戦術の追究という立場は、あきらかにこのような誤りに陥ちいっていた。

われわれは、かつて旧同盟みずからが組織的に体現していた誤りを、第八回、第九回の二回にわたる大会をもって批判的に総括しきることをつうじて、いまみずからの綱領をあきらかにせんとしているのである。ところがいま、この旧構造改革派的な誤りが、いくつかの党派によって粧いをあらたに再現されようとしているのを見る時、われわれはこうした傾向と徹底的に闘うことこそが、みずからの特殊に歴史的な責務であると考えざるをえない。

たとえば、しばらく前に「われわれはみずからを構造改革派として規定したことは一度もない。」などという一片の言辞をもって、みずからの組織的な歴史を、清算というよりむしろ抹消しようとしたある党派は、最近になって、「大言壮語をせず、まずもって一つ一つの闘争にまじめに関わることだ。」などという総括をもって、再度の転身を試みようとする次第なのである。トロツキズムの右翼的側面をもっぱら受けつぎ拡大してきた第四インター系潮流の過渡的綱領論なども、こうした傾向にたえず転落しようとするものである。

われわれは、また、一つ一つのあらゆる闘争を担いきることが、七〇年代の革命党にとって不可欠なことであり、それを可能にする実体的な力量をもたずして、特定の闘争課題に〝戦略的〟な意味をこじつけることをもって党派性とするような、六〇年代革命的左翼のうちにあった傾向を克服しなければ、今後の革命運動の発展はありえないと考えている。だが、われわれの眼前に生起する一つ一つの闘争課題と、究極的な権力奪取とプロレタリア独裁の樹立との間には、けっして自然成長的にのりこえることのできない断絶があるのであり、この断絶に橋をわたすものこそが、党の綱領とそれにもとづく計画として

の戦術の駆使なのである。この綱領を明示することなくして、革命党建設をめざすものが一つ一つの闘争課題に関わるべき道はないとはっきり言わねばならない。

われわれが批判の対象とする第二の立場は、綱領を革命の未来学に置きかえようとするものである。これは、蜂起の暁においてはこれこれの陣形が必要である、ということをもって逆転して現在の任務を規定しようとするものである。

こうした傾向の背後に見ておかねばならないのは、スターリンとトロツキーによってつくり上げられた〝戦略〟というカテゴリーと、それがはらむ思想の誤りである。スターリンは、「戦略は革命の一定の段階にもとづいて、プロレタリアートの主要打撃の方向を決定することであり、これに応じて革命的諸勢力（主要な予備軍と副次的予備軍）の配置計画をつくりあげることであり、革命の一定の段階の全期間をつうじてこの計画を遂行するために闘うことである。」と〝戦略〟を規定した。そして戦術は、単にこの〝戦略〟に従属する部分的なものに、おとしめられてしまうのである。マルクス主義的戦術が、かくも機械的な軍事概念の枠におしこめられてしまうのは、プロレタリアートがア・プリオリに単一の軍隊として確固として存在するものと前提され、プロレタリアートの階級への形成のためのマルクス主義的戦術の役割が、忘却されてしまうからである。スターリンが生みだしたプロレタリアートの革命運動の民主主義運動への従属と、徹底したマヌーバー的性格は、かれの〝戦略〟思想にこそもとづいているのである。

「戦術は戦略に従属する。」というマルクス主義的戦術の軍事概念への歪曲については、トロツキーも同様である。かれの〝戦略・戦術〟とは結局のところ、プロレタリア闘争の予定調和的発展論にいきつく。かれの〝戦略〟は予見に支えられた図式であり、大雑把な予測、展望としては正しいが、実践的にはまったく無力なものである。革命はこう実現されるだろう、という予見からそれに至るべき図式が考案され、ここから現実の闘争を解釈し、現実はこうあるべきだ、という願望的な命題をもってみずからの手足をしばるのが、かれの方法である。

トロツキーのこうした方法から導き出される〝党〟とは、結果的にはその〝戦略〟＝予見をもってプロレタリアートを啓発すべきインテリ集団となる。ここからは、各人の観念的な思わくをもって無数の党が立ちあらわれ、それぞれの予見をもって天上界における闘いがくり返されるのである。党綱領を準備する過程でわれわれが直視せざるをえなかったのは、従来の革命的左翼内部の党派闘争のいかに多くの部分が、綱領をめぐって闘かわされるべき理論闘争を、講壇・論壇マルクス主義者に依存した歪められた「学術論争」に解消してきたか、ということであった。こうした傾向こそが、その対極に綱領をめぐる問題を彼岸視して個別的大衆運動に埋没する傾向を、たえず増幅して生みだしてきた源なのである。

われわれが新党綱領のうちに復権せんとするレーニンの戦術思想は、トロツキーやスターリン流の軍事概念とは大きく異っている。レーニンによれば、「政党の戦術というのは、その党の政治的態度、いいかえればその党の政治活動の性格、方向、方法のことである。」とされる。レーニンの階級闘争の戦術は党の戦術であることによって、唯物弁証法的世界観と史的唯物論の諸前提に厳密に一致させられている。レーニンにおいては、プロレタリアートは、単一の革命軍隊としてア・プリオリに存在するのでもなければ、〝戦略〟をあたえられれ

ば必ず自覚的・自主的に革命へと前進する存在でもない。

かれはまず、諸階級の生存条件、存在様式を、資本主義の本質のうちから発展する特殊な歴史的段階において、また世界と一国との関連と区別のうちにおいてとらえる。たとえば、帝国主義段階における帝国主義労働貴族の発生と下層労働者との分離、プロレタリアートと被抑圧民族人民との結合の条件の成熟、農民の特殊な存在様式の解消という分析のうちに、この方法は具体化されている。つぎにかれは、プロレタリアートの革命的階級としての形成のために、国家権力と諸階級、諸階層の相互関係の領域における実践、全人民的な政治闘争の組織化をつうじて敵権力の攻撃手段と社会生活の特質を、史的唯物論にもとづいて把握させる。さらにかれは、こうしたことの全体をことごとく、プロレタリア独裁権力の樹立にむけたプロレタリアートの能力と組織の形成として集約する。

レーニンのこうした戦術思想は、同時にかれの「環の思想」と結びつけられて、はじめて充分理解することができる。環とは、それをつかむことによって現実を構成している鎖全体をとらえることである。革命にむけた計画の実現過程はトロツキーやスターリン流の〝作戦計画〟ではなく一連の環のつながりであり、当面の環をつかまえるならば、あたらしい次元がひらかれ、つぎの環への移行が要求されるといった具合に進行する。

レーニンは、こうした方法から固定された革命の見とり図として〝戦略〟を導き出すのではなく、綱領とその下に駆使される計画としての戦術を導き出した。このことは当然にも綱領そのものをめぐるかれの立場を特徴づける。かれは、綱領の国民的性格と国際的性格の関連をめぐるブハーリンとの論争のなかで、社会主義綱領の未来図から直接的に革命の戦術をたてることは絶対にできない、と正しくのべている。かれによれば、綱領は革命の未来図を描きだすものでもなく、特効薬の処方箋でもない。綱領における核心的なものは、「商品経済と資本主義の基礎づけ」である綱領の原則的部分であり、当面の原則的・基本的な政策であってかつ革命の発展のための媒介環となるような戦術である。十分に柔軟な戦術の駆使を可能にし、そのなかに一貫した強固な原則をつらぬきうるような綱領、これが日本のプロレタリアート・人民にとっていま必要とされる綱領であり、わが党が完成せんとしている綱領である。

3　七〇年安保への闘いの発展

われわれが、あらたな党綱領を以上のような立場にもとづいて形成しようとする時、その内容は当然にも、七〇年安保闘争におけるみずからの実践とそれが切り拓いたあらたな階級情勢を背景とするものである。七〇年安保闘争は、六七年の砂川、羽田の闘いを転換点に昨秋一〇・一一月の政治決戦へとのぼりつめ、そして今年にはいって、六月決戦の貫徹をつうじて七〇年代プロレタリア権力闘争への前進的な転換を実現した。この闘争の発展過程は、ベトナム革命戦争を巨大なヘゲモンとする世界革命の本格的胎動の開始のうちに、国際主義の赤い糸に導かれて実現されたものである。

七〇年安保闘争を六〇年の闘いと隔てる決定的な契機は、六〇年代後半をつうじてあらわれた反帝国際主義潮流の全世界的な成熟である。日本における階級闘争は、六五年日韓闘争の時期には、帝国主義の対外侵略、あるいは国内反革命、抑圧にたいする個別的な闘いの水準にとどまっていた。日本帝国主義の朝鮮へ向けた侵略・反革命を阻

止するという、日本プロレタリアートのもっとも基本的な国際主義の責務は、この時期にはいまだその力を発現しえずに終っていた。闘いが国際主義の自覚に裏づけられ、自国、すなわち日本の帝国主義政府にたいする闘争へと発展的転換をとげるには、ベトナム革命戦争の偉大な前進からの衝撃をまたねばならなかった。

ベトナム人民の革命闘争は、ドル危機にあえぐアメリカ帝国主義を世界の安定した盟主の地位からたたきおとし、IMF・GATT体制の根底からの動揺を他方に生み出しながら、戦後帝国主義世界の終焉と世界革命闘争の本格的胎動の主要な中心となるに至った。この闘いは、もはや個別的な民族解放闘争として完結しえない全世界的な拡がりをもつものであったが故に、これと連帯する闘争は、不可避的に対権力闘争の色彩をおびるものとなった。このことが、日本における六七年の砂川、羽田以後の階級闘争を、自国帝国主義に対決する闘争、反帝国主義と国際主義という二つの観点を統一した闘争として発展させた根拠であった。

六七年から昨六九年の四・二八闘争にいたるまでの時期は、個別闘争が国際主義的観点から徹底して闘われた時期であった。エンタープライズ寄港阻止佐世保闘争、王子野戦病院撤去闘争、三里塚国際空港建設阻止闘争は、いわゆる「内なるベトナム」へむけられた侵略拠点撃破闘争として、「平和と民主主義」という議会主義的な集約をのりこえて闘われた。これらの闘争のなかからは、反戦青年委員会と戦闘的な学生運動があらたな発展をしめし全国人民との多様な結合をはたすことによって、反帝国際主義を旗じるしとするあらたな闘争主体が生みだされ発展させられていったのであった。

こうした闘いは、昨六九年の四・二八沖縄闘争を転機として、対政府中央実力闘争へと上向していく。ここでは闘いは、六八～六九年の学園闘争に見られたような個別的な闘いが内包する社会変革への指向をつつみこみ、トータルな質をもって、権力をめぐる全人民的闘争の一点へと凝縮すべき課題に直面していった。このような、闘いの対政府政策阻止闘争からトータルな権力をめぐる闘いへの発展の過程は、四・二八にはじまる。しかし、それは単に、四・二八の一回かぎりの闘いで可能だったのではなかった。同年五・三一の愛知訪米阻止闘争をもって、闘いは七〇年安保の政治的完成過程へと正面から向けられていく。日本帝国主義のアジア侵略自体が、路線的には日米間の関係の変更を媒介において、実現されざるをえないということから、この五・三一闘争は決定的な比重をおびるものであった。五・三一から六月アスパック粉砕闘争という流れのなかで、帝国主義政府の対外政策と安保をめぐる日米の政治的な再調整過程への徹底した闘争を媒介として、一〇・一一月決戦は準備されていく。

この過程で旧同盟は、内部における右派との闘いを極限にまでつきつめながら、一貫して闘いの先頭をになってきた。われわれの基本的な視点は、帝国主義政府の総体的な対外政策に実際に対決していく過程を媒介としてのみ、安保に質的に対決できるというものであった。すなわち、安保は、七〇年代における日本帝国主義の総路線を規定する内容をもっているものであって、権力闘争の問題を射程に入れた、帝国主義政府を打倒する方向性を明示する闘争でなければならなかった。したがって、帝国主義政府に対する基本的な対決点となるべきものを構築しなければならなかった。

われわれはこうした視点にもとづいて、七〇年安保闘争を佐藤訪米阻止の一点に限定して安易な道を選ぼうとする中核派の一一月決戦論

と対決し、一〇・二一闘争の爆発を実現した。一〇・二一におけるわれわれの闘いは、中核派の新宿闘争にたいして、七〇年代を権力闘争として照らし出してゆく方向性を明確にして、拠点政治スト・政府中枢制圧闘争として闘われた。一〇・一一月の安保政治決戦は、この一〇・二一の闘いを発火点に、一一・一三、一一・一六～一七の三度にわたって熾烈に闘いぬかれたのである。

4　七〇年代への闘いの飛躍とはなにか

六九年の秋へとのぼりつめた七〇年安保闘争は、国際反帝潮流のあらたな形成と軌を一にする国際主義的な階級主体の登場によって、そのきわだった特徴を鮮明にした。そのことは同時に、日本における階級闘争主体の組織的な未成熟と、エネルギーの拡散状況という限界を、闘うプロレタリアート・人民の前に浮き彫りにした。すでに六九年秋の闘いのなかにあらわれつつあった闘争主体内部の路線的分岐は、その後つぎの二つの方向に集約される偏向を生みだしていった。

第一に、中核派は、大衆のなかの自然発生的な気分に追随する「一一月羽田決戦路線」の必然的な帰結として、その後しだいに路線的手直しを図っていく。

そして第二に、秋の決戦の過程からすでに脱落していた部分は、当然にも、この闘いのなかのもっともすぐれた要素をうけつぎもう一歩飛躍させる方向を見出だしえないままに、組合主義と個別的闘争課題への埋没のなかに、まいもどっていくのである。

わが党はこれにたいしてまず、六九年秋期闘争のかちとった橋頭堡を、つぎの五点にまとめて確認した。

第一に、敵権力の主動性をくじき、安保・沖縄問題を媒介とする帝国主義的な国内イデオロギー統合を、決定的に阻害したこと。

第二に、青年労働者、学生が決定的に既成指導部から離反し、しだいしだいに反帝国際主義の原理のもとへ強固に結集しつつあること。

第三に、日本プロレタリアートのもっとも意識的・先進的部隊による、国際主義的な攻撃的実力闘争を闘いとったこと。

第四に、中間諸潮流の決定的な没落と無展望を帰結し、党派関係のあらたな局面を切りひらいたこと。

第五に、沖縄における闘いの歴史的な転換と、沖縄における反帝国際主義潮流の急速な成長、である。

わが党はこの確認にもとづいて、闘いがみずからの限界をのりこえて発展していく政治路線的、組織的すじ道をあきらかにする作業を、六九年から七〇年への冬の時期における二回の全国委員会総会をもって遂行していった。六九年一二月の第四全総は、まず、秋の決戦の渦中とその総括の時期にあらわれた、街頭闘争に職場闘争を対置し、政治闘争に社会闘争を対置する不毛な論議をはっきりと否定した。秋の決戦の意義と限界をこうした次元で語ることは、純然たる清算主義であり後退でしかなかった。わが党が、秋の決戦のなかで、〝拠点政治スト―政府中枢制圧をもって佐藤帝国主義政府を打倒せよ〟というスローガンをもって闘ったのは、街頭の武装闘争に職場の拠点政治ストを対置するといった、単なる行動形態上の問題に次元を設定した方針ではなかった。

われわれは、それが街頭武装闘争であるにせよ、また拠点政治ストであるにせよ、単なる行動形態をもって、革命的な階級主体が形成されるとは、いささかも考えない。問われている問題は、さまざまの戦線のさまざまな戦術形態が、いかなる一貫した革命への展望のもとに、一個の革命的大衆闘争の流れへとまとめあげられるかということであり、したがって必要とされるのは、そのもとに計画としての戦術を駆使すべき全人民の革命綱領であり、綱領と戦術を運用すべき主体たる革命党である。まさに六九年秋までの闘いをつぎへと飛躍させる環は、政治課題と行動形態を軸とした共同行動の水準から、綱領のもとに単一の党主体を形成し、その一貫した展望にしたがって、あらゆる戦線を包含し多様な戦術形態を駆使して闘かわれる革命的大衆闘争の水準への発展である。わが党はこうした視点にもとづいて、六九年秋以降、とりわけ六月決戦の貫徹にしめされたみずからの政治・組織路線を党綱領にまとめあげる作業をつづけ、と同時に、全階級戦線における活動の場と力量を発展させているのである。

だが、中核派の六九年秋における政治的展望は、同じく〝党〟を語りつつも、われわれとは大きく異ったものであった。六七年から六九年にいたる中核派の路線の主たる軸は、その時々の政治課題のなかでもっとも全人民的な関心が現に集中しているものを、つぎつぎに取り上げ、闘う個々の主体のうちにいだかれている要求や展望の質は問わずに、これにもっとも戦闘的な行動形態をあたえることによって、みずからを「左翼主流派」たらしめようとするものであった。この路線はそれが、行動形態を軸とした運動形成を中心とするものであるがゆえに、「街頭ではなく職場で」という、同次元における右からの反撥を容易に許し、これと低次元なはてしない対立をくり返すという限界を有していた。かつての関西ブントの、平和と民主主義の要求に戦闘的行動形態をあたえて権力闘争へと上向させるという「政治過程論」は、実際には、中核派の六七年～六九年の闘いのなかに現実化されたということができる。だが、中核派には、こうした運動の大衆的実現過程と区別されたところに〝反帝反スタ〟の立場と疎外革命論的人間主義にもとづく〝党〟があった。これが、「政治過程論」の本来の終着点たる赤軍派の方向を中核派がたどらず、六九年秋の闘い以降、行動形態において右へと転身しつつ、もっぱら闘う人民にたいして〝党の立場〟の説教のみを行うようになる変化に道を開くものであった。行動形態における戦闘性をぬきされた中核派の〝党〟は、闘う人民にとってはもっぱら外在的なものであり、〝党〟に大衆運動を対置す

情況

1月号　230円

特集　共同体とナショナリズム

天皇制共同体論■片岡啓治
儀式としてのナショナリズム■梶木　剛
「差別」と「逆差別」■梶村秀樹
民族の神話と現実■玉城　素
復帰運動の終焉■沖縄中部反戦・松島朝義
逆私小説としての三島自決■高知　聡

ジャコバン主義か社会民主主義か・レーニン党批判■レオン・トロツキー

情況出版社

東京都新宿区戸塚町3－160　渡辺ビル
TEL(368)0770　振替東京106464

るような右翼的傾向にたいして、とうていよく闘いうるものではなかった。

秋の決戦の総括の過程では、さまざまな党派やグループ、個人によってさまざまな問題が語られた。すでにのべた「街頭か職場か」のほかにも、「勝利なのか敗北なのか」、「組合運動にどう進出するのか」、「武装をどう発展させるのか」などなど議論は百出した。それぞれの問いかけのもつ限定された固有の意義はおくとしても、それぞれの議論がそれぞれの異った立場から、異った次元において宙を飛びかっていたという事実は、六九年秋の闘いの歴史的な意義の偉大さと対比される闘争主体の分散状況を、端的にしめすものであった。真の全人民的な問題は、より単純であり明白であった。六七年から六九年へいたる闘いの発展は何故可能であったのか。その中につらぬいている一貫したものは何なのか。われわれ日本のプロレタリアート・人民は何をしなければならないのか。そしてそもそも、闘うものは、何をみずからのよりどころとしてみずからの闘いを実践し、総括し、発展させることができるのか。問題は行動形態でも、直面する政治課題への重点のおき方でも、講壇マルクス主義者流の空中論戦や坊主の信心的な〝立ち場〟論でもない。

六七年以来の七〇年安保をめぐる闘いが、ベトナム革命戦争の勝利的な展開を契機とした世界革命の本格的胎動という世界史的な新事態のなかで、その一構成要素として発展していること。帝国主義と全世界のプロレタリアート・被抑圧民族人民との間の死活をかけた激闘の時代がすでにはじまっていること。こうした中で、六〇年代をつうじて発展したスターリニスト共産党とみずからを区別する世界的な新左翼潮流を母体として、現代ボリシェヴィキ党が生み出される主体的・客体的な条件が全く成熟していること。これらこそが、一切の個別的設問に答えるまえに、前提としておさえられるべきものなのである。

5　世界プロレタリア革命の本格的胎動の時代

わが党五全総の決議は、世界プロレタリア革命運動の現局面を、「世界プロレタリア革命の本格的胎動期」として規定した。こうした規定は、けっして単なる客観的な世界資本主義の経済過程の分析から、導き出しうるものではない。

世界革命運動の現局面の特質はいかなるものであるか。まず第一に、戦後帝国主義世界のアメリカを盟主とする相対的安定を支えていた、〝反共・自由世界防衛〟という世界的イデオロギーが崩壊の危機にさらされ、帝国主義者はそれにかわる支配的イデオロギーを生み出すことができない。このことは、ベトナム革命戦争とドル危機のあい乗じあった進行の直接の結果である。帝国主義列強間の侵略・反革命同盟は、その狂暴な姿を全世界人民の前にさらけ出しながら、分裂抗争の激化のなかで、再編へと動いている。そして第二に、ベトナム革命戦争をヘゲモンとする後進国階級闘争は、永続的な拡大のもとに帝国主義国内部の反帝闘争と、一つに融合せんとしている。帝国主義国内部においては、既存の労働組合のブルジョア支配の一機構への変質にたいする労働者の不満が爆発し、下からの自主的闘争組織が群生している。そして、黒人、在日アジア人民、被差別部落民など、支配者の分断、支配政策によってもっとも差別され抑圧されていた層は、独自に闘いを激化させ、プロレタリア革命運動の重要な一翼を担いつつある。

こうして、反帝国際主義潮流が全世界に共通の性格をもって形成さ

れ、その内部にプロレタリア的な翼が成長しつつある。

こうした激動は、帝国主義権力体系の現在の再編成を完全に混乱におとし入れているわけではないが、すでに、ブルジョア国家によって承認された労働組合や議会のルートによっては集約しえない、下からの実力闘争と自主的戦闘組織を広範に群生させている。そして、ベトナム反戦闘争を転機として、反乱を反乱としておわらせることのない意識的要素が全世界に形成され、これが一個の潮流として恒常的に成長している。

かくして現在の時期は、反帝国際主義潮流内にプロレタリア的、党的要素が萌芽的に成長しつつある時期であり、世界プロレタリア革命を担う党の形成期として、主体的に規定されるのである。それはことばを変えていうならば、反帝国際主義の世界的潮流の、「新左翼」から革命的左翼への成長の過程である。六〇年代「新左翼」の特質は、無党派性と戦闘的行動性であり、イデオロギー面においては、〝主体〟の自己変革と一体となった体制にたいする根源的告発への志向である。

日本における六七年以来の闘いのなかにも濃厚にあらわれていたこうした要素は、単に清算し切り捨てられるべきものではなく、総体として内在的に克服されるべきものでこそある。

この内在的克服の過程は、その内部に、激しい相克と党派闘争を必然的に生みだす。権力による徹底した弾圧と抑圧は、運動の「新左翼」的質による自生的発展を不可能とするがゆえに、運動はたえず分裂と一定の混迷とにさらされる。こうしたことは、われわれにとっては必要な生みの苦しみであり、かつて、第二インターの崩壊のなかからコミンテルンをやがて生み出していく、ツィンメルバルド左派の幼さと混迷に照応すべきものである。

その内部における激しい相克は、つぎのような誤れる傾向を一様にはらんでいる。その一は、戦闘的な市民的＝個的運動を反権力闘争の一面においてのみ発展させ、これに軍事上の行動形態を与えていくものである。その二は、大衆的な経済闘争をサンディカリズムへと導き、これにさまざまな行動形態と観念的な解釈をあたえることに、出口を見出そうとする部分である。こうした傾向は、まさに六〇年代「新左翼」的な限界と可能性をもっともよく代表するものであり、大衆の闘争に、無方向なエネルギー一般のみをみて〝目的意識性〟の萌芽を見ることができず、主観主義的、恣意的にエネルギーの方向を操作する路線に陥ったり、自然発生性と党的要素の二段階論、二元論に陥っていることに、その基本的な誤りが存在する。

だがわれわれは、つぎのことを知っている。こうした否定的傾向は、今日の革命的階級闘争の周囲に不可避に生れるものであり、革命運動の広さ・深さを反映するものでこそある。革命運動のにつまりは、同時に全勤労被搾取大衆を内的隷属からときはなち、「生活改良要求の爆発」からアナーキーな反権力・反資本の憎悪の爆発までをふくむ、広汎なエネルギーを解放する。必要なのは、講壇マルクス主義者流の小ざかしい評言ではなく、大衆の全生活にわたる要求の凝縮した噴出を全領域にわたって領導し集約する党の任務を、明確にすることなのである。われわれが、世界プロレタリア革命をになう党の形成の条件の成熟というとき、それは客観的な立場よりする観察にあらずして、みずからの党としての任務の明確化であり、綱領の形成とそのもとにおける戦術の駆使なのである。

6　革命的プロレタリアートの任務

以上のような、われわれの立場から導き出されてきたものが、新党綱領であり、われわれの六月決戦における戦術の貫徹であり、われわれの当面の政治方針である。ここで本来ならば決定された党綱領の全容を紹介するのが、筋道であるが、時間的にも、紙面的にも不可能であるので、それは別に参照していただくとして、われわれがいかなる任務をみずからに課さんとしているかについて、以下残り少ない紙幅の内で可能なかぎり述べてみたい。

①〔沖縄〕

現在における日本革命的プロレタリアートの第一の任務は、帝国主義権力の侵略・反革命の中心環である沖縄の「七二年返還」と、自衛隊の沖縄派兵に真向うから対決する闘いへ、全人民を政治的に動員することである。このことをつうじて、国内に沖縄をめぐる政治的な分裂をおしひろげ、侵略・反革命、とりわけ、四次防と自衛隊の帝国主義軍隊化、入管法再上程と入管体制の再編強化、内乱鎮圧的な弾圧体制の強化に対決する闘争を合流させ、侵略・反革命と対決する広汎な人民の統一戦線へとおしあげることである。

そして、このような闘いと統一戦線の形成の中から、帝国主義政府打倒のスローガンを大胆に内部にもちこみ、革命人民を結集し、革命的左翼の統一戦線を帝国主義打倒のための統一戦線へと高めていくことである。

日本帝国主義国家権力は、その進路をアジアへの侵略、反革命と、その銃後の挙国体制づくりへと集約しようとしている。その中心環こそ、沖縄の七二年返還である。これをもって日本帝国主義は、侵略・反革命に関する日米両帝国主義間の調整の収支決算を行い、韓国との反革命的結合を強化しながら、同時に沖縄にみずからの軍事拠点をうちたて、これを対アジア軍事体系の結び目とすることによって、みずからのアジアへの支配の飛躍をかちとろうとしている。こうした沖縄問題は、日米間矛盾の激化、アジア人民の闘いの進展、朝鮮危機、本土――沖縄人民の闘い、のすべてを孕んでおり、日本帝国主義のアジア侵略・反革命のための、不可欠かつもっとも困難な課題である。

沖縄人民の闘いは、本土における六七年以来のあらたな質をもった闘いの発展とあい応じて、重大な転換を遂げつつあった。日本帝国主義が沖縄をみずからのアジア侵略・反革命のため、アメリカとの共同侵略前線基地としてのみみずからの手に確保しようとする野望が、おおいがたく公然化するにつれて、沖縄現地の闘いのなかにも、決して相容れることのない階級的亀裂が、はっきりと刻みこまれてきた。「本土復帰」にかけられていた沖縄人民の一切の希望が、実は幻想でしかなかったことが明らかになればこそ、全軍労労働者をはじめとした部分は、復帰協の枠組をこえて、比類ない戦闘的エネルギーを噴出させはじめた。

こうして、日米共同声明以降の事態というものは、沖縄闘争の焦点が、「返還」すなわち異民族支配からの脱却にあるのではなく、基地と安保をめぐる問題にこそあることを、ますます明らかにしつつある。沖縄民衆の二五年間の苦闘を勝利に導く途は、本土の反帝派、世界の反帝派とみずからの運命を分ちがたく結びつけた、〝日米共同侵略前線基地化阻止、基地撤去――安保粉砕〟という、国際主義の道以外にはないこと、そしてそのためには、この間急速な反動化を続ける屋良一派の日本民族主義と闘い抜き、あらたな闘争主体を築きあげね

ばならないこと、こうした諸点は、いま沖縄人民の間にしだいにはっきりと形をとりながら意識されていることであり、選びとられつつある途である。

いま沖縄現地では、全沖縄フロントを中心に国政参加選挙粉砕共闘会議が結成され、七二年返還粉砕、自衛隊沖縄派兵阻止へむけた強力な統一戦線が芽生えつつある。フロント沖縄地方委員会は、つぎのような沖縄人民の闘う決意を、われわれのもとに寄せてきている。すなわち、「沖縄・本土人民は、『返還協定』締結阻止！　自衛隊沖縄派兵・駐留阻止！　へむけ隊列を整えよ。万が一、本土人民の闘いが力及ばずして、自衛隊を飛来させようとも、われわれは必ずや、彼らを全沖縄から撃退する決意である。」われわれ本土の人民に課せられた責務を自覚しなければならない。沖縄の闘いに一歩たりともおくれをとるな。

②〔入管闘争〕

七・七集会における華青闘の告発は、六九年～七〇年の闘いのなかにあった日本の革命的左翼内部の、前述したような過渡の混乱を、鋭くえぐり出すものであった。日本帝国主義のアジア侵略・反革命――挙国体制づくりの沖縄とならぶ他方の重大な環こそが、入管法・入管体制の帝国主義的な再編強化である。日本帝国主義国家権力は、外国人一般にたいする統制・抑圧の強化をつうじて日本人民――外国人民の連帯を分断し、国境管理をつうじた同盟国権力との反革命の共同を強め、とくに在日アジア被抑圧民族人民を法的な無権利状態のもとにおき、行政権力の一方的な生殺与奪権の強化をつうじて、かれらに社会的差別にもとづく低賃金と市民社会における劣悪な生活条件を押しつけ、日本人民の間に排外主義的な差別意識を助長しており、これにもとづく迫害を法的に擁護している。

こうして日本人民の間に植民地主義の容認、積極的支持のイデオロギーを定着化し、これを社会的な差別として累積し、さらにこれら全体を法律的にまとめあげるものが、入管法――入管体制である。とりわけ重大なことは、日「韓」法的地位協定、日「華」条約などにもとづく、在日朝鮮人、在日中国人にたいする攻撃である。日本帝国主義国家権力は、外国人一般にたいする統制という形をつうじて、実際に

思想の科学　1月号　200円

特集　思想史としての戦後文学史

文学の戦後・高橋和巳「戦後文学の思想」にふれて……長谷川宏
「荒地」の詩人たち……吉川由紀雄
三島由紀夫のこと……小田　実
坂口安吾論……上野博正
太宰治論――太宰治にとって戦後とは何か……笠原芳光
原民喜論……白鳥邦夫
花田清輝論――花田清輝の戦後……鶴見俊輔
野間宏論……竹内成明
椎名麟三論……新井　清
木下順二論……益田勝実
武田泰淳論――自殺を書かないという姿勢……折原脩三
〈連載〉明治社会主義者の転向……しまね・きよし
朝鮮遺跡の旅 (13)……金　達寿
東京　思想の科学社　飯田橋 4-9-9　千代田

は、前述した一切の在日被抑圧民族にたいする抑圧を特別につよめ、さらに加えて、在日朝鮮人民、中国人民にたいしては、日「韓」台軍事体制にもとづくアジア侵略・反革命の観点から、さらに苛酷な抑圧を加えている。

日本のプロレタリアート・人民の、このような入管攻撃に対決する闘いは、われわれが日本帝国主義の侵略・反革命に直接さらされているアジアの被抑圧民族人民との連帯をかちとる中心的課題である。それは、日本帝国主義と対決する帝国主義国人民と、被抑圧民族人民との統一戦線形成の試金石である。わが党は、七・七集会における華青闘の告発を単に一般的な日本革命的左翼の過渡期における相克と弱体への告発であるのみならず、革命党を建設せんとするわれわれみずからへとむけられたものであるとうけとめ、首都をはじめとする全国において、入管法再上程阻止、入管体制粉砕、在日被抑圧民族人民防衛の闘いを実体的に担ってきた。こうした闘いのなかで、「安保か入管か」、「中央カンパニアが地区闘争」かといった不毛な論議がしだいに克服され、直面する一つ一つの攻撃を断乎としてはねかえすとともに、日本におけるプロレタリア革命運動の党的な発展をかちとるという、日本人民の固有な任務があきらかにされてきたことは、一つの前進である。だが、われわれにとっての入管闘争はいまだ開始されたばかりであり、日本人民のなかから侵略・反革命をささえる排外主義と差別のイデオロギーを一掃するまでの、恒常的な闘争体制を発展させることが、われわれの大きな任務となっているのである。

③〔反軍闘争〕

わが党の反軍闘争をめぐる闘争スローガンは以下のようなものである。

小西裁判闘争勝利！

自衛隊兵士の反軍活動への抑圧を粉砕し、兵士を人民の側に獲得せよ！

兵士の諸権利のための闘いを断乎支持せよ！

軍隊規律の一切の強化を粉砕せよ！

侵略・反革命、内乱鎮圧に反対する兵士と人民の闘う連帯をかちとれ！

自衛隊の帝国主義軍隊化阻止！　自衛隊沖縄派兵阻止！

日帝の侵略・反革命と対決し、帝国主義政府を打倒せよ！

いま反軍闘争と総称されている内容は、ほぼつぎの三つの内容を含んでいる。

第一は、小西裁判闘争とそれを焦点とした〝反自衛隊〟の政治宣伝と工作活動。

第二は、自衛隊の帝国主義軍隊化阻止へむけた闘い。基地撤去闘争や自衛隊のミサイル網配備にたいする闘い。さらには四次防計画を粉砕し、自衛隊の沖縄派兵を阻止する闘争などである。

第三は、自衛隊兵士を人民と革命運動の側に獲得し、そしてまたプロレタリア武装を核として人民の武装を組織していく闘いである。これらは、往々にして混同され、当面の行動方針上の問題と革命の軍事問題とが、同一次元で語られたりしている。これまで、多くは小西裁判闘争への結集とその宣伝の活動にかぎられてきた諸闘争機関が本格的に反軍闘争をすすめようとするなかで、活動方針と綱領的な立場の確立が、ともに欠くべからざるものとして、もとめられてきている。ここでわれわれが注意すべきは、自衛隊の存在そのものにたいする立場は、権力の問題とプロレタリアート・人民の主体的な武装の活動と

の統一において、把握されねばならないということである。反軍闘争の大衆的展開が、そのまま武装の問題に発展しうるのではないと同様に、プロレタリアート・人民の武装の観点から切りはなされた「自衛隊解体」論は誤りである。問題は、権力の問題であり、すぐれて党のもとに結合するプロレタリアートの武装の問題である。反軍闘争をやっていれば、そこから自然と大衆の武装の問題が発展するのではなく、大衆運動としての反軍活動の恒常的展開のなかから、兵士の人民の側への獲得を推進していくことこそ、われわれの主要な任務である。

④〔反戦派労働運動〕

労働組合運動の問題、あるいは地域住民の公害闘争等の諸戦線の闘いをつらぬくべき、われわれの基本的態度は、以下のようなものである。主要な任務は日本帝国主義の侵略・反革命―挙国体制づくりに抗して、全戦線の闘いを強化し労働者と勤労被搾取大衆の実際の非妥協的な闘いを通じて人民の間に政治経験を豊かにさせ、すべての戦線をプロレタリア独裁の拠点につくりかえていくことである。そして、勤労被搾取大衆のすべての組織ばかりでなく、敵権力の行政機構や自衛隊の間においても、党とその同調者を創り出していくことである。

革命的プロレタリアートの現在の局面における基本的闘争組織は、まず第一に権力と諸階級、諸階層相互間の領域の闘いの先頭に立ち、人民の社会生活のすべての局面に介入して闘いを貫徹することを通じてプロレタリアートをすべての勤労被搾取大衆の指導的階級として高めていくための組織、すなわち、党に領導された政治的戦闘組織である。このような組織は、現在、反戦青年委員会としてある。また、学生戦線においても、このような組織として、反帝学生戦線が組織されている。第二に、ストライキ委員会、自主的闘争組織、革命的労働組合などの革命的な大衆諸組織である。第一と第二を総称して、われわれは現在の局面における革命的なプロレタリアートの基本的闘争組織、すなわち革命的大衆闘争を担う組織と規定する。

革命的大衆組織が、現局面における革命的プロレタリアートの基本的闘争組織であるということは、反動的な労働組合、議会あるいは学生自治会などの機関からの撤退を意味するものではない。それどころか、これらの戦線は、ブルジョア的、小ブルジョア的な影響から労働者、被搾取人民を解き放つための死活の戦線である。労働組合や学生自治会は、具体的な闘争を通じて帝国主義の社会再編・国内抑圧―挙国体制づくりと対決し暴露し、帝国主義的労働組合運動やスターリニスト共産党との徹底したイデオロギー闘争を通じて労働者階級を革命的・国際主義的な階級としてつくりかえていくための最も重大な戦場である。このような戦線におけるわれわれの任務は、この戦線を革命的大衆闘争の後方機関、後方貯水地としてつくりかえ、かつこの戦線自体を帝国主義政府を打倒しプロレタリア独裁を闘いとっていく拠点へと変えていくことである。

日本マルクス・レーニン主義者同盟
「革命の七〇年代」を切り拓く毛沢東主義日本革命党建設のために

＜はじめに＞

日本革命派は「六七～七〇年」の激闘の中で日本革命闘争の新しい段階を記した。

そして最も鋭い、革命にとっての重要な問題を自らと人民大衆に提起した。

革命党または「党―軍―統一戦線」の問題がそのひとつであり、権力闘争の問題が他のひとつである。

この点を中心に、総括を中心に七〇年代への展望の基底をここに記す。

革命派あるいは革命派と共にある闘う人民大衆の同志的批判を願うものである。

また、この三～四年間日本マルクスレーニン主義者同盟が、全共闘運動、一〇・二一新宿、東大、日大闘争、「一一月～六月決戦」で指導的役割を果したことは闘う大衆にはあきらかなことなので具体的個別的総括は避け、基本的総括にとどめた。

一、党―軍―統一戦線

わが同盟が「自ら自身の革命」として今展開しつつある整風運動は、一言でいえば「毛沢東党理論・党思想」による同盟・解放戦線の総点検に他ならず、またあるいは「毛沢東党理論・思想」に基づく党建設の開始に他ならない。思想的にいえばＭＬ同盟内に未だ不断に小ブル思想が流れ込んでおり、また残存している。歴史的にはＭＬ同盟の結成過程それ自身は「六〇年代型」のそれであり、毛沢東思想による第一歩からの組織建設ではなかったのであるし、この欠陥の克服がわれわれにとって「七〇年代型党派」への途である。

日本人民の闘争の発展に対しＭＬ同盟が立ち遅れていること（遅れたこと）を主体的に「毛沢東党思想」の実践の不十分性として総括した所に整風運動の出発点があった。

1　「大衆路線の党」

わがＭＬ同盟が目指し、整風運動によってかちとりつつある党は「大衆路線の党」である。大衆路線とは何か？

「大衆こそ真の英雄であり、われわれ自身はしばしばおかしいぐらい幼稚なのである。この点を理解しなければ、初歩的な知識を得ることさえできない」

「大衆の中から集中し、大衆の中へ持ち込み堅持させることによって、正しい指導の意見を形成する。これが基本的な指導方法である」

「マルクス・レーニン主義の理論と思想で武装した中国共産党は、中国人民の間に新しい工作作風をつくり出した。その主要なものは、理論と実践が結びついた作風であり、人民大衆と密接に結びついた作風であり、自己批判の作風である」

レーニンから毛沢東への「党理論」上の発展の主要なものは、われわれは次の点にあると考える。

すなわち、「党と大衆」の関係を確立したことである。より理論的にいえば「人民大衆」が党にとって内的に位置づけられたことであり、「党の認識論」として「大衆路線」が党思想となったことである。

「党と大衆の密接な結合」や「党とプロレタリアートの切っても切れない関係」については多く語られている。だが、党の偏向を正し、党の路線を形成し、党に認識を与える「人民大衆」が「党の認識論」として確定したのは毛沢東思想をもって嚆矢とする。

党は「階級形成」の指導者であり「最高の階級意識」の表現である。「最高の階級意識」は天から降るでも地から湧くものでもなく、「人民大衆」の中の個別的・分散的な、しかしながら帝国主義・ブルジョワ独裁の矛盾を活きた形で引き受けている人民自身の鋭い認識の集中と系統化から来る。そして、このことに基づく「思想」「路線」形成が再度「人民大衆」に持ち込まれることによって運動は確実なものとなるのである。

2　「人民に奉仕する」党

「人民に奉仕する」という問題は難しいことである。およそ多くの「左翼」は、革命のために活動していること、社会主義のために闘っていること、帝国主義権力・ブルジョワ独裁と闘うことをもって「人民へ奉仕」していると考える。

しかし、そうではない。帝国主義権力・ブルジョワ独裁によって最も厳しく抑圧され、帝国主義社会の矛盾を体現するような人々が個別にいる。いや帝国主義権力ブルジョワ独裁の抑圧は均質ではありえず、全ての人民が個別化された帝国主義の矛盾を体現しているといえる。最も抑圧された、帝国主義の矛盾を体現しているような広汎な人民は、もし理論的に問題を認識していなくても、帝国主義に対する最も鋭い問題意識をもっているのである。このことを知らないとすれば、それは人民を知らず、また蔑視しているのだ。

帝国主義の階級政策・政治経済政策と闘う政治闘争において、われわれはその帝国主義の「政策」によって最も厳しく最も直接に被害をうける「人民大衆」を認識の基礎にすえるべきある。そして、この「人民に奉仕する」実践をはっきりと踏まえてはじめて、政治闘争は思想化

しうる。

「人民大衆」は本音や真意をおいそれとは語らない。彼らはブルジョワ政治を信じてはいない。従ってわれわれもまた信用され難いし、最も肝要な「人民大衆」の真意や本音から正しくその問題意識や方向を獲得しえない。

人民に奉仕する作風は具体的でなければならず、具体的であることによって「人民はそのもっている全てを惜しみなく党に与える」のである。

すなわち「人民に奉仕し、大衆を信頼する作風」は倫理的なものではなく「党建設、階級形成」という革命組織論上の核心問題なのである。

3 「思想方法・工作方法」の党

党の中に、いくつかの理論上の対立や政治方針上の対立があらわれるのは不可避である。党はプロレタリア階級の意識の反映でもあるからだ。

しかし、問題はこのような対立も止揚しうるかどうか、止揚しつつ前進する性格を党がもっているかどうかである。

理論問題に審判を下すのは、まず「実践」であり、それによる「人民大衆」の判断である。第二に、「批判・自己批判の作風」である。「党を信じ大衆を信ずる」こととして「党の利益と人民の利益を一致させる」こと、それは、「大衆路線、理論と実践の統一、自己批判の作風」によってはじめて可能となるものなのだ。

われわれは「理論の党」や「政治方針の党」をめざすのではない。いや勿論正しいマルクス・レーニン・毛沢東主義の把握と発展、正しい革命戦略・革命組織戦略に基づく正しい方針について片時も忘れたことはない。しかし、理論・方針は常に不十分であり、常に発展すべきものとしてある。問題はこの「発展の方法」「不十分性の克服の方法」すなわち思想方法・工作方法において一枚岩に打ち固められた党であることであり、言葉を代えていえば「哲学上」「思想上」一致した党をこそめざすのである。

4 党と人民大衆の結合

しかし党と人民は闘争過程でその任務の相違からしばしば離れる。すなわち党は大衆に遅れ、階級闘争に遅れる。

党がそれ自身の運動として人民大衆と結びつく方法は二つである。(他のひとつは前記1〜3である)

それはひとつは整風運動であり、ひとつは統一戦線である。

整風運動は、党内の矛盾の思想次元・思想工作方法の次元における克服であり、マルクス主義を学ぶものであるが、「人民大衆」との関係においては党の思想工作方法の点検をうけ、人民大衆の階級意識によって党の階級性を打ち鍛えることであり、正しい政治路線を党において形成することである。

5 党—軍—統一戦線

「党の軍隊」(ML同盟の場合でいえば解放戦線)は、党の公然部隊を意味する。そしてそれは、思想工作・宣伝工作・組織工作を公然と展開し、その形において人民と不断に接することによって、「人民大衆」の意識を党内に持ち込む。あるいは必要に応じて、武装部隊として不断に人民に奉仕しうる部隊である。このようにしてしか、「人民

の軍隊・党の軍隊」は形成することはできない。

「人民大衆」が「党の認識論」として獲得されていない革命派諸派においては、不可避的に「統一戦線」もまた革命組織戦略として重視されていないように見える。

党派利害を克服しても、守るべき「統一戦線」もまた存在するのである。

「統一戦線」は「帝国主義と人民の個別矛盾」に根ざした人民のため、人民大衆の結集したものである。だから、「統一戦線」を重視し、形成し、防衛発展させるか否かに、その党と「人民大衆」の関係があらわれるのである。

のみならず「統一戦線」はそれ自体が人民大衆の革命戦列への参加、革命秩序への結集を意味し、階級形成を意味し、かつプロレタリア権力への接近を意味する。

権力の問題は組織の問題であり、「党—軍—統一戦線(連合・共闘も含む)」の成熟度こそ帝国主義権力の内的解体=二重権力化を意味し、プロレタリア権力の現在的準備を意味する。

勿論今日の日本階級闘争の発展度からして、単一の統一戦線は望まれず、各種の統一戦線(それぞれ敵味方が異なるかもしれない)の形成から始めねばならず、場合によって統一戦線の萌芽である連合組織や共闘会議から始めねばならないであろう。

しかし、これを大統一戦線へ不断に慎重に発展させていくものこそ、「党—軍」に他ならない。「党の軍」は「人民の軍隊」として敵と闘うだけでなく「統一戦線」を指導し、統一戦線個有の武装実力部隊の建設をもまたその任務としているのである。統一戦線は人民戦争の基礎である。

6 階級闘争の矛盾の最高形態としての党

党は、人民大衆と結びつき、人民大衆の意識を集約し、人民大衆に路線・政策を持ち込む。統一戦線、整風、党員とその作風・方法において人民と不断に結合し、人民を変え自己を変える。

このことは、党が「人民大衆」内部の矛盾を不断に内包することを意味するし、そのようなものとして党は「前衛的役割」と「模範的役

川崎浹 訳・著
牢獄
ロープシン短編集
付/サヴィンコフ=ロープシン論
B・6判上製 六八〇円
エス・エル戦闘団副団長サヴィンコフ=ロープシンが、赤軍捕囚の身となり、自ら命を断つ寸前に獄窓でその一生を託して綴った三篇の作品にユニークな訳者のロープシン論を巻末に付した

ソビエト庶民の姿を紹介
ロシアの河童
大木伸一著 新書判400円

欠落の精神を抉る
アルベレス サン=テグジュペリ
中村三郎訳
4・6判上製 850円

修学院物語
島村民蔵戯曲集
4・6判箱入り1,200円

白馬書房 東京千代田神田神保町2—24

割」を引き受けるのである。

「人民への奉仕の思想」と「革命的英雄主義」が統一される時党の勝利は疑いない。

二、全共闘運動

「プロレタリアートは権力獲得のための闘争において、組織のほかにどんな武器ももたない」（レーニン「一歩前進二歩後退」）

疑いもなく、全共闘運動は「権力」の問題をはじめて具体性をもって、大衆に突きつけた。全共闘運動のこの歴史的意義は不滅のものであると私は考える。

この「権力問題」への接近は、しかしながら単純な理念としての反権力とか革命権力とかではなかった。この点をより一歩深めて考えてみよう。

権力問題の自覚と提起は、二つの方面からやってきた。

第一に、武装実力闘争あるいは大衆実力闘争の中から発した。この点は「一〇・八羽田」闘争以来、佐世保・三里塚・王子そして新宿と革命派によって切り拓かれた武装実力闘争（あるいはその端緒）を継承し、発展させた点にある。この継承の面についていうなら次の通りである。

支配階級の最後の拠り所、国家権力の実体はその組織された武力・＝暴力装置である。

だから、革命の側が「武闘」を不可避の戦術として打ち出した時には、革命の側は意識するとしないとに拘わらず「権力問題」に手を出しているといってよい。

六七年以来の闘争は、戦術としての武闘だけではなく「人民の実力闘争」の思想を革命派から人民大衆の中に広汎に広め、「大衆団交」など初歩的な出発を記していった。のみならず「実力闘争」の思想は革命派に、同時に「戦術としての武闘」から「戦略としての武闘」の認識を生み出していった。

この「人民大衆の武装実力闘争」と「戦略としての武装闘争」を最も鋭く表現し、統一したものが他ならぬ全共闘運動であった。

少なくとも、一九六八年の段階（あるいは六〇年代階級闘争の段階）では、革命派と人民大衆の成熟度からして、闘争としての、あるいは最も現象的ないい方をすれば「街頭闘争」の面における「恒常的＝連続的」武闘は困難であり、人民大衆のこの面における武装化もまたはじまったばかりであり原初的なものにすぎなかった。闘う「人民大衆」の武装として武装の「日常化」という問題は「大学二重権力闘争」と語られた全共闘によってはじめて日本階級闘争に現実のものとして登場し、その形態を獲得したのである。

武闘の戦略としての認識と人民大衆の武装という問題は、敵権力および反革命派との闘争の中で不可避の、必然的なものとなっていった。このことを条件性としつつ、革命派は漸く、主体的には「党―軍」の問題に直面したのである。そして、武闘あるいは武装部隊の形成という問題は、敵との日常不断の闘争を意味すること、日本階級闘争の新段階を意味するものであることを感じとっていた。

第二には、革命の側の権力問題への接近があった。

「権力問題」の認識は「武装実力闘争」と「人民大衆の武装」「武装実力闘争の戦略としての把握」から出発したが、問題はここでは止まりえなかった。

すなわち、敵権力と闘いつつ味方を結集し、武装部隊を形成し人民大衆を武装化する、という現実問題は、敵権力と闘いつつ人民の権力をめざし内包する闘争組織形態の問題を突きつけたのである。

すなわち「プロレタリア独裁」「プロレタリア権力」の問題が、革命派に領導された武装人民大衆の組織形態の問題として登場した。ここで「権力問題」の認識は闘う人民大衆と革命派の主体的問題とならざるを得なかったし、かつなった。

すなわち、全共闘運動が最も萌芽的な形で革命的人民大衆の「大学」独裁によってプロレタリア独裁の途を告げ知らせたものである。

それは革命的諸派の統一戦線と人民大衆の武装化による反革命への独裁として、全共闘は「権力問題」における主体の側の問題を開示した、といってよい。

勿論ある人がいうように「大学占拠―内乱的形態―ソヴェト権力」などという戦術論的あるいは闘争形態論的認識は誤りである。

しかし、全共闘運動は、革命的諸派の「統一戦線」と人民大衆の武装化という二点の現実形態を与え、プロレタリア独裁の原初を開示したことを忘れてはならない。

そして、このことはますます「党の軍」の問題を鋭くつきつけるものであった。すなわち、人民大衆の武装化を指導し、武装せる人民大衆を領導する「党の軍」の恒常化・戦略化を厳しく要請したのである。

「党の軍隊・革命の軍隊」の課題が普遍的な、革命派全体のものとなったのは、全共闘運動の一方の成果である。

これらに至る、現象形態は「ポツダム民主主義」の左からの解体としてあらわれた。ポツダム自治会――ブルジョワ民主主義体制――の解体として、あらゆる小ブルジョワの恐慌を、全共闘運動はまきおこした。それは「戦後日本民主主義」の表現であり産物である、革新の側の諸組織・諸体制の解体を公然と掲げた点で、あらゆる革新の側の人々に歴史的総括を迫った。プロレタリア・人民の側の組織をブルジョワ民主主義の枠の中においたのでは、ブルジョワ民主主義と真に闘うことはできない。

もっとも、われわれは次の点でわれわれの認識の歴史的限界を総括

シナリオ
新春特大号
12月20日発売300ページ　350円
■大特集　現代シナリオ作法
作家日常の内奥にあるものをひき出してみよう。現代もっとも注目される作家の仕事の場から、あなた自身の方法を発見してほしいのだ。
馬場当／白坂依志夫／宮内婦貴子／笠原和夫／加藤泰
■トマトケチャップ皇帝における理論と実際……寺内修司
■実用シナリオ用語辞典■実用シナリオ著作権問答
《テレビ・ドキュメント》
光と風の生涯……構成 熊井啓
《テレビ・ドラマ》
わが父北斎……星川清司
■第九回新人テレビドラマコンクール入選発表
■連載
稲垣史生「時代考証ノート」田山力哉「新・洋画コーナー」岸松雄「日本シナリオ史」
■FADE・IN
デスカッション・シリーズ シナリオとは何か
日本映画直言批評……河原畑寧
■社団法人
シナリオ作家協会
東京都港区赤坂5の4の16
TEL（584）1901

しておくべきである。それは「帝国主義権力・資本家階級の支配の強化がブルジョワ民主主義（日本では戦後民主主義・ポツダム民主主義）を右から解体する」との暗黙の共通認識である。これは一種の「楽天主義」――全共闘運動への楽観を生み出した。一部の人々が「反ファッショ」を戦略化した、などにその典型があるが、多かれ少なかれ「帝国主義権力による民主主義の右からの解体」は共通項となっていた。しかし、われわれは原理的に帝国主義権力、帝国主義段階の資本家階級の国内支配体制が「民主主義」であることを忘れてはならない。それを仮りに「帝国主義的民主主義」といってもよいであろう。権力の「全共闘運動」「武装実力闘争」への狂気のごとき反抗の原因は、権力と革命派が右と左からブルジョワ民主主義解体を競う敵同士であったからではなく、帝国主義権力・資本家階級の支配体制としての民主主義（帝国主義的民主主義）への革命的挑戦であったからなのだ。

「帝大」は右と左から解体を迫られたのではなく、専ら左から、革命派から解体を迫られ、敵は帝国主義的民主主義の防衛に血道をあげたのである。

革命派は、ある意味では「帝国主義権力によるポツダム民主主義の解体」を感じとり、「ポツダム民主主義への幻想の死」を期待していたといってよい。しかし、民主主義（自由主義・議会主義）は帝国主義の基本的支配体制なのである。全共闘運動がその当初の認識において「右からの民主主義解体（帝国主義的再編）」への抵抗をバネとし、闘争の発展過程の中で左からの解体へ飛躍すると考えた点に、大きな限界が存在した。そうではなく、帝国主義的再編はポツダム民主主義を通してやってきたし、くるのである。

人民大衆の武装化・革命派の統一戦線（「党の軍」の生成）の具体化として登場した全共闘運動は、右からのポツダム民主主義解体に対する左からの解体ではない。帝国主義体制としての民主主義の解体であり、帝国主義的民主主義への革命的挑戦であったのである。

帝国主義的民主主義との闘争、ブルジョワ民主主義を超克するものとしてのプロレタリア独裁（人民戦争―二重権力）の意味はここにある。われわれ革命派は、帝国主義的民主主義の重い壁と闘いはじめたのだ。民主主義を乗り超えた原理としての人民戦争・プロレタリア独裁の思想へ近づいたのだ。帝国主義的民主主義との闘争として、全共闘運動が攻撃的性格を確立しえなかった点に思想上の大きな弱点があったといってよい。全共闘運動（第一期すなわち六八～七〇年）は、この意味から十分、攻撃的ではなく、あるいはまた受動的であり、強い恒常性へ至りえなかったのである。支配体制としての民主主義、帝国主義的民主主義への挑戦として革命派は自己を十分に把握していなかったのである。ともすれば、「ポツダム民主主義への帝国主義権力による解体」を条件性としがちである。しかし、それは指導の側の問題であり、全共闘運動を担った人民大衆は遠慮なく「民主主義」を踏み越えていたし、それは「右からポツダム民主主義への解体」を条件性としてさえいなかったのである。

総合経営
肥料品
薬剤
樹脂
樹脂
ウレタン
ミルム
学薬品
成工品
化工品
合成
加工
アルミ
染料
医薬
農薬
住友化学

のみならず、入管・沖縄・叛軍などの諸問題や「十一月決戦」「六月決戦」などは、帝国主義的民主主義民主主義（「の右からの解体」「帝国主義的再編」ではなく）自身の矛盾を容赦なく暴き出しつつあり、帝国主義的民主主義への革命的解体の立場の重要性を具体的に示している。帝国主義的民主主義それ自身が今や人民大衆（在日被抑圧民族・被抑圧人民）によって破産を宣せられつつある。

ポツダム民主主義の階級的性格あるいは帝国主義的民主主義としての把握の欠落は、全共闘運動の発展永続化にとってひとつの弱点を意味している。そのことは、六九年以降の革命派の思想的発展および諸闘争への指導という二点での限界の条件とさえなっている、といってよい。

全共闘運動の今ひとつの思想上の限界は、やはり「権力問題」である。

全共闘運動はたしかに「帝国主義権力」の問題を闘う大衆にあからさまに暴露したし、同時に「プロレタリア権力（人民の独裁）へ至る途」を萌芽的に指し示した。このことは偉大なことである。すなわち東大闘争・日大闘争に代表される戦いは、権力問題をその内実として提起したといわれることは疑問のない真実である。

だが、ここから一部に次のような誤った権力闘争論・革命権力論が発生したのも事実である。

すなわち「個別権力論」がそれであり、「地区（または地域）権力（ソヴェト）」、論、「社会的権力」論等がそれである。

われわれは、本節の冒頭に掲げたレーニンの言葉を深く胆に銘ずべきである。「プロレタリアートは権力獲得のため（プロレタリア権力形成のため、ともいってよい――筆者注）の闘争において、組織のほかにどんな武器もたない」ということである。

革命党と革命的人民大衆にとって自らの権力問題とは、組織問題に他ならず、すなわち「党―軍―統一戦線」に他ならない。いかなる闘争も、闘争形態もそれ自体はプロレタリア権力（人民の権力）と短絡させることはできず、プロレタリア権力（人民権力と人民秩序）は「党―軍―統一戦線」に内包されるのである。

各種の帝国主義との闘争そして統一戦線は革命党が主導的に選択し形成しうるものである。だが、「権力問題」はそうではない。帝国主義権力・資本家階級との全ゆる闘争の中で「党―軍―統一戦線」を発展させ強化する中でしか、実体としての権力問題は語りえないのである。

全共闘運動が「権力問題」を提起した道すじは何であったか？

それは、ひとつは「帝国主義的民主主義への革命的解体」という歴史的役割であり、「革命派の統一戦線・人民大衆の武装による独裁」という現実形態であった。そうであるが故にはじめて「権力問題」を現実問題として提起しえたのである。

だがここでひとつの錯覚が革命的諸派に拡まった。全共闘運動それ自体を個別権力として把握し、権力の局面的または部分的実現と考えた誤謬がそれである。このような誤った認識は六九～七〇年の現実においてはすでに打ち破られているけれども、古い認識それ自身は「もはや存在していない」とはいえない。

全共闘運動以来、「個別権力闘争」、「革命権力の個別的現実化」の空論は闘争形態論への傾斜を強めつつ残っている（「地域マッセンスト論」などに典型がある）が、その前提は他ならぬ「全共闘＝個別権力論」なのである。

「党―軍―統一戦線（更には連合戦線・共闘組織）」の組織的発展が、すなわち「権力問題」なかんずく革命権力論の中心問題であり、成熟度を示すのである。だから、個別闘争（ある意味では全ての「大衆闘争」は個別闘争である）が権力闘争に転化する過程とは、「党―軍―統一戦線」という革命秩序の中に確定してゆく過程でなければならない。

だから全共闘運動が「権力問題」としての位置をもつということは、主として「党―軍―統一戦線」での「統一戦線の形成」の問題として把え返されねばならなかったのである。ここに全共闘運動をめぐる認識上の限界の第二の点がある。

とすれば、全共闘運動は帝国主義といかなる関係において自己を定立しうるか？

「革命的人民大衆の統一戦線」という組織戦略上の定立を第一とすれば、帝国主義民主主義秩序の革命的解体という政治戦略上の定立が第二である。

前述した如く、帝国主義的民主主義（帝国主義の政治的支配体制の基本部分としての民主主義）との闘争は、今や全人民の主要課題である。そしてこの帝国主義的民主主義の現実形態は、地域・機構・組織など帝国主義秩序として存在している。

帝国主義的民主主義との闘争は、本質的には帝国主義権力打倒・プロレタリア権力の樹立に他ならない。しかし、現実的には「党―軍―統一戦線」の成熟を本質的に踏えつつ、帝国主義秩序の解体・民主主義の大衆的止揚過程としてあらわれるのである。

全共闘運動は、政治的には帝国主義秩序との闘いであり、その革命的解体の闘いであり、より性格には帝国主義個別秩序解体の闘いであった。帝国主義個別秩序との闘いであったが故に（帝国主義的民主主義の現実との闘いであったが故に）こそ、帝国主義権力の問題を提起せざるを得なかったし、しえたのである。が同時に、帝国主義個別秩序解体の闘争であったが故に、帝国主義権力との闘争においては限界をもっていた。それは、すでに「十一月・六月決戦」における全国全共闘の限界として表現されているものである。

すなわち、帝国主義個別秩序解体の闘争は、帝国主義秩序総体（帝国主義権力といってよい）にまで組織上、思想上至りえなかったのである。この歴史的限界性は、消極的な形ではあるが全共闘運動が組織的には分散化しつつも、全共闘運動の戦士が入管・公害・市民運動・沖縄・叛軍など帝国主義個別秩序民主主義への新たな挑戦へ推転したことによって証明されている。

全共闘運動が再構築され全共闘運動第二期が再生される思想上の前提は全共闘運動を「党―軍―統一戦線」という革命組織戦略にはっきりと組織上の位置づけをもつと同時に、思想上は帝国主義個別秩序解体諸闘争を内包し、帝国主義秩序総体の解体（帝国主義的民主主義との闘争）という視点を獲得せねばならぬであろう。大学全共闘運動は、かく再建されるべきであり、かく再建されてはじめて日本階級闘争の推進軸にとしてその位置を奪還できるであろう。「安保粉砕の砦」論とか「教育共闘機関」とかの矮小極まる認識や「地区権力論」（地区・地域闘争論または地域統一戦線論ではなく）などの全共闘否定論は、このような全共闘再建の実践によってのみ克服できるのである。

全共闘運動が人民大衆に与えた影響は巨大であり、大衆運動に与えた影響も深甚である。

それは第一に帝国主義的民主主義（帝国主義秩序）を現実性・具体性において徹底的に曝き出したことである。

このことは、今や更に発展した形をもって階級闘争の認識にあらわれた。すなわち、帝国主義権力・資本家階級独裁との全ての闘いを、人間的現実性・人民的具体性において認識しつつ、その政治・政策と闘うという方法がそれである。いかなる帝国主義権力の政策（政治経済政策だけでなく、階級政策も含む）人民大衆に同じように搾取・収奪・抑圧ととて平均的にあらわれることはない。帝国主義・資本家階級支配の矛盾を強く受け体現する部分が必ずあるのであり、この部分こそ認識の中心となり、歴史的には闘いの中心とならねばならない。

帝国主義・資本家独裁の矛盾を具体性個別性において把え、人民大衆の現実性として認識することを基礎として、はじめて帝国主義権力ブルジョワ独裁との政治闘争は、思想的なものとなり、恒常性・永続性を獲得しうる。のみならず、政治闘争の方向の正しい認識の基準が得られるとさえいえる。

第二に、思想問題の生きた提起と克服が端緒的に行なわれたことである。革命闘争は、単なる「政治力学」ではなく、人民大衆が覚醒し、自己のブルジョワ的小ブルジョワ的思想の克服過程でもあり、一言でいえば「プロレタリア文化・思想革命」を内包したものである。

それは勿論「プロレタリア階級独裁の条件のもとでの不断・永続革命としてのプロレタリア文化大革命」とは質の全く異なるものであるが、にもかかわらず、プロレタリア革命闘争（帝国主義打倒・プロレタリア独裁樹立をめざす）の渦中・過程において、広汎な人民大衆は「党―軍―統一戦線」へ組織的に結集するというだけでなく、帝国主義民主主義の母班を拭い去り、ブルジョワ諸思想を自己の内で粉砕してということもまた広汎に行なわれるものである。

俗に「自己否定」運動といわれる側面は全共闘運動の消極面ではなく積極面の一部なのである。この積極面を革命的党派が不十分にしか指導しえなかったこと、この積極面の一部を全共闘運動の主要なものとする偏向があったことにこそ問題はあったのだ。

全共闘運動が、その存在地点において「活きた思想」の「活きた革命」を現実化したことは日本階級闘争史上重要な発展である。

世界の三菱
三菱の世界
三菱グループ
三菱化工機
三菱セメント
三菱製紙
三菱金属鉱業
三菱樹脂
三菱化成工業
三菱油化

それは、「ベトナム反戦」が外在化し客観化した「平和運動」と袂別をし日本人民としての存在の具体性をベトナム人民の闘争との具体的連関において把えた地点から大衆的には推進されたことの発展であった。

具体性・現実性において帝国主義の矛盾を認識し、政治闘争の基軸とすることは同時に闘争に結集する人民大衆が日毎に思想的に前進する、「活きた思想」を革命することをも意味するのであり、この思想の上にこそ理論や路線は強固なものとなるであろう。

全共闘運動の第三の成果は、闘争の「日常性」「恒常性」（永続性）の提起である。

今日の日本階級闘争の段階においては、革命闘争はそれ自体としての現象形態としては、日常的ではなく、それは組織形態として日常的であるにとどまっている。このことは、「党活動の恒常性」と「大衆闘争の臨時性」の矛盾として日本階級闘争の歴史的矛盾限界として存在していた。しかし、全共闘運動は、「大衆闘争の恒常性」の獲得を闘争形態・闘争組織形態において具現した。このことによって「恒常的党活動」は一層厳格な組織活動と体制を要請されたといってよい。

大衆運動においては、闘争の恒常性および恒常性を保証する組織形成が、思想的発展の最重要の要件である。そして、この恒常性・永続性・の基礎は政治闘争の課題が具体性・現実性における認識に支えられることなのである。

三、政治路線上の問題点

紙数の関係で各闘争の相関と各闘争課題における根本問題を提起するにとどまるということを、まずもってはっきりさせておきたい。詳細は日本マルクスレーニン主義者同盟機関紙「赤光」、同機関誌「マルクスレーニン主義」、各単位解放戦線機関紙誌、および「日本・アジア革命論」（レボルシオン社刊）等の諸論文を参照してもらわねばならない。

1　沖縄解放闘争

「日帝の沖縄併合（沖縄処分）は、沖縄人民に対して『攻撃』であるようには日本の労働者階級（被抑圧人民）にとっては『攻撃』ではない」と、いわれる。

ここにわれわれは討論の端緒をつかんでゆこう。第一に、「日帝の沖縄併合」ではあるが「日米帝の沖縄処分」であることをわれわれは寸時も忘れるべきではない。

日米帝国主義同盟（そこに矛盾がないわけではないがそれは主要な矛盾ではない）の形成によるアジア反革命支配が敵の方向であり、この点の認識がなければ沖縄闘争において反日帝主義的一面性におち込む。

すなわち、ひとつは今現在も沖縄人民は米帝の抑圧と差別支配の下にあり、その支配と蛮行と闘っていることを忘れてはならない。

新しい事業に挑戦する！
プラスチック
化学紙
住宅
建材
新合繊
"コーデラン"
発酵
医薬
パルプ
レーヨン
機械
興人
旧社名・興国人絹パルプ

のみならず、「沖縄」は日帝に併合されるだけではなく、現在米帝のアジア反革命支配の枢要の拠点であり、この性格がむしろ強化される形で「日米帝沖縄処分」を行なわんと策している。

「日帝併合論」的一面性は、この文章ではたしかに、日本本土人民と沖縄人民の「帝国主義沖縄処分」における位置と認識の相違性は指摘しているが、アジア人民にとって「日米帝沖縄処分」とは何かを完全に忘れ去っているのである。こういう一面性こそ「排外主義」の見本ではなかろうか？

われわれは率直に革命派の沖縄闘争論の欠落を今こそ白日に曝すべきであり、その欠落のひとつが、「米帝との闘争」に関する全き無自覚に他ならない。米帝との闘いはしかも単に沖縄闘争における欠落であるだけでなく政治闘争路線全般に亘る欠落なのである。

「米帝国主義に対する日本人民の闘争が、日本帝国主義の国家主義・民族排外主義を助長するのではないか」「日本資本主義は帝国主義化しており、従って反日帝闘争が主であり反米帝闘争は不要ではないか」「帝国主義的自立をとげた資本主義国の人民が他の帝国主義との闘争を行なうことは原則的に誤りであり『自国帝国主義打倒』こそ全てではなかろうか」などという観念的・教条主義的気分が、革命派の多くの部分を支配している。

しかし、日米帝国主義同盟によるアジア反革命支配の構築という現局面、日米帝国主義同盟化による日帝確立という現局面、米帝の軍事的主導と日帝の政治経済的介入というアジア反革命支配の再編の局面などを冷静にみるなら「反米帝闘争」への拒否や消極性は実践的には反動的でさえある。まして沖縄についていえば「本土」の米軍基地の縮小が沖縄米軍基地の機能強化集中を呼び起こすという一事をみてもあきらかである。

また、アジア人民（被抑圧民族）は、日本帝国主義の歴史的存在を根底から揺がす、日本人民（日本革命）の友人である。アジア人民と連帯することは日本革命の絶対的な要求である。このわが友人であるアジア人民は今米帝と死活の闘争を勝利的に闘っており、この人民の利益になることはすなわち歴史的にみて日本人民の利益に他ならない。反米帝闘争の日本における実践なくして「アジア人民との連帯」

全共社刊
全共闘機関紙
合同縮刷版
熾烈な闘いの連続の中で学生は何を訴えるか
全国全共闘運動の理論的機関紙を全べて集録
好評発売中！　菊倍判上製／¥2000
獄中記
話題のベストセラー・四万部突破！
秋田明大著　B6判上製／¥490
あの六八・六九年における熾烈な闘いの連続の中で、全共闘運動の機関紙は今日的闘いの現像を、第三者的物語りとしてではなくて、まさに生きた実像として提出してくれている。また本書は七〇年代階級闘争におけるあらゆる運動の方針を測定してくれるであろうことは、決して疑い得ない事実として、受け取らねばならない
東京都千代田区神田神保町1—40五十嵐ビル2階3
TEL（294）6493

を語るなどは、問題外といわねばならない。

日本革命闘争の政治スローガンは次の通りでなければならない。

「日米帝国主義同盟粉砕・日帝打倒・アジア革命勝利！」

「日米帝国主義同盟を粉砕するアジア国際統一戦線を構築せよ！」

である。

さて、前記の文章はしかしながら、沖縄人民と日本本土人民の闘争・組織戦術の相異性について認識しているという点においては正しい面をもっている。

だが問題はこの相異性の認識にかかっている。

革共同中核派は沖縄問題の本質を「分断支配」または「軍事的分離支配」として把えている。そしてその「本質的問題」として、①日米帝国主義戦争の結果としての既成事実、②日本の支配階級がかかる米軍による排他的沖縄軍事支配をくつがえそうとしなかったことが今日の沖縄の状況の維持固定化する積極的物質力として作用した、③米帝の極東軍事戦略体制の要石としての機能発揮可能、④日本による米帝への沖縄移譲が日米同盟の形成と存続の物質的前提、⑤「沖縄軍事構基地化」「サ条約による施政権の移譲」に基づく政治的無権利、経済造の破壊・民族的差別・本土との分断、と五点をかかげている。しかし、五点は日米帝国主義と沖縄人民の現実的矛盾の指摘でありそれ自体は革命派共通の認識であり「本質的問題」などと称するのは言葉にすぎない。それは具体的問題なのである。

従って革共同中核派にとって沖縄問題の「本質」とは「分断支配」「軍事的分離支配」（この二つの規定はかなり異質なのであるがそれはここでは措こう）であると彼らは考えているようである。

こういう「本質認識」の基礎の上でこそたしかに「奪還」「復帰＝返還」路線が提出されるのであり、その後は「奪還闘争の反帝闘争としての性格」なるものの押しつけに至るにすぎない。すなわち、沖縄闘争論にとってはやはり「分断」が彼らの出発点なのである。

この点は革共同革マル派においても同様である。

一方の極には次のような主張がある。

「日本の一部でありつつ同時にブルジョワ日本国家と対等の全権利を主張する無際限の沖縄労農自治権、つまり急進的沖縄労農自治＝自決権にその論理的帰着を見出さざるを得ない。……それは日本内部における公然たる二重権力の要求である。……現段階に至るまで沖縄労農人民の反帝国主義闘争は沖縄労農自治＝自決権の民族上の路線にしたがって発展しており、少なくとも来るべき一時期においてもこの民族上の路線にしたがって前進する」これは第四インターの人々の見解である。のみならず、「沖縄異民族」説は多く存在しており「沖縄解放」派の支柱ともなっている。

あるいは「沖縄」を戦前戦後を通して「軍事植民地」として認識する人々は、沖縄の異民族論に傾斜しており、あるいはせざるを得ないとみうけられる。

つまり要約すると「沖縄人民は日本民族の一部である」とする人々は不可避的に「復帰・返還・奪還」路線を掲げており、沖縄民族（従って日本民族と区別される）説を唱える人々は「沖縄解放」を沖縄自治・独立として掲げている。ということになる。

この二つの見解は、一見全く対立しているように見える。絶対相容れないようである。その実践においては然りであろう。だが、思想の上で、革命思想・理論の上ではどうであろうか？

はっきりしていることは、「帝国主義と被抑圧民族の矛盾」を共に承認するであろうことである。そして、沖縄に関する「民族論」が戦略上の対立を生んでいるということである。

すなわち、「民族自決論」として、この双方は、「沖縄民族学」上対立はしていても共通の革命論に立っていることにわれわれは鋭い注目をはらいたいのである。「一民族＝一国家」前提論である。

「沖縄人民が日本民族の一部であるか否か」という問題が、革命派の戦略を決めているのであるが、それは革命論の上では「民族自決論」で共通である。民族的自然発生性の期待も共通である。

すなわち、レーニンは「社会民主党の綱領のなかで中心的となるのは、まさに諸民族を抑圧民族と被抑圧民族に分けることでなければならない」と述べ「被抑圧民族の解放闘争は世界プロレタリア革命の一部分である」と提起した。「後進」的な、植民地支配下の民族解放闘争は、そして疑いもなく帝国主義世界体制を根底からゆるがしたのである。

しかし、レーニンは帝国主義支配・植民地支配という反動に対して民族解放・民族自決が革命的であり進歩的であるが故にこの点を革命論としてあきらかにしたのである。

すなわち被抑圧民族の自決・独立・解放は革命的であり進歩的である。このことは不朽の真理である。従って「被抑圧民族における一民族一国家」の要求は全く正しいものである。

この点をふまえつつ「抑圧民族」（帝国主義民族）については、被抑圧民族への圧迫、統合・植民地支配の面から主として見ている。

しかし、筆者はこれは「帝国主義と民族」について全てを語りつくしているとは思えないのである。帝国主義支配下の帝国主義抑圧民族、つまり「帝国主義とその民族の間の矛盾」については全く分析されていないのである。

日本帝国主義の歴史は次のことを示唆してはいないだろうか。

すなわち、帝国主義支配の利益のためには自らの民族の一部を異民族化し、植民地化し、分離することまで、帝国主義権力・資本家階級は行なうということを。

すなわち、帝国主義は他民族を破壊統合するという意味で「反民族

アメリカの挫折

インドシナへの軍事介入とその限界

タウンゼンド・フープス
丸山静雄訳　￥880

これは、元空軍次官であった著者がハト派の仲間と協力し、大統領を北爆停止に追い込んでいく劇的な、しかも高度に政治的なプロセスに綿密な分析をほどこした回想録である。当事者によって戦争遂行のメカニズムがこれほど明らかにされたことはかつてなく、その意味でも現代政治学の最もすぐれた生きた教科書といえよう。

本年度ジョージ・ポーク賞受賞

ソンミ

ミライ第四地区における虐殺とその波紋

セイムア・ハーシュ
小田実訳　￥580

犠牲者たち

ベトナム192高地虐殺事件

ダニエル・ラング
内山敏訳　￥320

草思社
東京都渋谷区神宮前4－24－10
TEL(402)9505振替東京23552

的」であるだけでなく、自民族の部分的解体をも局面によっては行なう「反民族的」性格をもつのではないか、と思うのである。日本帝国主義はこの二重の意味で反民族的である。帝国主義国家の「棄民」政策は、敗戦の日帝が「中・朝在日本人」に対してとった政策でもあった。帝国主義の利益のためには「棄民」も辞さず、民族の部分的解体も辞さない所に帝国主義・ブルジョワ独裁の救い難い「反動性」があるのではなかろうか。

やや冗長となってしまったけれども、沖縄闘争の思想の中で、「民族自決」あるいは「一民族一国家」論はその限界を迎えているのだ。沖縄人民は、日本民族の一部であるにもかかわらず、異民族化を一方で強制され、日帝の植民地化を強制され、他方で異族性の強調（差別）を前提としつつ天皇制への強権的統一にさらされたのである。日本帝国主義は戦前戦後共に「日本民族の分断」によって「帝国主義支配を強化維持」してきた。日本帝国主義は日本民族の分断を行なったのである。

沖縄闘争を闘う認識の問題として、われわれは「民族自決論」の枠を一歩でなければならない。「被抑圧民族の自決＝一民族一国家」を支持するだけでなく、帝国主義抑圧民族の解体を志向せねばならない。問題はこの点にある。「民族自決」の思想は「一民族一国家」の思想に連なり易いものであるが、「一民族一国家」が正しいのはそれが進歩的革命的である場合に限られる。

「一民族多国家」あるいは「一民族多権力」の思想は、その国家が反動的であり、その民族が抑圧民族である場合は進歩的革命的なのではなかろうか。「抑圧民族解体・一民族多国家」の思想が沖縄闘争の基礎にならなければならない。

「一民族一国家思想」「被抑圧民族＝自決権」の思想では、沖縄闘争は闘えず、沖縄解放闘争を最後まで闘うことはできない。

沖縄解放闘争は、反日米帝国主義の闘争であり、権力闘争である。帝国主義抑圧民族解体の闘いであり、日本帝国主義権力を拒否し、プロレタリア人民の権力をめざす「国家解体」の闘いであり、日本民族を反動的国家と革命的国家に解体する闘いである。それは単に沖縄と本土という地理上のものとしてでなく、沖縄を頂点とする革命的人民権力と本土を頂点とする帝国主義的権力との闘争である。

本土の階級闘争が六八～七〇年において「党―軍―統一戦線」という「プロレタリア権力秩序・二重権力」への志向を明らかにした。この闘争の発展と沖縄における反日米帝人民権力への前進の統一こそ日本革命権力への第一歩といえるだろう。

すなわち、沖縄人民が日本民族か否かという所から発する戦略はいずれにせよ、不十分である。日本帝国主義は自国民族を「異族」化し植民地化してまで、民族分断をしてまでその反動的利益・支配を守ろうとしていたのであり、このような日本帝国主義権力から分離し、自らの権力を創造する権利を日本人民は等しくもっているのである。

日本で生まれ
世界で育った
三井物産
本店 東京都港区西新橋1丁目2番9号

沖縄闘争の認識の出発点は、何よりも沖縄人民であり、本土在住沖縄人民である。第二に、米帝と闘うアジア人民である。そして第三に日本帝国主義権力と闘い、革命の権力をめざし「党―軍―統一戦線」において二重権力＝プロレタリア権力をめざす本土人民である。そしてその共通の敵は日米帝国主義である。

われわれML同盟は、この思想において沖縄解放闘争を徹底的に闘いぬくであろうし、「富村順一氏支援」をもかかる闘争の内容の一部として徹底的に闘うものである。沖縄解放闘争論は、すなわち帝国主義抑圧民族としての日本民族解体の闘いであり、日帝権力に対する人民権力の創出の闘いであり、日本民族を帝国主義権力（秩序）と革命的権力（秩序）に解体する闘いなのである。

2 入管闘争

入管闘争については「赤光」紙上で多く語られているのであって、簡単にしたい。

われわれの第一の観点は「在日被抑圧民族無条件防衛」の立場であり、この点にはいささかの動揺もありえない。

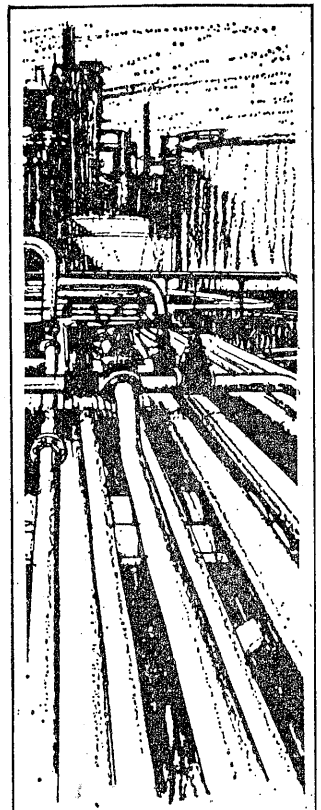
第二に、「被抑圧民族との連帯」の立場であり、これは全アジア諸被抑圧民族の利益となることについては躊躇なく支援し闘うことを意味する。

第三に、入管闘争の基本形態である地区実運動を全面的に支援し参加し、地区実を地域統一戦線の重要な柱とする組織的展望である。

第四に、入管闘争あるいは「在日被抑圧民族防衛」・「アジア被抑圧民族連帯」は恒常的運動であると同時に永続的な運動であるとの立場である。

第五に、被抑圧民族、在日被抑圧民族は、その抑圧の中で革命を切り拓いた偉大な民族であり、革命の先進民族であるとの認識に則って、革命の後進民族として彼らから学びつつ闘う者としての立場を堅持するものである。

第六に、権力闘争の不断の推進によって、帝国主義抑圧民族としての日本民族および日本帝国主義国家解体を日本革命派の実践的任務として自覚し闘うものである。


明日の
力をはこぶ
エネルギー。これを送るパイプ製品、当社では、巾広い鋼製品の一環として、あらゆるパイプ製品を送り出しております。
NKK
製鉄／造船／プラント
日本鋼管
東京・大手町 TEL 代表(212)7111

第七に、在日被抑圧民族との連帯を、在日被抑圧民族労働者の利益を守り、その居住を防衛し一層推し進めんとする立場である。

第八に、日本革命の不可欠の友人として被抑圧民族（在日被抑圧民族を中心として）との連帯を徹底的に重視し、「人民に奉仕する立場」を貫徹しつつ、日本帝国主義との闘争においては彼らの完全な自決に同意し、日本革命闘争の諸局面における日本人民と日本帝国主義の闘争を日本革命派の自力更生によってなしとげんとする立場である。

日・中・朝・インドシナ人民の連帯こそ、われわれアジア全体の革命化の絶対条件と考えていることを述べておかねばならない。

3　叛軍闘争について

小西誠三曹の「叛軍闘争」の開始は、日本革命の黎明を告げるものであった。それは、敵武装力の解体・麻痺の闘争と日本階級闘争による「人民の軍隊」創出の闘争との歴史的接点であり、一言でいえば帝国主義権力に対する「人民戦争」を告げしらせたのである。

しかし小西誠三曹を頂点とする敵武装力内での闘いは、従来の日米帝国主義軍事体制に対する諸闘争（反軍闘争）の今一歩の高みで統一する契機をつくり出し、かつまた「反米軍」「反基地」「反軍事生産・輸送」などの闘いを再生させ結集する基軸を作り出したものと考えている。日米帝国主義同盟の軍事体制との闘争は広汎でありおそらくわれわれの認識しえていないものまであるに相違ない。

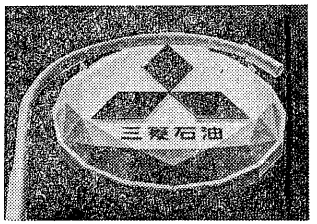
敵武装力＝日米帝国主義同盟の軍事体制との闘いは広範であり、かつまた国際主義的任務である。のみならず、それは人民大衆に「人民と武装」の問題をも提起している。「人民解放軍」の思想が大衆の中に広まりつつある。

われわれは、人民の軍隊は、人民の中から、闘いの中から主として創出されるものであり、敵武装力の解体から主として創出されるものではないという人民戦争の立場を断固守っている。しかし、敵武装力敵部隊の解体獲得は、人民の軍隊（あるいはその萌芽たる闘う人民大衆）の主要任務のひとつである。ことを同時に自覚するものである。

叛軍闘争は未だはじまったばかりであり、敵軍事力の存在する所、全ゆる単位に叛軍闘争の組織が大衆的に打ち樹てられねばならない。この面においてわが同盟は十分成果をあげておらず、集中的な組織工作が要求されている。新潟・三重のわが同志の先進的闘争と教訓を全同盟のものとし実現することは火急の任務である。

4　労働運動

反戦派労働運動の一時的停滞が存在している。この根拠は奈辺にあるかについて先ず問題点を指摘しておこう。反戦派労働者は、何よりも労働者大衆の政治闘争組織・政治的結集体として登場した。勿論多くの弱点（歴史的に不可避な思想上・組織上の欠点）はあったが、革命派あるいは革命的諸派の統一戦線が領導する労働者大衆の政治闘争組織として「反戦派」は形成されたのである。



マークが品質を保証する。

三菱石油

日本労働者階級内の統一戦線・階級形成において、政治闘争は際立った重要性をもっていることをわれわれはっきりと確認せねばならない。この基本的出発点を忘れては、「反戦派」は不可避に危機に陥いるのである。すなわち「革命派統一戦線」と「労働者政治闘争機関」の性格を忘れるならそれは、「反戦派」の危機を招来し、日本階級闘争の現実からの遊離を意味する。

従って、山積する政治闘争の課題（ベトナム―インドシナ―、沖縄、基地、等々）に対し、初歩的であろうと労働者政治闘争を再開せねばならない。「反戦派」の「労働組合運動への配置」とか「労働組合論構築」は、反戦派の主要な任務ではありえない。

あるいは「反戦派」の党派系列分断もまた、反戦派の解体を強制するものである。（党の軍は、党独自で創出すべきだし、「反戦」で代替すべきではない）あるいは「党―軍―統一戦線」の「統一戦線」として反戦を、直接「権力問題」への組織とせんとするのもまた観念論であるし、空論である。

反戦派労働運動が切り拓いた地平は「革命派（またはその統一戦線）によって指導される労働者政治運動の創出」という地平であり、このこと自身をわれわれは今一歩押し進めねばならないと考える。

反戦派運動の低迷を、われわれは反戦青年委の再建・構築を通して打破せんとするものである。

反戦派労働運動の先進的部分は、革命的労働争議をその中に内包してきた。東京書院闘争やNET・NTV全労闘運動がそれである。

革命的労働争議・労働組合の波は未だ開始されたばかりであるが、反戦派労働者の政治闘争の発展・思想的発展という条件こそ、革命的労働争議の波を更に巨大にするであろう。

労働者全共闘の創出は、一方では反戦派労働者の政治闘争への結集を軸とする思想的組織的発展を条件としているのである。

だが他方では、日本労働者階級の深部に素晴らしい資本家階級との闘争・権力との闘争を闘っている数多くの闘争があり、組織があり、組合があることをわれわれは片時も忘れてはならない。

帝国主義的民主主義の下で大労働組合や上級機関は腐敗を極めているけれども、日本労働者は、戦闘的労働争議を堅持しており、戦闘的労働組合を守り創出しつつあるのだ。総評の動揺は、日本労働組合運動の左右への分解を示している。この分解を、革命派のヘゲモニーで領導するか、右翼帝国主義の手に委ねるかにひとつの根本問題がある。われわれは、革命的労働争議の波頭を創出し、革命的労働組合の結集を促し、単組・単産の戦闘化・革命化を実践する中で、日本労働組合運動の左翼的強化前進を展望するものである。この側面での前進が労働者全共闘運動の他の条件なのである。更に労働者内部、労働者組織内で、統一戦線あるいは統一戦線をめざす連合や共闘を創造的に不断に追求すべきである。

いずれにせよ、かかる問題の中心は、労働者解放戦線の更なる強化、わが同盟の更なる活動の強化の問題であることはいうまでもない。

＜最後に＞本稿はML同盟の確定された内容ではない。今ML同盟は「整風」を発展させつつあり、路線問題もその中で「闘う大衆」との接点を拡げつつ形成されつつあるものであり、文章の一切はML同盟員倉島昇の責任にある。

また、沖縄解放闘争を主柱として「入管・叛軍」を支柱とする政治路線について紙面の関係で論じつくし得ていないことをお詫びしておきい。公害・入管・女性解放運動について特にその感が深い――倉島

昭和四十六年十二月六日国鉄東局特別扱承認雑誌第一四五号
昭和三十七年十二月十三日　第三種郵便物認可
昭和四十六年一二月一日発行（毎月一回一日発行）

構造（第十巻第二号）
（通巻九十八号）

発行人　藤江三郎
編集人　大藤黎子

発行所　東京都中央区京橋二の四番地　経済構造社

振替口座　東京　五八八五四番
本社直接送分　半年　九六〇円
前金定価（郵送料共）一ケ年一、九二〇円

定価　一六〇円
送料（〒）十八円

70年代の主役ディベロッパー……三菱地所

日本の明日を築く…三菱地所

明日のレジャー産業を背う御殿場地区

住まいの夢をつくる
碑子分譲地

丸の内仲通り"ランチョンプロムナード"

工業地帯を切り開く
千葉港中央地区

三菱地所は一世紀にわたる経験と技術を生かし日本の明日を築くディベロッパーとして、地域開発、都市開発、レジャー産業、そしてあなたの住まいづくりのご相談まで真心をこめてご奉仕致しております。〝働きやすく、住みやすい日本〟を創るのが三菱地所の永遠のモットーなのです。

都市再開発から豊かな住まいづくりまで

三菱地所
東京都千代田区丸の内2丁目4番1号

雑誌コード3967

PRINTED IN JAPAN　東京・株式会社大成美術印刷所・印刷